

少年探偵長

海野十三

青空文庫

怪事件の第一ページ

まさか、その日、この大事件の第一ページであるとは春木^{はるき}少年は知らなかった。あとからいろいろ思い出してみると、その日は、運命の大きな力が、春木^{はるき}清^{よし}をぐんぐんそこへひっぱりこんだとも思われる。

ふしぎな偶然^{ぐうぜん}の出来事が、ふしぎにいくつも重なって起ったような感じだが、それもみんな、清少年の運命であつたにちがいないのだ。

奇々^{きき}怪々^{かい}なるその大事件は、第一ページにあたるその日において、ほんのちよつぴり、その切^{きり}口^{くち}を見せただけであつた。もし春木少年が、そのときにこの事件の大きさ、深さ、ものすごさ、おそろしさを半分ぐらいでも見とおすことができたなら、彼はこの事件に関係することをあきらめたであろう。それほどこの事件は、大じかけの恐怖^{きょうふ}事件であつて、とても少年の身では齒^はがたたないばかりか、大危険^{だいきげん}にまきこまれることは分りきつていたのである。

まあ、前まえおきのことばは、このくらいにしておいて春木少年がその事件の第一ページの上に、どういう工合ぐあいにして、足を踏みこんだか、それについて語ろう。

その日、春木少年は、この間から学校で仲よしになった同級生の牛丸平太郎うしまるへいたろうという身体からだの大きな少年といつしよに、日曜を利用して山登りをやっていたのである。その山登りというのは、芝原水源しばはらすいげんち地の奥にあるカンヌキ山の頂上まで登ることであつた。

春木少年が、この町へ来たのは、ほんの一カ月ほど前のことであつた。その前、彼は東京にいた。この町は関西の港町だ。

くわしいことは、いづれ後でのべる時があるから、ここには説明しないが、春木少年は、家の事情によつて、とつぜんこの港町の伯母おばさんの家へあずけられたのであつた。そして清は、近くの雪見ゆきみ中学校へ転校入学したのだつた。彼は三年生だつた。

一時はずいぶんさびしい思いもしたが、清はこの頃ではすっかりなれてしまつた。そして学校にも牛丸君のような愉快な友だちができるし、それから又港町のうしろにつらなつてゐる連山れんざんの奥ふかく遊びにいく楽しみを発見して、ひまがあれば山の中を歩きまわつた。

その日、清は、牛丸の平へいちゃんつれだと連立つて、おひるごろカンヌキ山の頂上にたどりつ

た。そこで弁当をたべ、それからそこらにある荒れ寺の境内けいだいでさんざん遊び、それから午後三時ごろになって、二人は帰途きとについた。

秋の日は、六時頃にはもうとつぷり暮れるので、午後三時に頂上を出ると、麓ふもとへ出て町へはいるときは、町にも港にも灯ひがいつぱいいついてはいるはず、すこし山の上で遊びすぎておそくなった。

そこで二人は、競走をして、山を下りることにした。

カンヌキ山を下りて、芝原水源地に近くなったところに、溪流けいりゅうにうつくしい滝がかつているところがある。この滝の名は、イコマの滝というんだそうだ。文字はたぶん生駒いこまの滝たきと書くのであろう。

カンヌキ山から出ている下り道が二つあった。東道と西道だ。この二つの道は、生駒の滝のすこし手前で出会い、いっしょになる。そこで春木少年と牛丸少年は、べつべつの道をとつてどつちが早く生駒の滝につくか、その滝の前で出会う約束で、競走をはじめたのだった。

「ぼくは、だんぜん東道の方が早いと思うね。ぼくは東道ときめた」牛丸少年はそういった。

「そうかなあ。じゃあ、ぼくは西道をかけ下りて、君より早く、滝の前についてみせる」

春木少年は、牛丸が東道をえらんだものだから、やむなく西道を下りることにしたのだ。この決定が、春木少年を例の事件にぶつからせることになった。もしこの時反対に、牛丸少年が西道をえらんだら、牛丸の方が怪事件にぶつかったことであろう。

二人は、一いチ二にイ三さンで、左右へ別れて、山を下りはじめた。

秋の日は、まだかんかん照っていた。しかしだいたいぶん低くなっていた。

春木少年の方は、口笛を吹きながら、手て製せいの杖つえをふりまわしつつ、どんどん山を下りていった。すこし心細くないでもなかったが、ときどき山の端はからはるか下界げかいの海や町が見えるので、そのたびに彼は元気をとりもどした。

二時間ばかり後に、彼はついに生駒の滝の音が聞える近くにまで来た。

「さあ、ぼくの方が早いかな。それとも牛丸君が勝ったか。なにしろ牛丸君は、この土地に生れた少年だから、山の勝手かってはよく知っている。だから、ぼくはかなわないや」

春木の方は、そういうわけで自信がなかった。

ところが、実際は春木の方が、ずっと先についたのであった。

牛丸少年の方は、途とちゆう中で手間どっていた。というのは、東道では、途中で丸木橋まるきばしが

落ちていて、そのため彼は大まわりしなくてはならなかった。本当は、東道の方が近道だったのだけれど、思いがけない道路事故のため、牛丸は春木清よりも、三十分もおくられて現場げんばにつくことになったのだ。

そして三十分もおくれたことが、二人の少年の運命の上に、たいへんなちがいをもたらした。それは一体どういうことであつたか。春木少年は、何事も知らず、生駒の滝の前へついて、

「しめた。ぼくの勝だ。牛丸君は、まだついていないじゃないか」

と、ひとりごとをいって、あたりを見まわした。滝は、大太鼓おおだいこをたくさん一どきにならずように、どうどうとひびきをあげて落ちている。春木は帽子ぼうしをぬいで、汗をぬぐった。紅葉もみじや楓かえでがうつくしい。

「おやツ」少年は目をみはった。

滝をすこし行きすぎた道の上に、誰だれか倒れているのであつた。黒い洋服を着た男であつた。

(どうしたのだろう)

様子がへんなので、清はおそるおそる、そのそばに近づいた。すると、いやなものが目

にはいった。うつむいて倒れているその洋服男のかたく握りしめた両手が、まっ赤であった。血だ。血だ。

「死んでいるのか？」

少年が、青くなつて、再び瞳をこらしたときに、洋服男の血まみれの手が少し動いて、土をひつかいた。

重傷の老人

「あ、あの人は生きているんだ」春木少年は叫んだ。

叫ぶと、そのあとは、おそろしさも何も忘れて、血染めの洋服男のそばにかけより、膝をついて、

「もしもし。しつかりなさい。どうしたのですか。どこをやられたのですか」と、呼びかけた。

そのとき少年は、この血染めの人が、かなりの老人であることを知った。顔に、髭がぼうぼうとはえ、黒い鳥打帽子がぬげていてむき出しになっている頭髪は、白毛ぞめがしてあつて、一見黒いが、その根本のところはまつ白な白毛であつた。鳥打帽子がぬげているそばには、茶色のガラスのはまつた眼鏡が落ちていた。

老人は、苦しそうに顔をあげて、春木の方へ顔をねじ向けた。が、一目春木を見ただけで、がつくりと顔を地面に落とした。全身の力をあつめて、自分に声をかけた者が何者であるかをたしかめたという風であつた。

老人は、うんうん呻りはじめた。

「しつかりして下さい。傷はどこですか」

と、春木はつづいて叫びながら老人を抱きおこした。

と、春木はつづいて叫びながら老人を抱きおこした。分つた。老人の胸はまつ赤であつた。地面におびただしく血が流れていた。傷は、弾丸によるものだった。左の頸のつけ根のところから弾丸がはいって、右の肺の上部を射ぬき、わきの下にぬけている重傷であつたが、春木少年には、そこまではつきり見分ける力はなかつた。しかし傷口があることは彼にもよく見えたので、そこを早くしばつてあげなくてはならないと思つた。

しばらくものがない。繻帯ほうたいがあればいいんだが、そんなものは持合わせがない。

どうしようか。そうだ。こうなれば服の下に着ているシャツと、それから手拭てぬぐいとを利用するほかない。春木少年は実行家じつこうかだったから、そう決心するとまず老人を元のようにねかし、それから急いで服をぬぎすて、縞しまのシャツをぬぐと、それをベリベリと破つて長いきれをこしらえ、端と端とつなぎあわせた。手拭もひきさいて、それにつないだ。

「これでよし。さあ出来た。おじさん、しつかりなさい。傷口かに仮かの繻帯をしてあげますからね」

そういつて春木は、再び老人を抱きおこして、上向きうわむにした。

老人は口から、赤いものをはき出した。胸をやられているからなのだ。少年は、絶望の心をおさえ、老人をしきりにはげましながら、傷口をぐるぐる巻いてやった。

その間に、老人は苦しそうにあえぎながら、目をあげたり、しめたりしていたが、少年がしてくれた傷の手当がすんで、しずかに地面にねかされたとき、

「あ、ありがとう。か、神の御子みこよ……」

と、しわがれた聞きとれないほどの声で、春木少年に感謝した。そのとき老人ののどが、ごろごろと鳴って、口から赤い泡立ったものがだらだらと流れだした。

「ものをいっては、だめです。おじさんは、胸に傷をしているのですからね」老人は、かすかにうなずいた。

「さあ、これからどうしたらいいか。ぼく、山を下りて、誰かを呼んで来ますから、苦しいでしょうが、しばらくがまんして下さい」

そういつて春木は、老人のそばから立ち上つて、ふもとへ走ろうとしたが、そのとき、老人が一声高く叫んだ。

「お待ち」

「えッ」

「そばへ来てください」

「なんですか。そんなに口をきくと、また血が出ますよ」

春木は、老人のそばへ膝をついた。

「もう、もう、わしはだめだ。あなたの親切にお礼をしたいから、ぜひ受けて下さい。今、そのお礼の品物を出すから、ちよつと、横を向いて下され」

「お礼なんて、ぼくは、いいですよ。大したことはないんだから」

「いや、わしはお礼をせずにはいられない。それにこのまま、わしが死んでしまえば、莫^ば

くだい
大なる富の所在ありかを解く者がいなくなる。ぜひあんたにゆずりたい。あんたは、何という名前かの」

老人は、苦しそうにあえぎ、赤い泡をふき出しながら、少年に話しかける。その事柄は、真まことか偽いつわりかはつきりしないが、とにかく重大なことだ。

「ぼくは、春木清はるきよよしというのです」

「ハルキ・キヨシ。いい名前だな。ハルキ・キヨシ君に、わしは、わしの生命いのちの次に大切にしていたものをゆずる。キヨシ君。すまんがわしをもう一度、うつ向けにしておくれ」

春木少年は、老人のいうとおりにした。

「キヨシ君。わしがいいというまで、ちよつと横を向いていておくれ」

老人は、へんなことをいった。しかし少年は、いわれるとおりにした。

老人は、ふるえる手を、自分の目のところへ持っていった。それから彼は、指先で右の目のところをもんでいた。そのうちに、老人の指先には、白い球たまがつまみあげられていた。卵たまご大ではあるが、卵ではなく、一方に黒い斑はんでん点がついていた。

義眼ぎがんであった。老人の右の目にはいつていた入れ目であった。

「さ。これをキヨシ君に進しんてい呈する」

老人は、気味のわるい贈物を、春木少年の方へさしだした。
 なんということであろう。老人は気が変になつたのであろうか。

春木少年は、まさか義眼とも思わず、それを卵か石かと思つて受取つた。

もらつた義眼ぎがん

「これは何ですか。これはどんな値打ねうちのあるものですか」

少年は、老人の義眼を、手のひらの上でころがしてみながら、不審ふしんがった。

そのとき滝のひびきの中に、別の物音がはいつて来た。ブーンと、機械的な音であつた。
 春木少年はまだ気がついていなかつたが、老人の方が気がついて、びっくりした。

「おお、キヨシ君。悪い奴やつがこつちへ来る。あんたは、早くそれを持って、洞穴ほらあなか、岩
 かげかに早くかくれるんだ。早く、早く。いそがないと間にあわない。そして、空から絶
 対にあんたの姿が見られないように、気をつけるんだ。さあ。早く……」

「どうしたんですか。そんなにあわてて……」

「わしを殺そうとした悪者わるものの一派が、ここへやって来るのだ。あんたの姿を見れば、あんたにも危害きがいを加えるだろう。よくおぼえているがいい。悪者どもが、ここを去るまでは、あんたは姿を見せてはならない。身体を動かしてはならない。あんたは今、わしからゆずられた大切な品物を持っているということを忘れないように。さ、早くかくれておくれ」

老人は、気が変になったように、わめきつづける。

春木少年は、重傷の老人がこの上あんな声を出していたら、死期しきを早めるだろうと思っただから早く老人のいうとおり、岩かげかどつかへかくれるのが、老人のためになると思っ、立ち上った。

が、老人にたずねなくてはならないことが、たくさんあった。

「この卵たまごみたいなものをどうすればいいんですか」

「な、中をあけてみなさい。早くかくれるんだ。だんだん空から近づくとあの音が聞えないのか。早く、早く」

そういわれて春木少年は気がついた。頭の上からおしつけるような、ごうごうたる物音がしている。でも、もう一つ老人に聞いておかねばならないことがあった。

「おじさん。おじさんの名前は、なんとこののですか」

「まだ、そこにぐずぐずしているのか」

重傷の老人は腹立たしそうに叫んだ。

「わしの名はトグラだ」

「トグラですか」

「戸倉八十丸だ。早くかくれる。一刻も早く！ さもなきや、生命がない。世界的な宝

もうばわれる。早く穴の中へ、とびこめ。あのへんに穴がある。だが、気をつけて……」

老人の声は、泣き叫んでいるようだ。

春木は、今はこれ以上、老人をなやませては悪いと思った。そこで、瀕死の老人の指した方向へ走った。大きな岩が出ていた。滝つぼとは反対の方だ。

彼が、岩のかげにとびこんだとき、頭上にびっくりするほど大きいものが、まい下つてきた。

ヘリコプターだった。竹とんぼのような形をした大きな水平にまわるプロペラを持ち、そして別にもう一つ小さなプロペラをつけた竹とんぼ式飛行機だった。

ヘリコプターは、宙に浮いたように前進を停止し、上下に自由に上つたり、下つたりで

きる飛行機である。だから、滑走場かつそうじょうがなくても飛びあがることができ、またせまい屋お上くじょうへ下りることもできる。

そのようなヘリコプターが、夕闇ゆうやみがうすくかかって来た空から、とつぜんまい下りて来たので、春木少年はおどろいた。

なぜであろう。ヘリコプターが、なに用あつてまい下りてくるのであろう。

戸倉老人が、恐怖していたのは、そのヘリコプターであろうか。

春木少年は岩かげにしゃがんで、この場の様子ようすをうかがった。ヘリコプターは、垂すいちちよ直くに下つてきた。

と、ぱつとあたりが昼間のように明るくなった。ヘリコプターが探照灯たんしょうとうを、地上へ向けて照らしつけたのだ。

「あッ」春木少年は、岩にしがみついた。

ぎらぎらと、強い光が、春木少年の左の肩を照らしつけた。

少年は、なんととはなしに危険を感じ、しずかに身体を右の方へ動かして、ヘリコプターの探照灯からのがれようとした。

しかし探照灯は追いかけて来るようであった。

春木は、岩にぴつたりと寄りそったまま、身体を右の方へ移動していった。

すると、彼はとつぜん身体の中心を失った。右足で踏んでいた土がくずれ、足を踏みはずしたのだった。そこには草にかくれた穴があった。身体がぐらりと右へ傾く。かたむ「あツ」という間もなく、彼の身体は穴の中へ落ちこんだ。両手をのばして、岩をつかもうとしたが、だめだった。

少年の身体は、深く下に落ちていって、やがて底にたたきつけられた。それは、わりあいにやわらかい土であったが、彼はお尻しりをしたたかにぶっつけ、「うん」と呻りうな声をあげると、気を失った。

気を失った少年のそばに、戸倉老人がゆずり渡した疑問の義眼が一つころがっていた。そして義眼の瞳は、まるで視力があるかのように、上に丸く開いている空を凝視ぎようししていた。

空中放れ業はなわぎ

穴の中に落ちこみ、気を失ってしまった春木少年は、その直後に起った地上の大活劇だいかつげきを見る事ができなかつた。

まったく、彼の思いもかけなかつたような活劇の幕が、そのとき切つて落されたのであつた。

ヘリコプターから、とつぜん、だだだだッ、だだだだッと、はげしい機関銃が鳴りだし、弾丸たまは、戸倉老人の倒れている身辺しんぺんへ、雨のように降りそそいだ。弾丸が地上に達して石にあたると、ぴかぴかッと火花が光り、それが夕暮のうす闇の中に、生き物のようにおどつた。だが、弾丸は、戸倉老人のまわりに落ちるだけで、老人の身体は突き刺さなかつた。

「うわッ、なんだろう」滝つぼの正面の道路の上に、少年の姿があらわれた。春木ではなかつた。牛丸少年であつた。彼はようやく生駒いこまの滝たきの前に今ついたのであつた。彼にはまだこの場の事態じたいがのみこめていなかつた。だから身の危険を感じることもなく、道のまん中に棒立ちになつて、火花のおどりを、いぶかしく眺ながめたのであつた。

が、一瞬ののち、彼は戸倉老人の倒れている姿を認めた。また、つづいて起つた銃声の

すさまじさによって、はつと身の危険を感じた。

「あ、あぶない」牛丸少年は、身をひるがえすと、かたわらの大きな柿かきの木に、するするとのぼった。牛丸は、木登りが得意中の得意だった。だから前後の考えもなく、柿の木なんかによじ登ったのである。それは、彼のために、幸福なことではなかった。

そのときヘリコプターは、戸倉老人のま上まできた。胴どうの底に穴があいて、そこから一本のロープがゆれながら、まい下ってきた。

すると、ロープを伝わって、一人の男がするすると下りてきた。そのときロープの先は地上についていた。その男は、カーキ色の作業衣さぎよういに身をかためた男だった。その男も倒れている戸倉老人も共に探照灯の光の中にあつた。

老人は、死んでしまったように、動かない。

牛丸少年は、柿の枝につかまって、この有様をびっくりして眺めている。

作業衣の男は、ついに地上に足をつけた。ロープを放して、戸倉老人の方へ走りよった。そして膝について老人の身体をしらべだした。彼のために、老人は二三度身体を上向きに又下向きにひっくりかえされた。

しばらくすると、作業衣の男は立上って、手をふって、上のヘリコプターへ、合図あいずのよ

うなことをした。ヘリコプターの胴の窓からも、一人の男が上半身を出して、下へ手をふって合図した。

下の男は、分つたらしく、合図に両手を左右へのばした後で、ロープの端を手にとって、戸倉老人に近づくと、老人の身体をロープでぐるぐる巻きにしぼりつけた。

それから自分は、老人よりもロープの上の方にぶら下った。

それが合図のように、ロープはぐんぐんヘリコプターの方へ巻きあがっていった。ヘリコプターは、宙に浮いて、じつとしている。この有様を、牛丸少年は、あつけにとられて柿の木の上から見ていた。

ところが、とつぜん作業衣の男が、片手をはなして、牛丸少年の登っている柿の木を指した。と、ぱつと強い探照灯の光が牛丸少年の全身を照らしつけた。

「うわツ。たまらん」牛丸平太郎は生れつきものおじをしない楽天家であったが、このときばかりは、もう死ぬかもしれないと思った。彼は目がくらんで、呼吸いきをすることができなくなった。彼は懸命に、両手と両足で、柿の木の枝にしがみついていた。目は、全然も
のを見分ける力がなくなった。

「柿の木の上で、目はみえず」

ヘリコプターの音が遠のいていったのが分ったとき、牛丸は、ひとりごとをいった。俳句になるぞと思った。

このとき、ようやくすこしばかり、ものの形が見えるようになった。

「ひどい目にあわせよつた」

彼は、そろそろと柿の木から、すべり下りていった。

牛丸少年は、滝の前に、小一時間もうろうろしていた。もうまつくらな中を、あたりを探しまわつた。

「おい。春木君やーい」と、何十ぺんも、友だちの名を呼んでみた。しかしその返事は、彼の耳に聞えなかつた。その間に、彼は、倒れていた人のあとへも行ってみた。そこには、血の跡らしいものが黒ずんで地面を染めているのを見た。

「誰だろう、ここに倒れていた人は」

彼には事情が分らなかつた。

ヘリコプターで救助作業をやつたのかもしれないが、しかしその前に、はげしい銃声のようなものを聞いた。それを聞きつけたから、彼はびっくりして柿の木へ登つたのだ。彼は後で考えて、「ぼくは、あのときは、なんてあわてん坊であつたらう」と苦笑したこと

だった。

いつまでたっても、春木君がやってこないの、一時間ばかりたった後に、牛丸少年は、ひとりで川を下りていった。

牛丸はなんにもしらなかつた、ここにふしぎなことがあつた。それは、戸倉老人の身体からはなれてとび散らばっていた老人の帽子も眼鏡も、共にそのあとに残っていないかつたことである。

それにしても、重傷の戸倉老人を拾つていった、ヘリコプターに乗っていた者は、何者であつたらうか。

老人を救助に来た者だとは思われない。もし救助に来た者ならば、老人は春木少年の前であのように恐怖してみせるはずはないのだ。

すると、あのヘリコプターは、戸倉老人のためには敵手てきしゅにあたる連中が乗つていたものであろうか。

この生駒の滝を背景とした血なまぐさい謎なぞにみちたひとまく一幕こそ、やがて春木清が少年探偵長として全世界へ話題をなげた奇々怪々なる「黄金おうごんメダル事件」へ登場するその第一幕であつたのだ。

穴からの脱出

岩かげの穴の中に落ちこんだ春木少年は、まだ牛丸君がその附近にいた間に、われにかえることができた。

彼は、牛丸君が自分を呼ぶ声をたしかにきいた。そこで彼は、穴の中で返事をしたのである。いくども牛丸君の名を呼んで、自分がここにいることを知らせたのである。しかし牛丸君は、ほかの方ばかりを探していて、春木が落ちこんでいる穴の上には近よらなかつた。

そのうちに牛丸は、あきらめて、生駒の滝の前をはなれ、ふもとへ通ずる道をおりていった。

あとに残されて穴の中にひとりぼっちになった春木のまわりはだんだん暗くなってきた。彼は、お尻をさすりながら、あたりを見まわした。

「あッ、あの球だ」彼は、そばに戸倉老人の義眼ぎがんが落ちているのを見つけると、あわてて拾いあげた。

「何だろう。ふしぎなものだなあ。おやおや、目玉みたいだぞ。こつちをにらんでいる。ああ気味きみがわるい」

あまり気味きみがわるいので、彼はそれをポケットの中へしまった。

「さあ、なんとかして、この空からつぽの井戸からあがらなくては」

見ると、空井戸からいどの底には、横向きよこむきの穴があった。人間がやつとくぐってはいれるほどの穴だった。しかし、気味きみがわるくて、春木ははいる気がしなかった。彼は立上った。そして上を向いていろいろとしらべてみたが、そこには上からロープもなにも下っていないなかった。深さは十四五メートルらしい。

「土の壁が上までやわらかいといいんだがなあ。そしてなにか土を掘るものがあるといいんだが。待てよ、ナイフを持っているからこれで掘ってやろう」

春木は、空井戸からいどの土壁つちかべに、足場の穴を掘り、それを伝って上へあがることを思いついた。そこで、早速さつそくその仕事を始めた。

それは手間のかかる仕事であったが、少年は根気こんきよく土の壁に足場を一段ずつ掘ってい

つて、やがて穴のそとに出ることができた。

「やれ、ありがたい」春木は、そこで大きな溜息ためいきを一つして、あたりを見まわした。あたりはまつくらであつた。そしてまつ暗闇の中から、滝の音だけがとうとうと鳴りひびき、いつそう気味のわるいものにしていた。

ただ晴夜せいやのこととて、星だけが空にきらきらと明るくかがやいていた。しかし星あかりだけでは、道と道でないとこの区別はつかなかつた。彼は、山を下りることを朝まで断だ念んねんするしかないと思つた。むりをして下りれば、足をふみすべらして谷底へ落ちるおそれがある。

「しようがない。今夜、滝の音を聞きながら野宿のじゆくだ」

春木は、草の上に尻餅しりもちをついた。決心がつけば、野宿もまたおもしろくないこともない。ただ、明日あしたになつて、伯母おばたちに叱しかられるであろうが、それもしかたなしだ。

春木は、急に腹が空すいているのに気がついた。ポケットをさぐつたが、例のへんな球の外になんにもない。みんなたべてしまったのだ。

そのうちに寒くなつて来た。秋も十一月の山の中は、更けると共に気温がぐんぐん下つていくのであつた。

「ああ、寒い。これはやり切れない」空腹はがまんでできるが寒いのはやり切れない。どうかならないものか。

「あッ、そうだ。ライターを持つていた」

こういうときの用心に、彼はズボンのポケットに火縄式ひなわしきのライターを持つていることを思いだした。そうだ。ライターで火をつけ、枯れ枝をあつめて、どんだんたき火をすればいいのである。少年は元気づいた。

火縄式のライターは、炭火すみびのように火がつくだけで、ろうそくのように焰ほのおが出ない。それはよく分っていたが、彼はこの前、火縄の火に、燃えあがりやすい糸くずを近づけて、ふうふう息をふきかけることにより、糸くずをめらめらと燃えあがらせて、焰をつくった経験があつた。その経験を今夜いかして使うのだ。

彼は、服の裏をすこしさいて、糸くずと同様のものをこしらえ、それにライターの火縄の火を燃えあがらせることに成功した。焰はめらめらと、赤い舌をあげて燃えあがった。その焰を、枯れ草のかたまりへ移した。火は大きくなった。こんどは、それを枯れ枝の方へ移した。火勢かせいは一段と強くなった。それから先はもう困らなかつた。明るい、そしてあたたかい焚火たきびが、どんどんと燃えさかつた。

あたたかくなり、明るくなったので、春木少年はすっかり元気になった。附近から枯れ枝をたくさん集めて来た。もう大丈夫だ。

火にあたっていると、ねむくなりだした。昼間からの疲れが出て来たものらしい。

しかしここで睡ねむってしまつては、焚火も消えてしまい、風邪をひくことになるであろうと、彼は気がついた。そこで、なんとかして睡らない工夫をしなくてはならない。彼は考えた。

「そうだ。さつき戸倉のおじさんからもらった球をしらべてみよう」

それは、この際うつつけの仕事だった。少年はポケットから、例の球を出した。火にかざして、彼ははじめてゆつくりとその品物を見たのだ。

「やツ。これは眼玉だ。気持が悪い」

彼はぞつと背中が寒くなり、眼玉を手から下へとり落とした。眼玉は、ころころところがって、焚火のそばまでいった。

「待てよ。あれはほんとうの眼玉じゃないらしい。ああ、そうだ。義眼だろう、きつと」
彼は、自分があわてん坊だったのに気がついて、おかしくなり、ひとりで笑った。

「あ、眼玉があんなどころで、焼けそうになっている。たいへん、たいへん」彼はあわて

て、もえさしの枝を手にとると、焚火のそばから義眼を拾い出した。

「あちちちツ」義眼はあつくなくて、彼の手を焼いた。彼の手から義眼は再び地上に落ちた。すると義眼は、まん中からぱつくりと、二つに割れた。

それは春木少年のためには、幸運であったといえる。なぜなら、火で焼けでもしなければ、この義眼を開けることは、なかなかむずかしいことであったから、つまりこの義眼は、一種の秘密箱であったのだ。この球を開くには、どんなにしても一週間ぐらい考えなくてはならなかったのだ。少年は幸運にもその球きゅうけい形の秘密箱を火のそばで焦がしたがために、秘密箱のからくりは自然に中ではずれ、彼が二度目に手から地面の上へ落とすと、ぱつくりと二つに割れたのである。しかし、これには春木少年はおどろいて、目をぱちくりした。

「おや。中になにかはいつているぞ。ああそうか。あれなんだな。あのおじさんのいったことは嘘うそでないらしい」

莫ぼくだい大なる富だ。世界的の宝だ。いったいそれは何であろうか。

春木少年は、手をのばして、二つに割れた戸倉老人の義眼を手にとって調べた。

「ああ、こんなものはいっている」

義眼の中には、絹きぬのようなきれで包んだものがはいつていた。中には、なにかかたいものがある。

絹のきれをあけると、中から出て来たのは半月形はんげつがけいの平つたい金属板だった。かなり重い。そして夜目にもぴかぴかと黄いろく光っている。そしてその上には、うすく浮彫うきぼりになって、横を向いた人の顔が彫ほりつけてあり、そのまわりには、鎖くさりと錨いかりがついていた。裏をかえしてみると、そこには妙な文字のようなものが横書よこがきになって数行、彫りつけてあった。しかしそれがどこの国の文字だか、見たことのないものだった。古代文字こだいもんじというよりも、むしろ音符おんぷごう号ごうのようであった。

「金貨の半分みたいだが、こんな大きな金貨があるんだろうか。とにかく妙なものだ。いったいこれは何だろうか」

と、彼はそのぴかぴか光る二つに割られた黄金のメダルを、ふしぎそうに火にかざして、いくどもいくども見直した。

「字は読めないし、それに半分じゃ、しようがないが、これでもあのおじさんがいったように、これが世界的な莫大な富と関係があるものかなあ」

せつかくもらったが、これでは春木少年にとつてちんぷんかんぷんで、わけが分らなか

った。

さあ、どういうことになるか。

そのとき、一陣の山風がさつと吹きこんできて、枯葉がまい、焚火の焰が横にふきつけられて、ぱちぱちと鳴った。すると少年のすぐ前で、ブーツと燃え出したものがある。

「あつ、しまった」

それは、この半月形の黄金メダルを包んであった絹のきれだった。それには文字もんじが書いてあることがそのとき始めて春木少年の注意をひいたのである。火は、その絹のハンカチーフみたいなのを、ひとなめにして焼きつくそうとしている。少年は、驚いて、火の中へ手をつっこみ、燃える絹のきれをとりだすと、靴でふみつけた。

火はようやく消えた。

「やれやれ。もちつとで全部焼いてしまうところだった」

焼け残ったのはその絹のハンカチーフの半分よりすこし小さい部分だった。それにはこまかく日本文字が書いてあった。少年は、その文字を拾って読み出したが、なにしろ半分ばかりが焼けてしまったので、その文字はつながらなかった。

だが、少年は読めるだけの文字を拾っていた。が、急に彼は顔をこわばらせると、

「ああ、これはたいへんなものだ」と叫んだ。にわかには彼の身体はぶるぶるとふるえだして、とまらなかつた。

なぜであろうか。

いったいその焼けのこりの絹のきれは、どんなことが書いてあつたらうか。そして半月形の黄金のメダルこそ、いかなる秘密を、かくしているのだろうか。

深山しんざんには、にわかには風が出て来た。焚火の火の子が暗い空にまいあがる。

六天山塞ろくてんざんさい

さて、戸倉老人をさらつていったヘリコプターはどこへ飛び去つたか。

ヘリコプターは、暮色ぼしよくに包まれた山々の上すれすれに、あるときは北へ、あるときは東へ、またあるときは西へと、奇妙な針路をとつて、だんだんと、奥山へはいりこんだ。

約一時間飛んでからそのヘリコプターは、闇の中をしずしずと下降し、やがて、ぴつた

りと着陸した。

その場所は、どういう景色のところか、その飛行場はどんな地形になっているのか、それは肉眼にくがんでは見えなかった。なにしろ、日はとつぷり暮れ、黒白も見わけられぬほどの闇の夜だったから。ただ、銀河ばかりが、ほの明るく、頭上を流れていた。

このヘリコプターには、精巧なレーダー装置がついていたから、その着陸場を探し求めて、無事に暗夜あんやの着陸をやりとげることが、わけのないことだった。レーダー装置は、超短電波を使って、地形をさぐったり、高度を測ったり、目標との距離をだしたりする器械で、夜間には飛行機の目としてたいへん役立つものだ。

こうしてヘリコプターは無事着陸した。しかもまちがいなく六天山塞へもどって来たのである。

六天山塞とは、何であるか？

この山塞について、ここにくわしい話をのべるのは、ひかえよう。それよりも、ヘリコプターのあとについていって、山塞のもようを綴つづった方がいであろう。

そのヘリコプターが無事着陸すると、操縦席から青い信号灯がうちふられた。

すると、ごおーツという音がして、大地が動きだした。ヘリコプターをのせたまま、大

地は横にすべっていった。

それは大仕掛な動く滑走路かつそうろであつた。細長い鉄片を組立ててこしらえた幅五メートルの滑走路で、動力によつてこれはベルト式運搬機うんぱんきのように横にすべって動いていく。そうしてヘリコプターは、山腹さんぶくにあけられた大きな洞門どうもんの中へ吸いこまれてしまった。それから間もなく、動く滑走路は停とまつた。そしてうしろの洞穴のあたりで、がらがらと鉄扉のしまる音が聞えた。

その音がしなくなると、とつぜんぱつと眩まぶしい光線がヘリコプターの上から照らしつた。洞門の中の様子が、その瞬間に、はつきりと見えるようになった。そこは建築したばかりの大工場で、この一棟ひとむねへはいつた。土くれの匂いなどはなく、芳香を放つ脂あぶらの匂いがあつた。そして壁も天井も明るく黄いろく塗られて、頑がん丈じょうに見えた。ただ床だけは、迷彩めいさいをほどこした鋼材こうざいの動く滑走路がまん中をつらぬいているので、異様な気分をありたてる。

ばたばたと、ヘリコプターをかこんだ五六名の腕ぶしの強そうな男たちは、ピストルや軽機銃けいきじゆうをかまえてヘリコプターの搭乗者とうじょうしゃへ警戒の目を光らせる。彼らの服装は、まぢまちであり、背広があつたり、作業衣であつたりした。

すると機胴きしょうの扉かがあいて、一人の長髪の男が顔をだした。彼は手を振って、

「大丈夫だ。奴やつこさんはもうあばれる力ちからなんかないよ」

といった。この男は、生駒いごまの滝たきの前まへで、縄なばしご伝でんいにヘリコプターから下りてきて、戸倉老人を拾いあげた男だった。波立二なみたつじとって、この山寨では、にらみのきく人物だった。

そのとき、奥から中年の男が駆けだしてきて、波立二に声をかけた。

「おい。戸倉はまだ生きているか。心臓の音を聴いてみてくれ」心配そうな顔だった。

「脈はよくありませんよ。でもまだ生きています」

「新しく傷を負わせたのじやなかろうね。そうだったら、頭目とうもくのきげんが悪くなるぜ」

「ふん、木戸きどさん、心配なしだよ。おれがそんなへまをやると思いますか。射撃にかけて

は——」

「そんならいいんだ。担架たんかを持つてくるから、そのままにしておいてくれ」

木戸とよばれた中年の男は、ほつとした面持おももちになって、うしろを振返った。担架をかついで一隊が、停ったエレベーターからぞろぞろとでてくるのが見えた。

その中に、ひとりいやに背の高い人物が交まじっていた。首が長くて、ほんとに鶴つるのようで

ある。顔は凸凹でこぼこがはげしくて岩を見るようで、鼻が三角錐さんかくすいのようにとがって前へとびだしている。もうひとつとびだしているのは、太い眉毛まゆげの下の大きな両眼だ。鼻の下には、うすい髭ひげがはえている。かますの乾物のように、やせ細っている彼。そして背広の上に、まっ白の上つぱりを長々と着て、大股おおまたですたすたとやって来、ものもいわずにヘリコプターの上へ登ってはいった。

彼は、すぐでてきた。そして木戸の前に立つて、ものいいたげに相手を見下ろした。

「どうだね、机博士つくえ」木戸は、さいそくするように、机博士の小さく見える顔を仰いだ。

「ふむ、頭目の幸運てえものさ。このおれ以外の如何いかなる名医にかけても、あの怪我人けがにんはあと一時間と生命がもたないね」

机博士は、表情のない顔で、自信のあることばをいい切った。

「ほう、助かるか」木戸は顔を赤くした。

「ではすぐ手当をしてもらうんだ。頭目は、すぐにも戸倉をひき寄せて、話をしたいんだろうが、いったいこれから何時間後に、それができるかね」

「世間並せけんなみにいえば、三週間だよ」

「君の引受けてくれる時間だけ聞けばいいんだ」

「この机博士が処置をするなら今から六時間後だ。それなら引受ける」

「よし、それで頼む。頭目に報告しておくから」

「今から六時間以内は、どんなことがあってもだめ。一語も聞けないといっておいてくれたまえ。銃弾は際どいところで、心臓を外れているが、肺はめちやめちやだ。ものをいえば、血とあぶくがぶくぶく吹きでる。普通ならすでに、この世の者ではないさ。しかし奴さん、うまい工合に傷の箇所かしよに、血どめのガーゼ——ガーゼじゃないが、きれを突つっこ込んで、器用にその上を巻いてある。奴さんにとっては、これはうちの頭目以上の幸運だったんだ」

博士はひとりで喋しゃべった。

「手術はここでするから、医局員でない者はどこかへ行ってもらいたいね」

「え、ここでするのか、机博士」

「そうさ。どうして、この重態の病人を、動かせるものかね。狭くても、しようがないやね」

と、博士はいった。

「電気の手意ができました」

部下の合図があった。博士は再びヘリコプターの座席へもぐりこんだ。

男装の頭目

それにつづく同じ夜、正確に時刻をいうと、午前二時を五分ばかりまわった時であった。この六天山塞の指揮権を持つている頭目の四馬劍尺は重傷の戸倉老人と会見することになった。

戸倉老人は、車がついている椅子にすっかりゆわきつけられたまま、四馬頭目の待つている特別室へ運ばれこまれた。そのそばには机博士が、風に吹かれている電柱のようなところ、つきそっていた。

頭目は、ゆつたりと椅子から立ちあがり、カーテンをおし分けて、戸倉老人の方へ歩みよつた。

彼の風体は、異様であつた。

四馬劍尺は、六尺に近いほどの長身であつた。そしてうんと肥えていたので、横綱にし

でもはずかしくないほどの体格だった。彼はそのりっぱな身体を長い裾すそを持った中国服に包んでいた。彼の両手は、長い袖そでの中にかくれて見えなかった。

その中国服には、金色の大きな竜りゅうが、美しく刺繡ししゅうしてあった。見るからに、頭かぶが下るほどのすばらしい模様であった。

四馬剣尺の顔は見えなかった。

それは彼が、頭の上に大きな笠形の冠かんむりをかぶっていたからで、その冠のまわりのふちからは、黒い紗しやで作った三重の幕が下りていて、あごの先がほんのちよつぱり見えるだけで、顔はすっかり幕で隠れていた。

「おい、戸倉。今夜は早いところ、話をつけようじゃないか」頭目四馬は、おさえつけるような太い声で戸倉老人にいった。

戸倉は、青い顔をして、椅子車いすぐるまの背に頭をもたせかけ、黙りこくっていた。死んでしまったのか、睡っているのか、彼の眼は、茶色の眼鏡の奥に隠れていて、あいているのか、ふさいでいるのか分らないから、判断のつけようがない。

「おい、返事をしないか。今夜は早く話をつけてやろうと、こっちは好意を示しているのに、返事をしないとは、けしからん」

そういつて四馬は、長い袖をのぼすと、戸倉の肩をつかんで揺ぶろうとした。

「おっと待った、頭目」と、とつぜん停めた者がある。机博士であった。彼は、頭目の前へ進みでた。

「頭目。あんたから、わが輩が預っているこの怪我人は、奇蹟的に生きています。手荒なことをして、この老ぼれが急に死んでしまっても、わが輩は責任をおわんですぞ。一言おことわりしておく次第である」

机博士は、俳優のように身ぶりも大げさに、戸倉老人が衰弱しきっていることを伝えた。「ちかごろ君の手術の腕前もにぶつたと見える」

「肺臓の半分はめちやめちやだった。それを切り取ってそのかわりに一時、人工肺臓を接続してある。当人が、自分の手で人工肺臓を外すと、たちまち死んでしまう。つまり自殺に成功するわけだ。だからこのとおりの椅子にしばらくつけてあるわけだ。当人があばれん坊だからしばらくつけてあるわけではない。以上、責任者として御注意しておきます」

と、机博士は手を振り足を動かし、ひびのはいったガラスのコップのような戸倉老人の健康状態を説明すると、うやうやしく頭目に一礼して、椅子車のうしろへ下った。

「博士。しかしこの老ぼれは、喋れないわけじゃなからう」

「ここへ担ぎこまれたときは、血のあぶくをこぼこぼ口からふきだして、お喋りは不可能だった。が、今手当をしたから、発声はできます。もつとも当人が喋る気にならないと喋らないでしょうが、それはわが輩の仕事の範囲ではない」

戸倉老人に返事をさせるか、させないかは、頭目、あんたの腕次第だよ——と、いわないばかりだった。

「ふん」頭目は、つんと首をたてた。「わしは知りたいたいと思ったことを知るだけだ。相手が柿の木であろうと、人間であろうと、太陽であろうと、返事をさせないではおかぬ。それに、このごろわしは気が短くなつて、相手がぐずぐずしていると、相手の口の中へ手をつっこんで、舌を動かして喋らせたくなるんだ。すこしらんぼうだが、気が短いんだからしょうがない」

机博士も木戸も、その他の幹部たちも、おたがいの顔を見合した。頭目がそんなことをいうときには頭目はきつとすごいことをやって、部下たちをびっくりさせるのが例だった。その前に、頭目は、しっかりとした計画をたてておく。それからそれに向つてぐんぐん進めるのだった。だから、成功しないことはなかった。らんぼう者のように見えながら、その実はどこまでも心をこまかく使い、抜け目のないことをする頭目だった。部下たちが、

頭目に頭が上らないのも、そこに原因があった。

はたして、その夜のできごとは、後日になって部下たちがたびたび思いださないではないられないほどの、重大な意味を持っていた。その重大なるできごとは、今、彼らの目の前でくりひろげられようとしているのだ。

「おい、戸倉。きさまの生命いのちを拾って、ここへ連れてきてやるまでには、三人の生命がぎせいになつていなのだぞ。きさまを救うためにきさまを襲撃した二人連れのらんぼう者を撃ち倒たおしたのは、わしの部下だった。可哀かわいそうに自分も撃たれて生命を失った。死ぬ前に、彼は携け帯たい用よう無電機むでんきでその場のことをくわしくわしのところへ報告してきた。報告が終ると彼は死んだのだ。いい部下を、きさまのために失ってしまった。わしは、きさまから十分な償いを受けたい」

「私だつて、ひどい目にあつている。おたがいさまだ」

戸倉老人が、はじめて口をきいた。軽けい蔑べつをこめた語調ごちようだ。

「ふん。なんとでもいうがいい」頭目四馬は軽くうけ流すと、一步前進した。「そこでわしは取引を完了したい。おい、戸倉。きさまが持っている黄金おうごんの三日月みかつきを、こっちへ渡してしまえ」

四馬がずばりと戸倉老人に叩きつけたことば！ それはあの黄金メダルの片われを要求しているのだった。

「なにが欲しいんだか、私にはちんぷんかんぷんだ」

老人は、いよいよ軽蔑をこめていう。

「こいつが、こいつが……。きさまが黄金の三日月を知らないことがあるか。きさまが持っていることは、ちゃんと種があがっているんだ。早く渡してしまった方が、とくだぞ」

「わしはそんなものは知らない。もちろん、持つてはいない。いくどきかれても、そういうほかない」

戸倉老人の語調は、すこし乱れてきた。机博士はうしろで注射薬のアンブルを切る。

「知らないとはいわせない。では、これを見よ」

四馬は、とつぜん右手で長い左の袖をまくりあげた。左の手首があらわれた。そのおや指とひとさし指との間に支えられて、ぴかりと光る小さな半月形はんげつがたのものがあつた。例の黄金メダルの片われであつた。しかしこれは春木少年が今持つているあの片われとは形がちがつていた。

つまり、春木少年の持つているのは、片われにちがいないが、半分よりすこし大きく、

メダルの中心から角をはかると、百八十度よりも二十度ばかり大きい。今、四馬が指の先につまんで見せたのは、半分より小さいもので、扇おうぎがた形かたちをしている。

それを頭目は戸倉の前へつきつけた。

「どうだ。これが見えないか」

「あツそれだ。や、汝なんじが持つていたのか。ちえツ」

戸倉老人は、かん高い声で叫ぶと、手を延のばそうとした。しかし手足は、椅子車に嚴重にしぼりつけられてあつて、手を延ばすどころではない。彼は残念がつて、かつと口をあくと、頭目のさしだしている黄金メダルを目がけて、かみついた。

「おつと、らんぼうしては困る。はっはっはっ」

頭目は、あやういところで、手を引いた。

「はっはっはっ。これが欲しいんだな。きさまにくれてやらないでもないが、その前に、きさまが持つている他の半分をこつちへだせ。一週間あずかつたら、両方とも、きれいきさまに返してやる。どうだ、いい条件だろうか。うんといえ」

このとき戸倉は、ぐったりとして、頭を椅子の背につけた。目をむいているのか、目をしてしているのか、それは茶色の眼鏡にさえぎられて分らないが、彼の両肩がはげしく息を

ついているところを見ると、戸倉老人は今なんともいえない悪い気持になって苦しんでいるものと思われる。もちろん、彼は頭目の話しかけに、一度もこたえない。

「黙っているのは、わからんじやないか。わしは早い取引を希望しているのだ。おい、戸倉。きさまが黄金三日月をかくしている場所をわしが知らないとも思うのかい」

それを聞いて戸倉老人は、ぎよつと身体をかたくした。

「ははは。今さらあわててもだめだ。わしは気が短い。欲しいものは、さっそく手に入れる。まず、これから外^{はず}して……」

四馬の手が、つと延びた。と思うと、戸倉老人がかけていた茶色の眼鏡が、頭目の手の中にあつた。眼鏡をもぎとられた老人の蒼^{そうはく}白な顔。両眼は、かたくとじ、唇がわなわなとふるえている。

「ふふふ。きさまがおとなしくしていれば、わしは乱暴をはたらくつもりはない。そこでわしが用のあるのは、きさまが目^めの穴に入れてある義眼^{ぎがん}だ。それを渡してもらおう」

「許さぬ。そんなことは許さぬ。悪魔め」

老人は大あばれにあばれたいらしいが、手足のいましめは、ぎゅつとおさえつける。

四馬はそれを冷やかに見下して、

「ええと、きさまの義眼はたしか右の方だったな。おい、みんなきて、戸倉の頭を、椅子の背におしつけていろ」

木戸や波や、その他の部下が戸倉にとびついて、頭目が命じたとおり、椅子の背におしつけた。戸倉の烏打帽子がぬげかかった。四馬はその前に進みよって、右手を延ばすと、戸倉の右眼を襲った。

エックス線のかげ

頭目の手には、戸倉の義眼ぎがんがのつている。

「ふん。これが黄金の三日月の容器いれものとは、考えやがったな。しかしこうなれば、お気の毒さまだ。ありがたく頂戴ちようだいしてしまおう。いやまだお札をいうのは早い。この中から三日月さまをださなくては……」

頭目は、義眼を両手の指先で支えて、くるくるとひっくりかえしてみた。しかし、義眼

のどこをどうすれば開くのか、見当がつかなかった。その開き方は、ぼうじんぶつ 某人物より一応きいておいたのであるが、どこをききまちがえたか、彼の記憶にあるとおりに、義眼の上下を持つて左右にねじってみても、さっぱりあかないのだった。

（フーン、こいつはまずい）と、頭目は心の中で舌打ちをした。だが、それを今顔色にあらわすことは戸倉に対しても、また部下に対してもおもしろくない。

が、問題は、それですむものではなかった。早くこれを開いてみる必要があった。

「おい木戸。大きなかなづち金槌を持つてこい。急いで持つてこい」

と、頭目は命令した。

「はい」と返事をして木戸が引込んでから、再び彼がこの部屋にあらわれるまで、ちよつと時間があった。一座は、ここでほつと一息いれた。

机博士は、戸倉老人の腕に、きょうしんざい 強心剤の注射を終えると、自分の指先をアルコールのついた脱脂綿で拭ぬぐつて、それからぎゅツとくびを延ばして背のびした。

「ねえ、頭目。もう一回、今みたいな手あらなことをなさると、わがはい輩はこの人物の生命について責任をおいませんぜ。これで二度目の警告です」

と、机博士は、しずかにいい放つた。これに対して頭目はだまりこくっていた。博士は、

肩をすぼめた。

そこへ木戸がもどってきた。頭の大きな金槌を頭目に渡す。

「これでいいんですかね」

「うん」

頭目は、^{テーブル}卓子の上に義眼をおいた。そして金槌を握った右手をふりかぶって、義眼の上に打ち下ろそうとした。

「頭目。ちよつと待った」

と、声をかけた者がある。机博士だった。

頭目はいやな顔をして、博士の方へ首を向けた。

「頭目。金槌で義眼をうち割って、中のものを見ようというんでしよう。しかしそれはま
ずいなあ。かんじんのものに傷がつくおそれがある」

「じゃあ、どうしたらいいというんだ」

「その黄金三日月とやらは、もちろん、金属でしょう。義眼は^{プラスチック}樹脂だ。それならば、その義眼を、ここにある^{エックス}X線装置でもって透視^{透視}すれば、いともかんとんに問題は解決する。なぜとって、X線は、樹脂をらくに透すが、黄金は透さない。だから、中にある黄金三

日月が、かげになつて、ありありと蛍光板けいこうばんの上にあられる。どうです。いい方法でしょうがな」

と、机博士はうしろから携帯用X線装置を持ちだしてきて、頭目の前の卓子の上においた。この装置は、さつき戸倉の胸部きょうぶの骨折こつせつを調べるために使ったものであつた。

「これは名案だ。じゃあこれにX線をかけて見せてくれ」

と、頭目は、あんがいすなおに頼んだ。

「よろしゅうござる」

博士はそういつて、装置からでている長いコードの先のプラグを、電源コンセントにさしこんだ。それからばちんとスイッチをひねつて、目盛盤を調整した。すると光線蔽おほいのある三十センチ平方ばかりの四角い幕を美しい蛍光が照らした。この蛍光幕とX線管との間に、博士は手を入れた。すると蛍光幕けいこうまくに骸骨がいこつの手首がうつつた。博士の手だった。「さあ用意はよろしい。ここへ義眼をさし入れる。そしてこつちから蛍光幕をのぞくと見えます」

と、博士は身体を横にひらいて頭目をさしまねいた。

頭目は、X線装置の前へ進んで、博士からいわれたとおりにした。蛍光幕へ戸倉の義眼

のりんかくがうつった。うつったのはその義眼ばかりではない。頭目の右の手首がうつった。どの指かにはめている、幅のひろい指環ゆびわもうつった。

「あッ」頭目は低くさげんで、手を引きあげた。しばらくすると、また義眼をつかんだ手がうつった。その指には、指環がはまっていなかった。頭目は、すばやく左手に持ちかえたのである。

「どうです。見えますか」と、机博士がきいた。

「三日月の形をしたものは見えない」

頭目が、X線の中で義眼をぐるぐるまわしてみるが、義眼はすっかりすきとおっていて、金メダルの黒いかげはない。

「ああ、その中には、金属片きんぞくへんがはいっていないのです」

と、机博士が横からのぞいてみて、そういった。

「しかし、そんなはずはないんだ」

頭目は、怒ったような声でいって、手をX線装置からだすと、義眼を卓上においた。

がーンと、大きな音がして、義眼が金槌で叩きつぶされた。頭目が、かんしゃくをおこして、やつついたのである。X線装置が検出した結果を信じなかったのだ。破片があたり

にとび散った。まわりにいた者は、あつと叫んで、口をおさえた。

が、その結果は、義眼の中には、なにも隠されていないということが分つただけである。「うーむ」と、頭目は呻うなった。

しばらく誰も黙っていた。嵐の前のしずけさだ。

と、とつぜん頭目が肩をいからして吠ほえ立てた。

「やい、戸倉。どこへ隠したのか、黄金メダルの片割かたわれを！」

「わしは知らぬ。いや、たとえ知っておつたとしても、お前のようならっぽう者には死んでも話さぬ」

戸倉老人は、のこる一眼を大きくむいて、四馬をにらみつけた。

「わしが知りたいと思つたことは、かならず知つてみせる。そうか。きさまの義眼というのは、もう一方の眼なんだな」

というと、頭目は、又もや戸倉にとびかかった。そして彼の指は戸倉の左の眼を襲った。

「あ、あぶない。待った」

叫んだのは机博士だ。あぶないと、大きな声。そしてやにわに、頭目の手首をつかんで引きとめた。

「なぜ、とめる？」

「お待ちなさい。戸倉の残る一眼は義眼ではないです。ほんものの眼ですよ。抜き取ろうたって、取れるものですか。やれば、器量をさげるだけです。頭目、あんたが器量を下げますよ」

そういわれても、頭目は戸倉老人の頭髪をつかまえて、放そうとはしなかった。

「頭目、よく見てごらんなさい。ほんものの眼だということは、目玉をよく見れば分りますよ。瞳孔も動くし、血管も走っている」

そういつて机は、携帯電話を戸倉の眼の近くへさしつけた。

頭目は、戸倉の眼の近くへ顔を持っていった。そしてよく見た。なんどもよく見た。どうやら、こっちは、ほんものの目玉らしい。

そのときだった。頭目の注意力が、急に戸倉の目玉から放れた。彼は、自分の顔へ、下の方から光があたっているように思ったのである。そのとおりだった。机博士が手にもっている携帯電灯の光の一部が、偶然か、それとも故意か、頭目の顔を蔽う三重の紗のきれの下からはいつてきて、彼の顔を下から照しているのである。

(あッ)

「無礼者！」と頭目が叫ぶのと、机博士の手から携帯電灯が叩きおとされるのと、同時であった。

博士は、手をおさえて、うしろへ身をひいた。彼の手から血がぼたりと床に落ちた。

「やあ君の手だったか。それは気がつかなかった。がまんしてくれたまえ」

頭目が、すぐ遺憾の意をあらわしたので、一度に殺気立ったこの場の空気が、急にやわらいだ。

「おい戸倉。きさまが、しぶといから、こんな悶着が起る。早く隠し場所をいつてしまえ。この黄金メダルの半分の方はどこに隠して持っている」

頭目は、どこかにしまっていた黄金メダルの半分を再び左の指でつまんで、戸倉の方へさしつけた。戸倉は、頭目をにらみつけたまま、口を一文字につぐんでいる。

「早くいうんだ。早くいえ」そのときだった。

とつぜん、この部屋のあかりが、一度に消え失せた。鼻をつままれても分らないほどの闇が、一同を包んだ。

あつと叫ぼうとした折しも、

「動くよ、撃つよ。動くな。あかりをつけると撃つよ。あかりをつけるな」

と、かん高い女の声が、部屋の隅から聞えた。

女は、この部屋にはいなかったはず。みんなはふしぎに思った。女の声は、一同が集まっているところの反対側で、頭目の立っていた後方のようなのである。

「何者だ。名をなのれ」頭目の声が闇の中をつらぬいた。

「よけいな口をきくな。わたしや暗闇の中で目がみえるんだから、撃とうと思えば、お前さんの心臓のま上だつて、撃ちぬいてみせるよ。わたしや——」

と女が、えらそうなことをいつているとき、部下が固まっているところで、誰かが携帯電灯をぱつとつけた。

と、間髪をいれず、轟然と銃声一発。

携帯電灯は粉微塵になつてとび散つた。

「うーむ」どたりと人の倒れる音。

「誰でも、このとおりだよ。わたしのいうことをきかなければ……」

たしかに、彼女がやった早業はやわざにちがいない。それにしてもその怪しき女は、どこから、この部屋にしのびよつたものか。ふしぎというより外ない。電灯が消えると同時に女の声がしたようである。それまでは、煌々こうこうと明かるかったこの部屋だ。その状況のもとで、どうしてこの部屋へ忍びこめるだろうか。まるで見えないガラス体のような女だといわなければならぬ。

「いよいよ、こつちの用事だが」と女の声はいやに落ちつき払っている。

「おい、頭目さん、お前さんの大切たいせつにしている黄金メダルの半分をあつさりわたしに引き渡しておくれ。いやとはいわさないよ。早く返事をしてもらいたいね。おやおや、お前さんはなんてえ情けない顔なまけをするんだらう。わたしにや、紗の三重ベールなんか、あつてもないのと同じこと、お前さんの素顔すがおが、ありありと見えているんだ」

暗闇で、ものが見える目を持つていると自称じしやうする女であつた。こういわれては、四馬頭目もペちやんこだ。

「うそだ。見えてたまるものか」頭目の声こゑがした。腹立たしさと恐怖とに、語尾ごゑがふるえ

て聞える。

「まあ、そんなことは放っておいて、おい、頭目。早く黄金メダルをおだしよ。おい、返事をしなさい返事を……」

頭目の声が、しばらくして聞えた。

「ばかをいえ。誰がだすものか」

すると、くくくくツと女が笑いだした。

「お前さんも間ぬけだねえ。そんなことをいう前にお前さんの頭の上を見るがいい。みんなも見るがいい」

「なにツ」頭目は上を見た。

「あツ、あれは……」彼の頭上一メートルばかりのところに、闇の中にもはつきり光って見える小さい物体があった。しばらく目を定めてみると、それが例の黄金メダルの半分であることが、誰の目にも分った。

「そんなはずはない」と頭目の声。

「あツ、無い。無くなっている、黄金メダルの半分が……。いつ、盗みやがったか」

「おさわぎでない。動けば撃つよ。わたしや、気が短いからね」

「何^{なに}奴^{やつ}だ、きさまは」

「まったくやみで、目が見える猫女と申す者でござる。ほらお前さんの大切な黄金メダルが動きだした」

そのとおりであった。猫女のいったように、黄金メダルは空中をゆらゆらと動きだした。「手をおだしでない。一発で片づけるよ」

ふしぎふしぎ、黄金にかがやくメダルは空中をとぶ。一同は、あれよあれよと、その運動を見上げているばかり。

そのうちに、宙^{ちゆうと}飛^とぶ黄金メダルは、流^{りゆう}星^{せい}のようにスーツと下に下りた。とたんに、扉がばたんと音をたてて閉った。

「あッ」一同は首をすくめた。

と、頭目の大きな声が、出入口のところで爆発した。

「ちえッ。逃げられた。戸の向こうで、鍵^{かぎ}をかけやがった。おい明かりをつけろ。懐中電灯をつけろ。大丈夫だ。今の女は、ここからでていったんだ。そしておれたちは、この部屋に閉じこめられているんだ」

頭目はわめきたてる。

そのとき、電灯がぱつとついた。眩まぶしいほど明かるい。一同は見た。頭目が、次の部屋との間の扉のハンドルを握つて、うんうんいつているのを見た。

「おお、頭目」

「みんなこい。この扉をこじあけろ。こわれてもさしつかえないぞ」

と、頭目は扉を放れて、指をさした。

そこで部下たちは集つて、扉へどすーんと体あたりをくらわした。二度、三度、四度目に扉の錠がこわれて、扉は向こうにはねかえつた。

「それツ」と頭目を先頭に、部下たちが続いて、そこから次の部屋へとびこんでいった。急に部屋はしずかになつた。

残つているのは、瘦そうくつる躯鶴のような机博士と、それからもう一人は、椅子車いすぐるまにしばらくつけられた戸倉老人だけであつた。

老人は、気を失つていた。

机博士は天てん井じょうを仰いで、首をふつた。

「はて、ふしぎなことだわい。まさか妖怪ようかい変化へんげの仕業しわざでもあるまいに……」
と、不審おもしろの面持もちで、両手をズボンのポケットに突込んだ。

深夜の怪音

さて、話は春木少年と牛丸少年の上に移る。

春木少年は、生駒いこまの滝たきの前で焚火たきびをして、その夜を過ごしたことは、諸君もご存じのはずである。

牛丸少年の方は、この山道にも明かるいので、闇の道ながらもたどたどり辿たどりつづけてきた。

牛丸君は、両親から叱しかられた。あまり帰りがおそかったので、これは叱しかられるのがあたり前である。

彼は、春木君が家へたずねてこなかったことを知り、念のために、春木君が起き伏ふしている伯母おばさんの家へいった。

ところが、春木君はまだ帰ってこないで心配していたところだと、伯母おばさんは眉まゆをよ

せていった。

それから大きわぎとなった。同級生や、その父兄が召集された。その数が二十名あまりとなった。

一同は提ちようちん灯や懐中電灯を持ち、太鼓や拍子木ひょうしぎや笛を持って暗い山中へ登っていった。

「迷い児の迷い児の春木君やーい」世の中が進んでも、迷った子供を探す呼び声は大昔も今も同じことであった。

「迷い児の迷い児の春木君やーい」

どんどんどん、どんどんどん。かあちかち、かちかちツ。

にぎやかに山を登っていった一行は、生駒の滝の前に焚火があるのを発見し、それに力を得て近づいてみると、当の春木君が火のそばで、いい気持にぐうぐう睡っているのを見出し、やれやれよかつたと、胸をなで下ろした。

二人は、もう一度叱られ直して、山を下り、無事にめいめいの家へはいった。

その翌日になると、二人のことは町内にすっかり知れわたり、学校からは受持の先生が見えるというさわぎにまでなつて、ふだんはのんき坊主の二人もすっかりちぢこまつてし

まった。

生駒の滝事件のことは、二人の口からもれたので、遂には警察署にまで伝わり、その活動となった。二少年も証人として現場へ同行した。

機銃弾は発見されたが、血だまりは雨に洗われたためか、はつきりしなかった。

ヘリコプターがとんできて、空中吊上げの放れ業をやったことは、牛丸少年の話だけで、それを証明するものがなかった。この次に、そういうものが飛んでいるのを見たら、気をつけることに申合わせができただけだ。

春木少年は、戸倉老人からゆずられた黄金メダルなどのことについては、遂にいわなかった。彼は、そのことについて牛丸に話すこともしなかった。彼は、このことについてゆつくりと、自分でできるだけの研究をしてみたいと思った。その上で、話した方がいい。時がきたら、牛丸にも話をするつもりだった。

なにしろ瀕死の戸倉老人が彼に残していったことばによると、黄金メダルの件は、非常な機密であつて、うっかりこれに関係していることを洩らしたが最後、思いがけないひどい目にあうにちがいないと思われた。現に、あの好人物の老人がむごたらしく瀕死の重傷を負っていたこと、それにつづいて牛丸君が見たとおり、老人がヘリコプターで誘拐

されたそのものものしきから考えて、これはうっかり口にだせないと、春木少年を警戒させたのだ。

だが、春木少年は、その謎を秘めた宝の鍵・黄金メダルの片われと、小文字でうずめられた絹ハンカチの焼けのこりを、いつまでも蔵封して机のひきだしの奥に収めておくことはできなかつた。それは三日目の夜に入つてのことであつたが、春木君は自分の勉強部屋にはいつて、ぴつたり扉をしめて錠をかけ窓にはカーテンを引き、それから例の二つの宝の鍵の入つた包を取出して、机上のスタンドのあかりの下に開いてみた。ぴかぴか光る三日月形の黄金片と、焼けこげのある絹ハンカチの一部とは、共に無事であつた。

「ああ、ちゃんとしていた」

と、春木少年は自分の胸をおさえた。

「ふふふ。ぼくは、この間の事件から、いやに神経質になつたようだぞ。こんなものは、何んでもないんだ。おもちゃみたいなものだ。あの戸倉とかいつた老人は、気が変になつていたんじゃないかなあ」彼は、今までと反対の心になつて、二つの宝の鍵をばかばかしく眺めた。

「だが、これはほんとの金かな」

彼は、黄金メダルを手にとつて撫なでてみた。なかなか美しい。そして重い。やつぱり黄金きんのように見える。黄金なら、これだけ売つても大した金になる。

（いつそ、売つてしまつてやろうか。売つてしまえば、めんどろなことはなくなる。それがいい、そのうち貴ききん金属ぞくしやう商に、そつと見せて、値段がよければ売つてしまつてやれ）そんなことを考えていたとき、夜の静けさについて空の一角から、ブーンとにぶい唸うなりが聞えてきた。

春木は、はつと目をかがやかした。

「飛行機が飛んでいる。まさかこの間のヘリコプターではないだろうが……」耳をすましている、どうもふつうの飛行機の音とはちがう。

「あツ、ヘリコプターだ。いけないぞ」

彼は、机上のスタンドのスイッチをひねつて、室内をまっくらにした。そして手さぐりで、二つの宝の鍵を包んで、元のようにひきだしの奥へおしこんだ。

ヘリコプターの音は、だんだんこつちへ近づいてくるようだ。春木少年は、急に恐怖におそわれ、がたがたとふるえだした。

「分つた。ぼくの黄金メダルを奪うばいに来たんだ。それにちがいない」春木少年は、そう思

った。

たいへんである。彼は生駒の滝の前で、あの黄金メダルを死守ししゅした戸倉老人が、賊のためどんなにひどい目にあつたかを思いだした。それからとつぜん滝の前へおりてきたヘリコプターが、倒れている戸倉老人に対して猛烈な機関銃射撃をやったあげくに、老人を吊りあげて飛び去つたことを思いだした。これは牛丸君から聞いたことだが、おそらくほんとうであろう。

どこまでも手荒てあらい賊どものやり方だ。最新式の乗り物や殺人の器械てきを自由に使いこなして、必ず目的を達しないではやまないというすごい賊どもだ。

「ぼくなんか、とてもかなわないや。これはおとなしく黄金メダルを渡した方が安全だよ」
春木少年は、抵抗することの愚おろかさをもとめた。だが、くやしい。

「……待てよ。戸倉老人は、生命にかけて、黄金メダルを賊どもに渡すまいと、がんばつたのだ。それをぼくがゆずり渡されたんだから、ぼくも生命にかけて、これを守るのがほんとうじゃないか」

少年の気が、かわつてきた。すると恐怖がすうーとすれていった。

「よし。逃げられるだけ逃げてやれ」

春木は考え直した。そしていったんしまった黄金メダルと絹のきれとを再びとりだし、すばやくズボンのポケットにねじこむと、裏口からそつと外へでた。

ヘリコプターは、いよいよ近くに迫っていた。

信号灯しんごうとうか標識灯ひょうしきとうかしらがないが、色電灯いろでんとうがついているのが見える。

春木は、首をちぢめて、塀へいのかげにとびこんだ。二十日あまりの月明つきあかりであつた。姿を見られやすいから、行動は楽でない。

彼はヘリコプターから見つけられないようにと、塀へいづたいに夜の町をぬって、山手へ逃げた。

二百メートルばかりいくと、そこから向こうは急に高く崖がけになつていた。崖の上には稲い荷神社なりじんじやの祠があつた。このごろのこととて屋根はやぶれ軒は傾き、誰も番をしていない祠だつた。春木は、その石段をのぼることをわざとさけ、横の方についている草にうずもれた急な小道をのぼつていった。もちろん姿を見られないためだつた。

崖の上ののぼりついて、彼はほつとした。ここなら、まず、大丈夫である。

というのは、ここは山の裾すそで、ひどい傾斜けいしゃになつている。稲荷神社のまわりには、古い大きい木がぎっしりとり囲んでいて、枝がはりだして隙間すきまのないほどだ。それに境内けいだい

もごくせまい。ここなら、ヘリコプターが下りてこようとしても、翼つばさが山の木にさわって、とてもうまくいかないであろう。春木は、そういう推理にもとづいて、崖の上のお稲荷さんへかけあがったのである。

おそろしき事件

おそろしい事件が、この時には既に、すであらまし終っていたのだ。

今、その最後の仕上げが行われつつあった。

さて、それはどういう事件であつたらうか。

ヘリコプターがだんだんこつちへ近づいてくるので、春木は不安になった。ヘリコプターは、このままの方向で飛びつづけると、お稲荷いなりさんのうしろの山に、ぶつかるとちがいがいかなかった。春木は、自分がここにいることを、やっぱりヘリコプターに見つけられたかと思つたくらいだ。

ところがヘリコプターは、お稲荷さんの方までは飛んでこなかった。その途中にある河原かわらの上と思うあたりで、得意の空中足ぶみをはじめたのである。

その河原は、春木のいるところからは右手に見えていたが、その川は芝原水源しばはらすいげんちのあまり水が流れていて、末すえは湊みなと川がわにはいるのだ。

「何をするつもりかなあ」

と春木は、こわごわ崖の上の木立のかけからのびあがってその方を注意していた。

すると、河原の向う岸に、四五人の人影が固まって歩いているのに気がついた。彼らは上流の方へ向って歩いている。が、とつぜん彼らはひっかえした。影が長くなった。その先頭に、小さい影が一つ走っていた。

その小さい影は、ある一軒の家の石段に上がりかけた。とあとの群が、その小さな影の上に重かさなつた。

人影の群は、ふたたび前のように、岸の上を上流に向って歩きだした。彼らは固まっていた。

そして小さい影は、彼らの頭の上にかつがれているらしかった。

春木は、このとき、どきんとした。

「あ、あの家は牛丸君の家だ。……すると、もしや。あの小さい人影は、牛丸君ではなかつたか」

はつきりした理由は分らないけれど、牛丸君も自分も、この間からヘリコプターの賊と因縁いんねんがついて、なんだかいつも睨にらまれているような気がしてならなかった。

だから春木は、すぐ牛丸君が誘拐ゆうかいされていると、かんづいたわけである。そしてそれはほんとうに正しい観察であつた。

牛丸少年をかつきあげた怪漢かいかんの一同は、それから間もなく白い河原の中へ下りていった。そこには、おあつらえ向きにヘリコプターが上に待っていて、綱つなだか縄梯子なわばしごだけを下ろしてあつた。

彼らが、その梯子にとりついて、だんだん上へひきあげられていくのが見えた。ただひとり河原に残っていた人影があつたが、それは大きな人影であつて、牛丸君ではなかつたようである。このとき牛丸君は、あの戸倉老人のときと同じように、綱にくくりつけられ、ヘリコプターの中へずんずん引きあげられているのにちがいない。

ヘリコプターは、この離れ業をたいへんすばしこくやってのけると、早やぐんぐん上昇を始めた。

「ひどい奴だ」

春木は、むちやくちやに腹が立った。しかしどうすることができようか。

相手は、自分たちが持つていない文明の利器りきを使って、好きなことをやってのけるのだ。手だしが得意やしない。

ヘリコプターは、ぐんぐん舞いあがり、それから予想していたとおり、山を越えて、北の方へいってしまった。

（もうおしまいだ。ああ、かわいそうな牛丸君よ。……しかし賊どもは、君を誘拐してつて、どうするつもりだろうか。君は、なんにも関係がないのに……）

春木少年はそう思つて、すこしばかり心が痛んだ。自分の身替みがわりに、牛丸君が誘拐されたのではないかと気がついたからである。やっぱり、黄金おうごんメダル探しが目的なんだろう。あのとき生駒の滝の前で、自分は既に黄金メダルを戸倉老人からゆずられ、そして老人のいうところに従つて、ヘリコプターから見られないようにするため、岩かげにかくれたところがある大きな穴があいていて、自分はその中へ落ちこんだ。

そのあとへ牛丸君がきた。そしてヘリコプターに乗つていた悪者どもから見られてしまったのだ。戸倉老人が誘拐されてつて、黄金メダルを調べられたが、持つていかなかったの

で、それではあの少年に渡したのではあるまいか、なにしろ戸倉老人は重傷であったから、倒れていた位置を動くことはできなかつたはずだ。そういう考えから悪者どもは牛丸君を今夜奪つていったのであろう——と、春木少年はこのように推理を組立ててみたのである。そのあとに、新しい不安が匍はいあがつてきた。それは、「悪者どもが牛丸君を調べて、黄金メダルなんか知らないことが分つたら、悪者どもはその次はどうするであろうか。こんどは自分を誘拐にくるのではなからうか。いや、なからうかどころではない、悪者どもは必ず自分を襲うにちがいない」と気がついたからである。

「いやだなあ。これはたいへんだ」

春木少年は身ぶるいした。どうしたら助かるだろうか。どうしたら安全になるであろうか。

それは警察の保護をもとめるのが一番よいと思われた。

「だが、待てよ」

警察の保護を受けるのはいいが、そうになると、あの黄金メダルのこともおおよ公けに知られてしまう。すると戸倉老人の心に反することになりそうだ。また、せっかくここまで秘密にしてきたこの謎の宝ものを、むざむざと世間に知らせてしまうのは惜しい気がする。それ

から始まって、全世界に知れわたると、われもわれもと宝探し屋がふえて、結局、春木自身なんかのところへその宝は絶対にころげこんでこないであろう。

春木少年は、やはり人間らしい慾よぐがあったために、黄金メダルを警察へ引きわたすのは、もうすこし見合わせることにした。

「しかし、そうになると、どうしたら安全になるだろうか。自分の生命も安全、黄金メダルも安全、という方法はないものか」そう考えているとき、目の下の校舎の窓にぱっと明かりがついた。

スマイレ学園

それはスマイレ学園の校舎であった。スマイレ学園というのは有名な私立学校であって、下は幼稚園から、上は高等学校までの級クラスを持っていた。どの組も人数が少く、先生は多く学費はかなり高価であったが、ここで教育せられた生徒はたいへんりっぱであったから、入

学志望者は毎年五六倍もたくさん集った。

灯あかりのついたのは、室内運動館であった。その二階の一室に灯がついたのである。運動をする場所は床から二階までぶつ通しになっているが、その外にすこしばかり小さい部屋が一階と二階についていた。一階は運動具をおさめる室などがあり、二階は図書記録室の外に、宿直室があった。今はこの宿直室は体操の先生である立花たちばなカツミ女史が寝泊りしていた。この先生は、列車に乗って遠方から登校するので、翌日も授業のある日は、ここに泊っていく。

春木少年は、自分の学校の先生ではないが、立花先生を見おぼえていた。なにしろ女史は目につく婦人だった。背丈せたくが五尺五寸ぐらいある、すんなりと美しい線でかこまれた身体を持っていた。そしてととのつた容貌ようぼうの持ち主で、ただ先生であるせいか、冷たい感じのする顔であった。春木少年は、東京に住んでいたころ、近所にこの立花先生によく似た婦人があったので、先生の顔はすぐおぼえてしまった。

立花先生のことを、このへんの子供は、タチメンとよんでいた。それは身体が長い銀色の魚タチウオに似ていて、先生は女だからメスで（この町ではメスのことをメンという）つづけていうとタチウオのメン、つまりタチメンという緋名あだながついたのである。

春木少年は、今ごろなぜ立花先生が起きたのであろうかとふしぎに思った。先生ではなく、他の人が灯をつけたのかとも思った。しかしそのとき先生の顔が窓ぎわにあらわれた。そしてちよつと外を見てから、急いでカーテンをひいた。それだけのことであったが、タチメン先生にちがいがなかった。

「そうだ。タチメン先生に、この黄金メダルを預ってもらおう。先生なら、女だけれど、体操の先生だから強いだろうし、秘密をまもつて下さいといえ、承知して下さいだろう。そうすれば、ぼくも黄金メダルも安全になるのだ」

春木は、そう考えついた。

彼は、そのつもりになつて、そこをでかけようとしたとき、急に事態がかわつた。というのは、川向うの牛丸君の家の前でさわぎが起つているのが見えたからだ。どうやら家の人が外へとびだして、救いをもとめているようであった。家の人たちは、今まで家の中で悪者どもにしばられていて、縄をほどくことができなかつたのであろう。

「これは、こうしていられない。ぼくもすぐいつて、さつき見たことを家の人に教えてあげなくてはならない」

この方が急を要することだった。春木少年は走りだしたがまたもや戻ってきた。彼は、

そこに聳^{そび}えている棕^{むく}の木の根方を、ありあわせの石のかけらで急いで掘った。

しばらくして、彼が手をとめると、根方には穴が掘れていた。春木少年はポケットをさぐって、黄金メダルと絹^{きぬ}ハンカチの燃えのこりをだした。それからそれを鼻紙に包んだ。その包を、穴の中に入れた。それから、土をどんだんかぶせた。そして一番上に弁当箱ほどの丸い石を置き、それからまわりを固く踏みかためた。

「まあ、一時こうしておこう。でないと、牛丸君の家の前までいったとき、もしも悪者が残っていて、ぼくをつかまえでもしたら、大切な宝ものをとられてしまうからなあ」

春木少年は、どこまでも用心ぶかった。

そうなのである。油断はならないのだ。さつきヘリコプターが牛丸君をつりあげ、そして仲間をひっぱりあげて空へ舞いあがっていったが、あるとき河原に一人だけ残っている者があつたではないか。それは誰であるか分らなかつたけれど、もちろん悪者の仲間にはいない。彼はそれからどこへいったか見えなくなつてしまつたが、いつひよつくり姿を現わすかもしれないのだ。あんがい近所の塀のかけにかくれて、牛丸君の家の様子を監視しているのかもしれない。そうだとすると、あそこへ大切な宝ものを持っていくのはやめた方がいいのだ——と、春木少年は考えたのである。

黄金メダルは春木少年の身体をはなれたので、彼は身軽みがるになった。彼は崖の小道を、すべるようにかけ下り、牛丸君の家の方へ走っていった。

息せき切つて、牛丸君の家の前へいつてみると、はたしてそのとおりだった。牛丸君のお父さんやお母さんが気が変になつたようになってきわいでいた。近所の人々も、だんだん集つてきた。そのうちにエンジンの音がして、警官隊が自動車にのつて、のりつけた。

牛丸君のお父さんの話によると、四名の怪漢かいかんがはいつてきて、ピストルでおどかしたそうである。強盗と同じだ。そして牛丸君をひとつらえると、ちよつと用があるからきつてくれ、生命には別条ないから心配いらぬ、しかしいうことをきかないと痛い目にあうぞ、といつて、牛丸君を外へつれだしたという。家の人はピストルでおどしつけられ、縄でぐるぐる巻きにされていたので、牛丸君を助けることができなかつたということだ。

それから先のことは、春木少年がお稲荷いなりさんの崖の上から月明つきあかりに見ていたとおどろかした。

「警察はもつと早くきてくれないと、だめだなあ」

と、近所の人があつた。

「そうだ、そうだ。それに自動車ぐらいもつてきたんじやだめだ。相手は飛行機を使って

誘拐するんだから、警察もすぐ飛行機で追っかけないと、いつまでたっても、相手をつかまえることができない」別の人が、そういった。

全くそのとおりであった。しかし警察の方では、そんなにきびきびやれない事情があるようであった。

春木少年は、牛丸君の両親に、お見舞だけをいって、さよならをした。この間のカンヌキ山のぼりのことをいわれるかと思つたが、両親ともそのことについてはなにもいいださなかつた。それよりも一刻も早く息子を取りかえしてもらいたいと警察の人にすぐることに一生けんめいだったのである。

ひげ面づらおとこの登場

崖がけの上のお稲荷いなりさんでは、春木少年が黄金メダルを埋うずめていってしまった後、おかしなことが起つた。

それは、お稲荷さんの荒れはてた祠ほこりの中から、一人の人物が、のっそりとでてきたのである。

その人物は、まず両手をうんとのばして、

「あッ、あッ、ああッ」と大あくびをした。

月に照らしだされたところでは、彼の顔は無精ぶしようひげでおおわれ、頭もばさばさ、身体の上にはたくさん着ていたが、ズボンもジャケツも外套がいとうもみんなひどいもので、破れ穴は数えられないほど多いし、ほころびたところはそのまま、ぼろが下っていた。外套にはボタンがないと見え、上から縄でバンドのようにしばりつけてあった。放浪者ほうろうしゃであった。

「さつきから見えていりや、あの小僧め、へんなまねをしやがったぜ。いったい、あの木の根元に何を埋めたのか、ちよつくら見てやろう。食えるものなら、さっそくごちそうになるぜ」空腹くうふくを感じていると見え、そのひげの男は舌なめずりをして、下へ下りてきた。そしてのっそり、崖の上の棕むくの木のところまでいった。

彼はすぐ埋めてある場所を発見した。そうでもあるらう、春木少年が踏みつけていったすぐあとのことだから、気をつけて探せば、すぐ目にとまる。

「ははあ。この石が目印ってわけか」ひげ面男は石をけとばすと、そこへしやがみ、両手を使って土をかきだした。間もなく彼は目的物をつかんで立ち上った。

「なあんだ、これは……」彼はあてが外れたという顔つきで、紙包を開いて中を見たが、よく正体が分らないので、それを持ったまま、祠の方へひきかえしていった。

祠の傾いた屋根をくぐり、格子の中へはいると、御神体をまつた前に、三畳敷きぐらいの板の間があり、そこに破れむしろが敷いてあった。そこがこのひげ面男——姉川五郎の寝室であつた。

彼は、むしろの上にごろんと寝ると、隅つこのところへ手をのばして、ごそごそやっていたが、やがてその手が、船で使う角灯をつかんできた。彼はマッチをすつて、それに火をつけた。この場所にはもつたないほどの明かりがついた。その下で、彼は紙包を開いた。

すると、絹の焼け布片がでてきた。彼はそれを無造作にひらいた。こんどは黄金メダルがでてきた。ぴかぴか光るので彼はびつくりした。それを掌にのせて、いくども裏表をひっくりかえして、見入った。

絹の焼け布片の方は、紙と共にこの男の手をはなれ、折から吹きこんできた風のため、

ひらひらと遠くへころがっていった。もしもこの光景を戸倉老人や春木少年が見ていたとしたら、おどろいて後をおっかけたことであろう。

「何じゃ、これは」三日月型の黄金メダルは、姉川の掌の上でさんざん宙がえりをやったが、その正体はこのひげ面男に理解されなかったようである。

「ぴかぴかしているが、これは鍍金メッキだよ。それに半分にかけていちや、売れやしない。ああ、くたびれもうけか。損をしたよ」

ひげ面男は、黄金メダルを腹立たしそうにむしろの上に放りだすと、角灯をぱつと吹き消した。そしてごろんと横になった。しばらくすると、大きないびきが聞えてきた。空腹をおさえて、ひげ面先生は睡ってしまったのである。

それから数時間たって、夜が明けた。

ひげ面男の姉川五郎は、早起きだった。もつとも朝日が第一番に祠の破れ目から彼の顔にさしこむので、まぶしくて寝ていられなかった。

彼は、むしろの上に起きあがって、たてつづけて大あくびを三つ四つやって、ぼりぼり身体をかいだ。それから何ということなくあたりを見まわした。すると、ぴかりと光ったものが、彼の充血した眼を射た。

「何？ ああ、昨夜の屑がねか。おどかしやがる」

彼はひとりごとをいって手を延ばすと、むしろの上から黄金メダルをひろいあげた。そして朝日の下で、また裏表をいくどもひっくりかえして見た。

「鍍金にしてはできがいいわい。まさか、本ものの金じやなからうね。おい屑がねの大将、おどかしっこなしだよ。おれはこう見えても心臓がよわい方だからね」

彼は黄金メダルを手にして、左右をふりかえった。角灯が目にはいった。それを引きよせ、その角のところで、黄金メダルを傷つけた。メダルは楽に溝がきざみこまれ、下から新しい肌がでてきた。それを姉川五郎は、陽にかざして目を大きくむいて見すえた。

「おやおや。中まで金鍍金がしてあるぞ。えらくていねいな仕上げだ。……待て、待て。これは、本ものの金かもしれないぞ。そんなら大したものだ。叩き売っても、一カ月ぐらいの飲み料ははいるだろう。善は急げだ。さっそくでかけよう」

姉川は、黄金メダルをポケットの中へねじこんだ。それから彼は、腰繩をといて、外套をぽんと脱いだ。それから手を天井の方へ延ばして、天井裏をこそこそやって、そこに隠してあった上衣をとりだして、それをジャケツの上に着た。それからもう一度天井裏へ手をやると、帽子をだしてきた。それをぼさぼさ頭にのせたところを見ると、型はくず

れているが、船乗りの帽子だった。それから彼は、賽銭箱の中から破れ靴をだして足につっかけズボンを一とゆすり、ゆすりあげてから、悠々と石段を下りていった。

こんな一大事が発生しているとは知らず、春木少年は八時ごろにお稲荷さんへのぼつてきた。

昨夜、宝ものを棕の木の根方に埋めたが、埋め方がうまかったかどうか、それを検分するため、彼は朝早く崖をのぼつてやつてきたのである。

「ああッ！」彼の目は、すぐさま、異常を発見した。棕の木の根方はむぎんに掘りかえされてある。春木少年は青くなつて、そこへとんでいった。

「やられた」土の上に膝をついて、掘りかえされた穴の中を探ってみたが、昨夜彼が埋めたものは、影も形もなかった。そばを見れば目印においた丸石が放りだしてある。彼はがっかりした。そこに尻餅をついたまま、しばらくは起きあがる力さえなかった。

(失敗した。やつぱり、机の奥にしまっておけばよかつたんだ。あわててもちだしたり、うっかりこんなところへ埋めたり、とんでもないことをしてしまった。せつかく戸倉老人が呉れたのに、おいしいことをした。……しかし誰がここから掘りだして持っていったのだろうか)

春木少年は、大がっかりの底から、ようやく気をとり直して立ち上った。

(なんとか取返したいものだ。まだ、絶望するのは早かろう)

少年は、推理の糸口をつかみ、それからその糸を犯人のところまでたぐっていくために、けいだい境内をぶらぶらと歩きだしたが、そのとき生々しい足跡が祠の前からこつちへついているのを発見し、

「これかもしれない」

と、緊張した。彼は祠の中をのぞきこんだ。

その結果、彼は姉川五郎の寝室があるのを見つけた。

「ぼくはうっかりしていた。ここにいた男に見られちまったんだよ」くやし涙が、春木少年の頬ほおをぬらした。いくらくやんでも諦あきらめきれない失敗だった。

もしや祠の中のどこかに黄金メダルをかくしていないであろうかと思ひ、彼は祠の中へはいあがつて、念入りにしらべた。だが、そんなものはあろうはずがなかった。ただ、彼は祠の破れ穴のところところに、絹の焼け布片がひっかかっているのを発見し、声をあげてよろこんだ。

黄金メダルとこれとの両方を失ったかと思つたが、焼け布片だけでも自分の手にもどつ

てくれたことは、不幸中の幸であると思つた。この上は、この焼け布片は大切に保管し、二度とこんなことにならないようにしなくてはならないと思つた。姉川五郎は、黄金メダルを握つて、どこへいったのであろうか。

二つに割れている黄金メダルの一つは、こうして春木少年の手からはなれてしまった。もう一つは、六天^{ろくてん}山塞^{さんさい}の頭目^{とうもく}四馬劍尺^{しばけんじやく}の手から猫女^{ねこおんな}の手へ移つた。このあと、この二つの貴重なる黄金メダルは、いかなる道を動いていくのであろうか。メダルの二つの破片がいつしよになるのは何時のことか。

それにしても、この黄金メダルに秘められたる謎はどういうことであらうか。事件はいよいよ本舞台へのぼつていく。

少年探偵なげく

まったく春木少年は、がっかりしてしまった。

もうなにをするのも、いやであった。自分のすることは何一つうまくいかないことが分った。彼はすっかりくさってしまった。

瀕死ひんしの戸倉老人が、いのちをかけて、かれ春木少年にゆずってくれた大切な黄金メダルの半ぺら！ あれが、今ではもう彼の手にないのだ。

（お稲荷さまだから、どろぼうから守ってくれると思っていたのに……）

境内けいだいの木の根元に、うずめたのが運のつきであった。誰かがさっそく掘りだして持つていつてしまった。

（きつと、あの祠ねわきに寝起ねおきしている男にちがいない）

春木少年は、あれからいくどもお稲荷さんの崖がけにのぼって、裏手からそつと祠をのぞいた。だが、いつ見ても、破れやぶごぎが敷きつぱなしになっているだけで、主人公の姿は見えなかった。

春木は、がっかりしたが、いくどでもくりかえしあそこへいつてみる決心だった。

黄金メダルを盗まれたことも、くやしくてならない大事件だったが、それよりも町中にひびきわたった大事件は、牛丸平太郎うしまるへいたろう少年がヘリコプターにさらわれたことだった。

なにしろ、そのさらわれ方が、あまりに人もなげな大胆なふるまいで、親たちも近所の

者も手のくだしようがなく、あれよあれよと見ている目の前で、ヘリコプターへ吊りあげられ、そのまま空へさらわれてしまったのだ。

警官隊の来ようもおそかった。またたとえ間にあつたとしても、やはりどうしようもなかつたにちがいない。飛行機を持っていない警官隊は、どうしようもない。

牛丸平太郎は、みんなにかわいがられていた少年だから、この誘拐事件の反響も大きかつた。ことに、その前に春木君が山の中で、行方不明になつた事件のとき、牛丸君が誰より早くこれを知らせたことで、牛丸少年を知っている人は多かつた。

春木としても、一番仲よしの友だちを、そんなひどい目にされたので、くやしくてならなかつた。それで、ぜひ捜査隊の中へ加えて下さいと、先生にまでとどけておいたほどである。

「ああ、そうか。それはいいね。この前は、牛丸君が春木君の遭難を知らせた。こんどはその恩がえしで、春木君が牛丸君を探しにいくというわけだね。まことにいいことだ」

と、受持の主任金谷先生は、ほめてくれた。

「先生。牛丸君は、なぜさらわれていったのでしょうか」

その時春木は、先生にたずねた。

「それがどうも分らないんだ。牛丸君の家は旧家きゅうかだから、金がうんとあると思われたのかももしれないな。そんなら、あとになって、きつと脅迫きょうはくじょう状じょうがくるよ」

「脅迫状ですか」

「うん。牛丸平太郎少年の生命いのちを助けたいと思うなら、何月何日にどこそこへ、金百万円を持ってこい——などと書いてある脅迫状さ。しかしほんとは牛丸君の家は貧乏しているので、そんな大金はないよ。もしそう思っているのなら、賊の思いちがいさ」

金谷先生は、牛丸君の家の内部のことをよく知っているらしかった。

「それじゃあ、なぜ牛丸君は、さらわれたんでしようね」

「分らないね。牛丸君は、君のようにとび切り美少年びしょうねんだというわけでもないし……：：：そうだ、君は何か心あたりでもあるんじゃないか。あるのならいつてみなさい」

と、金谷先生は春木の顔をじつと見つめた。

そのとき春木は、例の生駒いこまの滝たきの事件のことをいってみようかと思つた。あのとときからヘリコプターにねらわれているのではなからうかといひ出したかった。しかし春木は、それをいったら、あの黄金メダルのことまでうちあけてしまいたくなるだろうと思つた。その黄金メダルは、今はもう彼の手もとにないのだ。すべてあれからあやしい糸がひいてい

るように思う。それなら、ここで先生にうちあけてしまった方がいいのではないか。

だが、春木は、ついに、それをいいださずにしまった。

そのわけは、彼が口をひらこうとしたとき、そばを立花カツミ先生が通りかかったためである。この女の先生はスミレ学園につとめているが、方々の学校へもよく来る。そして体操の話をしたり、あたらしい体操や運動競技を教えていくのだ。

「やあ、立花さん」と、金谷先生が声をかけた。

「おや、金谷先生。こんなところにいらしたんですか」

と、立花先生は、そばへ寄ってきた。春木は、おじぎをして、二人の先生の前を離れた。そういうわけで、彼は黄金メダルまでの話をいいそびれてしまったのだ。

このとき春木には聞えなかつたけれど、神さまは口のあたりに軽い笑いをおうかべになり、悪魔はちよつと舌打ちをしたのであった。なぜだろう。

絹きぬのハンカチの文句もんく

その夜にも二回、その次の日の朝にも三回、春木少年はお稲荷さんの祠を偵察した。だが、彼が見たいと思つた浮浪者の姿を見ることはできなかった。その浮浪者は、その夜はどうとうこの祠の中の寢床へはかえつてこなかったのである。

（なぜ、帰つてこないのだろうか。ひよつとしたら、あの黄金メダルを売りにいって、お金がはいつたから、帰つてこなかったのではあるまいか）

春木少年の推理はするどく、かの姉川五郎の気持をある程度まで、ぴったりあてた。

困こまつた。売つたのなら、その売つた先をいそいで探さないと手おくれになる。といつて、それを聞くには浮浪者が帰つてこない、聞くわけにいかない。彼はまたもや昨日の失敗がくやまれてくるのだった。

（ぐずぐずしていると、ますます工ぐあ合が悪くなる！）

少年にも、そのことがはつきり分つた。

「そうだ。ぼくは、なんというバカ者だったろう。盗まれるなら、あの黄金メダルに彫ほりつけてあつた暗号文みたいなものを、べつの紙にうつしとっておけばよかつたんだ」

ああ、そう気がつくのが、おそかつた。

黄金メダルは、もう春木少年の手にはないのだ。まったく注意が足りなかった。人に見せまい、大切に大切にしようと思つて、黄金メダルの暗号文もよく見ないで、しまつておいたのだ。

「ハンカチがある。あれにも字が書いてあつた。そうだ、あのハンカチも、いつ盗まれるか知れない。今のうちに、文句をうつしておこう」春木は、やっと今になって、本道へもどつた。しかし彼は、本道へもどるまでに、二度も大失敗をくりかえしている。

少年は、その夜、例の焼けのこりの絹ハンカチを灯の下にひろげてみた。

ざんねんにも、四分の一か五分の一ほどしか残つていない。

が、それでもこれは重大なる手がかりなのだ。

さて、読みかかったが、絹ハンカチに書かれてある文字は、細い毛筆で、達者にくずしであるため、判読するのがなかなかむずかしかった。

しかし少年は、その困難を越え、字引をくりかえし調べて、どうやらこうやら一応はその文字を拾い読むことができた。

いったい、どのような文句が、そこに書きつづられていたであろうか。

十四行だけ残っていた。しかしその一行とて、行の終りまで完全に出ているわけでない。

しかし行の頭のところは、みなでている。それは、次のような文字の羅列であつた。

へザ……………

たる……………

二つ合……………

蔵する宝……………

の開き方を知……………

り。オクタンとへ……………

しため協力せず……………

する黄金メダルの……………

のと暗殺者を送……………

斃^{たお}れ黄金メダルは暗……………

り、それより行方不明……………

ここにある一片^{べん}は才……………

せし一片にして余は地中……………

おいてこれを手に入れたる……

「なんだろう。さっぱり意味が分らない」

春木少年は、ざんねんであった。

もしも生駒の滝のたき火で、こんなに焼いてしまわなかったら、一つの完成した文章が読めて、今頃は重大な発見に小おどりしているだろうに。

「いや、未練みれんがましいことは、もういうまい。この焼けのこりの文句から、全体の文章が持つている重大な意味を引出してみせる」

彼は興奮した。くりかえし、この切れ切れの文句を口の中で読みかえした。彼は、考えて考えぬいた。頭が火のようにあつくなつた。

そのうちに、彼は、一つのヒントをつかんだように思った。

「この黄金メダルの半ぺらを一つずつ持っていた人間が二人ある。ひとりをオクタンとい、もうひとりをへザ……というのだ」

オクタンにへザ何とかであるが、へザの方は名前の全部が分っていない。とにかく、この二人が黄金メダルを半ぺらずつ持っていたとしてこの文句を読むと、意味が通るのであ

った。

これに勢いを得て、少年探偵はさらに推理をすすめた。

すると、第二のヒントが見つかった。

「あの黄金メダルを二つ合わせると、宝のあるところの開き方を知ることができるようになってるんだ」

第三行と第四行と第五行とから、これだけの意味が拾えたように思った。

もしこれが当たっているなら、黄金メダルの二個の半ぺらを手に入れた上で、二つを合わせてみなくてはならないのだ。メダルの裏にきざみこんである暗号文字のようなものが、二つ合わせて読むと、完全な意味を持つようになって、宝庫ほうこの開き方を知らせてくれるらしい。

少年探偵は、いよいよ勢いづいて、その先を解析した。

第六行から第十一行までは、大して重要なことではないらしいが、そこに書かれてある意味は、

——黄金メダルの半ぺらずつを持ったオクタンとヘザなにがし某とは、仲がわるくて助け合わず、相手の持つ半ぺらを奪おうとして、暗殺者を送った。その結果、両人のうちの誰かが死ん

だ。そして半ペらは行方不明となった――

というのではなからうか。

「いや、それでは、両人のうちの誰かが相手に暗殺者を向けて斃し、そして黄金メダルの半ペらを奪ったものなら、その半ペらはその者の所有となり、行方不明になるはずがない。これは意味が通じない。考えなおしだ」

いろいろと考え直したが、もうすこしで分りそうでいて、どうもうまい答がでなかった。少年探偵は、しやくにさわつてならなかったが、そのときはもうそれ以上に頭がはたらかなかった。

それから最後の三行から、次のことを推理した。

――この一片、すなわち、戸倉老人の持っていた半ペらは、オクタンが持っていた半ペらであつて、自分、すなわち、戸倉老人は、これを地中から掘り出したものである――
どうやら、これだけのことが分つた。

オクタンとヘザ某とは、いったい何者であるか、それが分らない。これは文章のはじめの方に、説明があつたのだろう。そのところが焼けてしまったために、とつぜんオクタンとヘザ某の名がでてきて、彼らが何者であるのか、その関係や、二人の時代が分らない

のである。

後日になって明らかになったことだが、このように解釈した春木少年の推理は、原文の意味の七分どおり正しく解いているのであった。少年探偵としては、及第点であった。

このとき以来、彼は、右の解釈を基もととして、その後の活動をすることにしたのであるが、実はもう一つ、彼が考えたことがあった。それは、

——ヘザ某は、オクタンの放った暗殺者のために殺され、ヘザの持っていた黄金メダルの半ペらは行方不明となった。オクタンは自分の持つている半ペらをたよりに、宝探しをこころみだが、うまくいかなかった。そして彼は、残念に思いながら死んでしまった。だから、世界的大宝物は、まだ発見されずにもとのところに保存されている——

まず、こんな風に推定したのだった。

だから、オクタンは、とても悪い奴やつ。ヘザ某は気の毒な人。そしてヘザ某の遺族か部下は、オクタンを恨うらんでいるが、彼らの手には、オクタンには奪われないで助かった黄金メダルの半ペらがある。扇おうぎ形がたをしたその半ペらを持つている者があつたら、それはヘザ某の遺族か部下に關係ある者だ——と春木少年は思った。

このことが正しいかどうか、読者諸君には興味が深いであろう。なぜなれば、諸君は春

木少年のまだ知らない事実——四馬剣尺や猫女のことなどを知っているのだから。

きれいな独房どくぼう

かわいそうなのは、自宅からヘリコプターにさらわれていった牛丸平太郎少年だった。彼がヘリコプターに収容せられたときには、気を失っていた。だから、あとのことはよくおぼえていない。

気がついたときは、固いベッドの上に寝ていた。おどろいて彼は起き直った。からだの方々痛い。

「おお、これは……」

明かるく照明された、せまい一室だったが、入口は扉とのかわりに、鉄の格子こうしがはまっていた。牢屋ろうやだった。ベッドは部屋の隅にとりつけてあって、腰かけの用もしていた。

「ぼくを、こんなところへいれて、どうするつもりやろ」

牛丸は、鉄格子のところへいつて、それが開くかどうかためしてみた。だめだった。鉄格子の外側には、がんじょうな錠前がぶら下っているのが見えた。

鉄格子の前は通路になっていた。そして正面には、壁があるだけだった。

どこか抜けだすところはないかと、牛丸少年は部屋中を見まわした。天井に小さい空気穴があいているだけだ。そこからであろうとしても人間にはできないことだった。小さい猫ならでられるかもしれないが、牛丸は猫ではなかった。

天井は、高かった。室内には、ベッドの外になんにもない。いや、一つあった。それは便器であった。

牛丸少年は、この部屋に永いこと、とめておかれた。ここでは、時刻がさっぱり分らなかったけれど、牢ろうばん番らしい男がきて、鉄格子の窓から、食事をさしいれていったので、朝がきたらしいことをさとった。

牢番は、五十歳ぐらいのじやがいものように、でくでく太ったおじさんだった。牛丸が話しかけても、牢番男は首を左右にふるだけで、返事をしなかった。

昼ひるめし飯を持ってきたときに、牛丸はまた話しかけた。牢番は同じように首を左右にふり、指で自分の耳と口とをさして、

(わしは、耳がきこえないし、口もきけないよ)

と、知らせた。夕飯ゆうはんのとき、牛丸が話しかけようとする、牢番は、こわい目でらんだ。そして不安な目付で左右をふりかえった。そしてもう一度こわい目をし、大口をあいて、牛丸少年をおどかした。

牛丸は、がっかりした。すべての望みのぞを失い、ベッドにうつ伏して、わあわあ泣いた。だが、誰もそれを慰なぐさめにきてくれる者はなかった。

疲れ切っていたと見え、その姿勢のまま、牛丸はねむってしまったらしい。

「起きろ。こら、起きろ、子供」

あらあらしい声に、牛丸はやつと目がさめた。

「さあ起きろ。頭目かしらのお呼びだ。おとなしくついてくるんだぞ」若い男が、そういつて、牛丸の手首にがちやりと手錠をはめた。牛丸は引立てられて、監房かんぼうをでた。

前後左右をまもられて、牛丸少年は通路を永く歩かせられ、それからエレベーターに乗せられて上の方へのぼっていった。その道中に彼はたえずあたりに気を配ったが、それはなかなかりっぱな建物に見えた。彼はここがカンヌキ山のずっと奥深い山ぶところにかくされたる六天山ろくてんさんさい山塞の地下巢窟そうくつだとは知らなかった。

「頭目。牛丸平太郎をつれてまいりました」

若い男は、頭目四馬剣尺が待つている大きな部屋へ少年をつれこんだ。

牛丸少年は、そこではじめて頭目なる人物を見た。

華麗に中国風に飾りたてた部屋の正面に、一段高く壇を築き、その上に、竜の彫りもののあるすばらしい大椅子に、悠然と腰を下ろしているあやしき覆面ふくめんの人物は、四馬頭目にちがいがなかった。

その左右に、部下と見える人物が、四五名並んでいた。秘書格の木戸の顔も、それについていた。机博士のほっそりとした姿も、その中であつた。頭目が、覆面の中からさげんだ。

「うむ。波なみはそこに控ひかえておれ。木戸。その少年を前につれてこい。直接、話をしてみる」
若い男は、入口を背にして、佇たたずんだ。

木戸が前にでていって、牛丸少年の肩をつかんで、頭目の前に引立てた。

「手荒てあらにはしないがいい」

頭目は木戸に注意をした。

「これ、牛丸平太郎。お前にたずねたいことがあつたから、ここまできてもらった。これ

からたずねることに正直に答えるのだぞ。もしうそをついたら、そのときはひどい罰をうけるから、うそはつくなよ」

太い威厳いげんのある頭目の声が、牛丸の胸を刺した。

牛丸少年は、だまつている。彼は、頭目の顔の前にたれ下っている三重のボールがふしぎで仕方がなかった。

「おい、牛丸平太郎。お前は、戸倉老人から黄金メダルの半分をうけとったろう。正直に答えよ」

頭目はそういつて、牛丸の返事はどうかと、上半身を前にのりだした。牛丸少年は、それでもだまつていた。

頭目は少年が返事をしないので、機嫌をわるくした。彼は肩をふる慄わせ、

「さあ、早く答えよ。お前が戸倉老人から渡された黄金メダルの半分は、どこへ隠して持っているのか」

と、声をあらくしていった。

「ぼくにものを聞きたいのやったら、聞くように礼儀をつくしたらどうです。昨日からぼくを罪人ざいにんのようにひどい目にあわせて、さあ答えよといっても誰が答える気になるもの

か」

牛丸は、はじめて口を開くと、相手の非礼をせめた。

「お前から礼儀のお説教を聞くために呼んだのではない。こつちからたずねることだけに答えればよい。それを守らなければお前の氣にいるような拷問ごうもんをいくつでもしてあげよ。たとえば、こんなのはどうだ」

頭目が、椅子の腕木のかげにつけてある押釦おしボタンの一つをおした。すると天井から、鍋なべをさかさに吊つたようなものが長い鎖くさりの紐ひもといっしょに、スーツと下りてきた。そして牛丸少年の頭に、その鍋のようなものがすつぽりかぶさった。

「あ痛ツ」鎖はぴーんと張つた。そして鍋のようなものはしずかに持ちあがった。と、それに牛丸の頭髪が密着したまま、上へひっぱられていくのであった。

あの手この手

「痛い、痛い」牛丸少年は宙吊りちゆうづつになった。

痛い。髪の毛がぬけそうだ。もがくと、ますます痛い。牛丸は歯をくいしばり、ぼろぼろと涙を流した。

「これは拷問ごうもんの見本だから、そのへんで許してやろう。お前たちの年頃は、わけもわからずに生意気でいけない。そう生意気な連中には拷問が一番ききめがある」

頭目は、けしからんことをいつてから、拷問をとめた。鍋のようなものは、牛丸の頭髪をはなして、鎖紐と共にがらがらと天井の方へあがつていった。

日頃はのんき者の牛丸平太郎も、この拷問には参った。このような野蛮な責め道具を、さかんに持っているのだとすれば、うっかりことばもだせない。

「そこで、もう一度聞き直す。戸倉老人から渡された黄金メダルの半分は、今どこにあるのか。さあ、すぐ答えなさい」

頭目の声は、以前よりはやさしくなった。やさしくなったが、その口裏くちうらには、「こんど答えなければ本式に拷問してやるぞ」との含みがある。返事をしないわけにいかない。

「ぼくは正直にいいますが、戸倉老人だの黄金メダルだのといわれても、何のことやら、さっぱり分りまへん。これはほんとです」

「なにイ……まだうそをつくか。それなれば——」

「いくら拷問されたって、今いったことはほんとです。今いうたとおり、なんべんでもくりかえすほかありまへん。それとも、ぼくからうそのことを聞きたいのやったら、拷問したらよろしいがな」

しゃべっているうちに牛丸はしゃくにさわつてきて、又もやいわなくてもいいことまでいつてしまった。

「知らないといわさん。それでは、証拠をつきつけてやる。戸倉老人をここに引きだせ」
 頭目の命令によつて、戸倉老人がこの部屋へつれてこられた。車のついた椅子にしばらくつけられていることは、この前と同じだ。ひげ面をがっくり垂たれて目を閉じている。

戸倉老人の椅子は、頭目の前で、牛丸少年といつしよに並べられた。机博士がつかつかとやってきて、戸倉老人を診察した。それはかんたんにすんだ。机博士は自席にもどる。

「牛丸少年。お前の前にいるのが戸倉老人だ。この老人なら見おぼえがあるだろう。生駒の滝の前で、お前はこの老人から何を受取つたか。それをいつておしまい」

「この人、知りません。今はじめて会うた人です」

牛丸は、そう答えた。彼は生駒の滝の前に倒れていたのがこの老人かもしれないと思つ

た。しかしあのときは、顔をよく見たわけでない。ヘリコプターから機銃掃射が始まったので、すぐ柿の木へかけあがったわけである。

「お前はどこまで 剛情なんだらう。そんなに拷問されたいのか。それでは」

「待つて下さい。ほんとにぼくは、この人を知りませへん。うそやありません。この人に聞いてもろうてもよろしい」

牛丸少年は重ねて同じ主張をした。

戸倉老人は、さつきから下を向いたままで、目を開かない。牛丸少年の顔を見ようともしないのであった。

老人の心の中には、今はげしい苦悶があつた。それは今彼のそばにいる少年が、春木清にちがいないと誤解していたからだ。死にゆく自分を介抱してくれた親切に、あの黄金メダルを少年に贈つたが、それが祟つて、少年はこうして四馬剣尺のために自由を奪われ、ひどい責めにあつていいると思えば、老人の胸は苦しさに張りさけんばかりであつた。老人は、この気の毒な少年の顔を一目でも見る勇気がなかつた。少年に何とあやまつてよいか、老人の立ち場はひどく苦しいのであつた。

「剛情者が二人集つた」

と頭目は牛丸や戸倉老人のことをいった。

「よし、それでは、のつぴきならぬ証拠を見せてやろう。おい波、あの写真を持ってきたか」

すると戸口に立っていた波が、ポケットから数葉すうようの写真をひっぱりだして、頭目のところへ持ってきた。

「ふーむ。これで見ると、あのお前は現場にいた子供にちがいない。これを見よ」

頭目は、写真を牛丸に手わたした。

牛丸は、それを見た。そしてどきんとした。彼が生駒の滝の前まできたとき、ヘリコプターがまい下つてきたので、おどろいて柿の木にのぼった。そのときの彼の姿が、はつきりと撮影されているのであった。写真の中には、彼の顔をいっぱい引伸してうつしてあるものもあった。それを見ると、これは自分ではないということができないほど、はっきりしていた。

「どうだ。その写真にうつっているのはお前だろう。お前にまちがいなかろう」頭目は、こんどはおそれ入ったかと牛丸少年の面をむさぼるように見つめる。

「これは、ぼくのようにです」

牛丸は、あつさりとそれを認めた。

「しかし、この柿の木にのぼっているのがぼくだとしても、ぼくは誰からも、何ももらいません。ほんとです」

戸倉老人が、このとき薄目をあいた。そして牛丸少年の顔を、さぐるようにそつと見た。
（おお……）老人の顔に、狼狽と喜びの色とが同時に走った。

（ああ神よ）老人は口の中で唱えると、再びがっくりとなつて椅子にうなだれ、目を閉じた。老人は、そばにいる少年が、春木清ではないのを知つて、いままでのほげしい悩みから急に解放されたのであつた。

そのとき頭目の、怒りにみちた声がひびいた。

「なんとという手際のわるいことだ。調査不充分だぞ。責任者は処罰される」
左右をふりかえつて、頭目は部下を叱りつけた。

「この剛情者二人は、当分あそこへ放りこんでおけ」

そういい捨てて、頭目はうしろの垂れ幕をわけて、その奥に姿を消した。異様な背高のつぼの覆面巨人だ。牛丸少年は、感心して、頭目のうしろ姿を見送った。

（あの覆面の下に、どんな顔があるのか。早く見てやりたいものだ）

彼はこわさを忘れて、好奇心をゆりうごかした。

万国骨董商

ここで話は、春木少年から姉川五郎の手へ渡った半月形の黄金メダルの上に移る。

今、姉川五郎のことをくわしくのべるにあたるまい。なぜなれば、彼はひどく酔払っていて、どうにもならない。彼の服装は、ぼろぼろ服と別れて、りゆうとした若い海員姿に変っている。よほどたんまり金はいったと見える。

彼がお稻荷さんの境内の木の根元から掘りだした半かけの金属片は、たしかに黄金製であったのだ。彼はそれを、海岸通りからちよつと小路にはつたところにある万国骨董商チャンフー号に売ったのである。主人のチャン老人は、孔子のように長い口ひげあごひげをはやして、トマトのように色つやのよい老人であった。老人は、姉川が持ってきたメダルを二万円で買うといった。姉川はそれを聞くと十万円でないといやだといったが、

結局三万五千円でチャン老人は買い取った。

大金をつかんで、うちょうてん宇頂天になつて店をでようとする姉川に、うしろから老商チャンは声をかけた。

「こんなにかけないで、丸々満足なのがあつたら四割がたええ値で買いまっせ」

姉川は、ふふんと笑つたまま、店をでていった。

「ふふふふ。まるでただのようなもんや。つぶしても十二万円には売れる。しかし惜しいもんや。らんぼうなやり方で、半分に切断しよつた。中まで黄金かどうか見るつもりやつたんやろ」

老商はひとりごとをいいながら、黄金メダルをてんびん天秤の皿からおろし、こんどはそれを店の飾かざり窓の中にあるガラス箱の棚の一つの上のせた。そのそばには、はんぱになつた貴金属製の装身具が、所もせまく並べられてあつた。片っぼだけのひすいの耳飾りや、宝石がなくて台ばかりの金色の指環や、数の足りない真珠の首飾、さてはけばけばしい彫刻をした大小いろいろの指環や、古色そう然とした懐中時計をはじめ、何だか訳の分らない細さいくも工物や部分品が、そのガラス箱の中にひしめきあつていた。

それは、姉川五郎が黄金メダルを売りとぼしてから三日目の昼さがりのことだった。

その日は、ふしぎに例の三日月形の黄金メダルが客の目を吸いつけた。結局、その日黄金メダルにさわったお客の数は三名であった。

最初の客は、意外な人物、立花カツミ先生であった。

その日、立花先生は、新しい体操の実演と打合会のために海岸通りの扇港せんこうビルの講堂で午前中を過した。それがすんで、外へでたが、そこで金谷先生といっしょになり、二元もとま町ちの方へ抜けて学校へもどることになった。そのとき万国骨董商チャンフーの店の前を通りかかったのである。

はじめ、金谷先生がその飾窓の前に足をとどめた。先生はめったにこんなところへこないで、ガラス戸の中におさまっているいろいろの商品をもの珍らしくながめた。立花先生の方は、そんなものあまり興味がないらしく、すこし迷惑そうな顔で、金谷先生のうしろに立っていた。

その金谷先生が笑いだした。

「はははは。この店は、がらくた店なんだよ。ちょっと見かけはいいが、ろくでもないものばかり並べてある。あれなんか、金貨の半かけだ。金貨の半かけはおかしい。金貨にしては大きいからメダルかな。とにかく半かけでは買手もあるまいに……」

立花先生の顔が、飾窓へよつてきた。

「立花先生。ほら、あそこにある金貨の半かけみたいなもの、あれはメッキですか、それとも本物の金ですか」

「さあ……」立花先生は、かすれたように声をだした。

「あれがもし本物の金だったら、あれだけあれば、うちの母のいれ歯もすっかり修理することができるといふがなあ」

「もう、いきましようよ」先生二人は、老商チャンの飾窓から離れた。そしてにぎやかな元町へでた。

半町ばかり歩いたときに、立花先生は金谷先生に、

「わたくし、忘れていた用事を思い出しました。これからちよつといつて参りますから、ここで失礼いたしますわ」

といった。そして二人は別れた。

立花先生は、すたすたとうしろへ戻つた。そして先生は例の万国骨董商の店へはいった。老主人チャンは、籠かごの小鳥に餌えさをやっていたが、店の方をふりかえつて、びっくりした。珍らしい客きやくじん人である。

「なにをお目にかけてみましょうかな」

チャンは、もみ手をしながら、首をさげた。首を下げながら、美しい客の面おもてから目を放さなかつた。

立花先生は、黄金メダルの半ぺらを見せてくれといって、手にとってよく見た。それは先生の氣にいったようであつた。そこで値段を聞いた。

「さよう。あんたさんのお望みですさかいに、大まけにまけまして、二十万円ですな。あれは純金に近いものでな、そのうえ、えらい由ゆいしよ緒のあるもので、二十万円は大勉強だつせ」

二十万円だという。三万五千円で姉川五郎から買いとつたものが六倍の値段でふっかけられたのである。

「二十万円ですか。高いわねえ」

「それだけの値打は、十分におまんねん。その道の者なら、よう知ってます」立花先生はしばらく唸うなっていたが、やがて老商チャンにいった。

「わたくし、ここに二十万円のお金を持っていないのです。それで今手つけ金として二万円おいてまいります。これから家へかえつて、のこりの十八万を持ってきますから、それ

をわたくしに売ったものとして下さい」

「へえーッ。どうもありがとうはんで。あの、二十万円で買いはりますか。よろしおます。二十万円のお手つけ金。ここへちようだいたしましよう」

チャン老人は、自分のおどろきを隠すのに骨を折った。十五万円ぐらいに値切るかと思いの外、いい値の二十万円で買うというのだ。そんなことなら、もつと吹っかけておけばよかった。こんな質素ななりをしていた婦人のことだから、二十万円だといえ、びつくり仰天して、すぐさようならと店をでていくかと思いの外、とんでもないちがいだった。その婦人客がそくさと店からでていったあと、チャン老人は、黄金メダルを元のガラス箱の中に返した。

あとの二人の客

老商チャンは、またもとのように小鳥の籠に近づいた。

そして彼のかわいがついている小鳥に、餌をあたえはじめた。それが大方終りに近づいた頃、

「はい、ごめんよ」と、店へはいつてきた男があつた。背の高いりっぱな人物だつた。日本人のようであり、また外人のようにも見える。

この紳士こそ、四馬剣尺の部下として重きをなす机博士その人であつた。

「ご主人。そのガラス箱の中にはいつている金貨の半分になつたようなものを、ちよいと見せてもらおう」

博士は、長い手を延して、ガラス箱の棚を指した。

「ああ、これですか」

老商チャンは、それを取り出して客に見せた。チャンは、立花先生と売約ばいやくが成立したことを忘れていたような態度で、気軽に三日月形の黄金メダルをだしてみせたのである。

「これはおもしろいものだ。惜しいことに半分になつている。ご主人、これは本物のゴールドきん（金）かね」

「純金じゆんきんに近い二十二金ですわ」

「ふふん。で、値段はいくら」

「あまり売れ口がええものやないさかい、まあ大まけにまけて三十万円ですな」

「三十万円！ あほらしい、そんな値があるものか。ご主人、十五万円ではどうだ」

「あきまへん。三十万円、一文も引けまへんわい」

「そうかね。それじゃこれから三十万円、なんとかして集めてこよう」

机博士はそういって、チャンの骨董店をでていった。

その博士は、店先から五六歩離れると、肩をすくめて、ふふんと笑った。

「あの慾ばり爺め、まさかおれが、あの黄金メダルの裏表をあの店の中で、写真にとつてしまったことに気がつくまい。ふふふ」

そういって、机博士は、オーバーの釦ボタンに仕掛けてある秘密撮影用の精巧な小型カメラを、服の上から軽く叩いた。博士らしい早業はやわざであった。

「……だが、あの黄金メダルがあそこに売りにでていることを、頭目に知らせたものか、それとも何とかして、おれが手に入れておいたものか、さて、どっちにしたものだろうなあ」

博士は、海岸通りの方へ、長いコンパスで歩いていった。

第三の客がきたのは、それから三十分ばかりあとのことであった。

その人は、外国の船員の服装をつけていた。髪も瞳も黒くて、日本人のようであったけれど、顔色の赤いことや鼻柱の高いことなどから見ても、スペイン系の人のようであった。彼の顔立ちは整つていたが、どうしたわけか、おそろしい刀傷のあとが、額の上から左眼を通り、鼻筋から、唇までに達していた。ものすごい斬り傷であった。しかしその傷は、光線が彼の顔の上に、或る方向から照らしつけるときに限り、非常にものすごく見えた。「その半分のメダルを見せて下さい」

彼はおぼつかない英語で、そういった。

老商チャンは、客よりは上手な英語で応対した。彼は、今日はこの黄金メダルに、妙に人気が集まっているのに気がついて、上機嫌であった。それと共に、彼はゆだんをしなかつた。

刀傷のある船員は、黄金メダルを何十ぺんとなく裏表をひっくりかえし、またチャンから拡大鏡を借りて、念入りに全体を検べてみたり、掌てのひらにのせて重さを測つたりした。そのあとで、

「これいくらで売りますか」と、老商にたずねた。

「四十万円です」チャンは、こういうのは金持ではないから早く追払うにかぎると思つ

て、かんたんに返事をした。

「四十万円ですか。私、千二百ドルで買います。千二百ドルなら五十万円以上にあたります。あなた、いい商売します」

客はそういつて、ポケットから米貨の紙幣をチャンの前へ並べだした。チャンは、近頃こんなびっくりしたことはない。

「待って下さい。この品物は、実はもう売約ができていまして、さしあげかねます」

「いくらで売約しましたか」

「それは、あの……」老商チャンは、まさか正直に二十万円とはいいだせなかった。

客は、紙幣を並べおえた。

「私、五十万円に買う契約、さつき、あなたとしました。私、買います。五十万円の高値でこれを買う人、私より外にありません」

「よろしい。売りましょう」

チャンは、ついにそういつた。二十万円に売るよりも五十万円に売った方が二倍半の大もうけだ。売約したあの婦人には、手つけの二万円の外に、あと五千円か一万円つけて返せば、文句はないだろう。そう思った老商チャンであった。

客は、黄金メダルの半ぺらを持って、店をでていった。チャンは、受取った紙幣をもう一度数えるのに熱中していた。

それから七八分あとのことだったが、万国骨董商チャンフー号の店先を通りかかった一人の少年が、不意に立ちどまって、さげび声をあげた。

「うわーッ。これは血やないか。店の奥から、えらいこと血が流れてきよるがな」

その声に、近所の人たちがおどろいてとびだしてきた。そしてチャンの店内へはいつて、老主人の名を呼んだ。

チャンの返事はなく、ただ籠の中で、小鳥がチチチと鳴いていた。

「どうしたんやろか、チャンさんは……」

「あつ、こんなところに倒れている」

店の奥に、老商は朱あけにそまって倒れていた。心臓の上にピストルで撃ったらしいひどい傷あとがあつた。そしてそのまわりには、服の上に焼け焦げが丸くできていた。もちろんチャンは絶命していた。誰が、いつの間に、老商をこんなに冷い死骸しかいにしてしまったのであろうか。

迷宮入りか
めいきゅうい

かわいそうな万国骨董商チャン老人殺しのニュースは、たちまちこの港町のすみずみまでひろがった。

「なんとというむごたらしいことをする犯人だろう。あの老人は家族もなく、さびしく小鳥と住んで、あの店をやっていたのに、ああ気の毒だ」

老人を見知っている人々の中には、こういつてその死をいたむ者もいた。

「チャン爺じいさんは、あれでそうとうなもんだよ。こつちが売りに持っていった品物は二にそく東三文さんもんに値ぎりたおす。それをあとで磨きにかけて、とほうもない高値で、外国人などに売りつけるんだ。足もとにつけこむのは、得意中の得意さ。あんまりもうけすぎるから、こんどみたいな目にあうんだ」

そういつて、にくまれ口をきく者もいた。

「いや、それは商売しょうばい上手じょうずというものだ。そんなことでなにも爺さんは殺されることは

ないんだ。ああして殺されたのは、爺さんがひどいこととして集めた宝石の中に、おそろしい呪いのろのかかっているダイヤモンドがあつたんだ。それは元、インドの仏像ぶつぞうのひたいにはめこんであつたのを、ある悪い船のりがえぐり取って、盗んでいった。そしてそれをチャン爺さんに売りつけた。するとインドの高僧こうそうが船のりに化まけてはるばる取返しにきたんだ。爺さんはすなおに返さなかつたもんだから、あのようにな、えいツと刺し殺された」

「ちがうよ。ピストルで撃たれたんだ」

「あ、ピストルか。ピストルでもいいよ」

「ほんとかい、その話は」

「つまり、そうでもあろうかと、わしは考えたんだがね」

「なんだ。ひとが事件に熱中しているのをいいことにして、うまくかくだね」

「とにかく、あの爺さんは、叩たたけばほこりがでる人物だ。犯人は永久に分らないよ」

たしかにそのとおりで、犯人の目星めぼしがさつぱりつかないので、この事件を担当している、秋吉警部あきよしけいぶはいらいしていた。

彼は、チャン老人の絶命の三十分あとへ現場へついて、さっそく捜査の指揮をとったのであるが、血の流れている店内は、事件発見者の少年のしらせで駆けつけた近所の人たち

によつて、すっかり踏みあらされていた。犯人をつきとめるための証^{しやうこ}拠^こが、これではつかめない。警部は困つてしまった。

それに、チャン老人は、店内にひとり住んでいたもので、当時の店内の様子を証言する者がいなかった。向う三軒両隣はあるけれど、今日はチャン老人が殺害されると分つていながら、老人の店に出入りする人物に注意を払つていたであろうが、そんなことはあらかじめ分つていなかったのも、誰も正確に出入りの人物を証言する者がなかった。おそらく犯人は、そういう事情をのみこんでいて兇^{きやうこう}行^{こう}したのであろうと、秋吉警部は考えた。

店内をしらべて、何が盗み去られたかを調査した。

その結果が、またはつきりしないのであつた。なにしろたくさんのこまごました物がある。その品物の目録^{もくろく}などはなかったから、何と何とがなくなつたんだか分らない。

金庫は閉つていた。この中を調べたが、これもまたはつきり分らない。金庫の中には、日本の紙幣やアメリカの紙幣などがしまつてあつた。これだけが有金^{ありかねぜんぶ}全部であつたのか、それとも犯人はその一部を盗んでから、金庫を閉めて逃げたのか、どつちとも分らなかつた。

かれ秋吉警部には興味のないことであつたが、読者には興味のあることがらを、ここで

一つ述べておこう。それはアメリカの紙幣で千二百ドルがそっくりそこに残っていたことである。これは犯人がどういう種類の人物であるかを判断するのに、一つの参考となる。

——秋吉警部は、気の毒にも、そのような資料をつかむ機会にめぐまれていないのだ。

そこで警部の注意力は、もっぱらチャン老人の致命傷と彼の死んでいた場所とその身体の恰好にそそがれた。

ピストルで心臓のまん中を見事に撃ちぬかれたのが、老人の死因だった。老人は声もたずに死んだのであろう。

ピストルは老人の胸に向けられ、その銃口は老人の服にぴったりとふれていたにちがいない。その状況で、ピストルは発射されたのだ。だから銃口のあたっていた服には穴があいており、その穴のまわりの服地は、焼け焦げになっていた。

ピストルの弾丸は、背中をうちぬき、うしろの壁かざりをつきぬけ、壁にめりこんでいた。それを掘りだして調べてみたところ、そのピストルは、よく普通に見かけるブローニングやコルトのものではなく、口径のずっと小さい特殊のものだった。それは多分ピストルの形をしないで、他の物品に似せて作つてあるもののように思われた。たとえば万年筆の形をしたピストルだとか、扇子の形をしたピストルだとかを、暗殺者はよく持ってい

るが、そんな風なものにちがいない、そういう物品に似せるためには、どうしても弾丸の口径を細くしなければならぬ。自然しぜん、火薬も少量しか使えないので、そういうピストルは、殺す相手の身体にぴったりとつけて発射しないと、弾丸が身体の中へはいらない。

「犯人は、只者ただものじゃない。チャン爺さんを殺すことなんか、鶏にわとりの首をしめるほどにも感じなかつたんだらう」

警部は、そう思つて慄然りっぜんとした。

老人は、帳場の台をへだてて、客と向いあつていたらしい。それから老人は、奥へゆくとして身体をすこし曲げた。そのときすばやく犯人が握つているピストルが老人の心臓を服の上からねらい、直ただちに引金がひかれたのにちがいない。老人の死顔には苦悩のあとも恐怖の表情もなく、おだやかな顔であつた。そしてそのままそこに倒れると傷口からは血がとめどもなくふきだし、ついに店前まで流れていったのだと思われる。

それから犯人はどうしたか。それがさっぱり分らない。何か目星をつけてきたものがあつて、それを取り出して、すばやく逃げさせたものか、それとも老人を斃たおしたただけで、そこから逃げだしたもののか、なんとも分らない。このへんで秋吉警部の捜査はゆき詰つてきたのであつた。

しかたがないので、警部は、各署や水上署すいじょうしよまでに通告して、チャン老人殺しに関係あるあやしい人物があつたら知らせてもらいたいとたのんだ。こんな方法では、運をたのむようなものだ。しかし証拠物が集らないし、事件の目撃者もあらわれないのだから、こんなことでもする外ほかなかつた。

水上署には、外国船員にも気をつけてくれるように特に依頼した。だが、外国船員にあやしい者があつても、これを検挙するまでに持つていくことは容易なことではなかつた。

秋吉警部はだんだんやつれていった。そして事件は迷宮入りらしく思われてきた。

もしも、チャン老人が殺される日、あの店をたずねた客たちが名のつてでるなら、警部は有力な手がかりをつかんだであろう。しかし誰も名のつてでるものはなかつた。むりもない。かかりあいになるのを恐れてのことだ。

金谷先生かなやしやべる

海岸通り 横^{よこちよう} 丁^{ちよう}の老骨董商^{ろうこつとうしようごう}殺しのニュースは、その翌朝には、新聞記事になっていた。

春木少年や牛丸少年の組をあずかっている金谷先生も、この新聞記事を読んだ。そしてすぐ気がついた。

「ははあ。あの店だ。昨日^{きのう}飾^{かざり}窓^{まど}をのぞきこんだが、金貨の割れたのを、れいれいしく飾^{かざ}ってあつた、あのがらくた古物商だ。

あの家の主人が殺されたんだな。それを分^わつていれば、もつとよく顔を見ておくんだつたのに」

と、先生はすこしばかり残念であつた。先生は登校すると、この話をとくいになつて教員室にしやべり散らした。

「白いひげを長くたらしめた爺さんなんですよ。いかにも小金をためているという風に見えましたね。そういえば、福^{ふく}々^{ぶく}しい顔なだけけれど、どことなくきついところがあつたな。やつぱり自分の悲惨な運命が、人相にあらわれていたんですよ」

こんな風に話すものだから聞き手の先生がたは、もつとくわしいことを聞きたがつた。「いや、それだけのこと。ぼくは、中へはいつて見ようかと思つたんですが、連れの立^{たち}ば

花^な先生がいやな顔をしているので、それはやめましたよ。あのときはいつていれば、もつと諸君におもしろい話ができたんだがなあ」

金谷先生がそういうと、聞手^{ききて}の先生たちはみんな笑った。

そこへ立花先生がはいつてきた。

「まあ、みなさん、なにをそんなにおもしろがっていらつしやるんですの」と、にこにこしてたずねた。

「あはは。金谷先生が、例の殺されたチャンという万国^{ばんこくこつとうしやう}骨董商の店を、昨日のぞいたというんです」

「まあ、いやなことですわ」

と、立花先生は、美しい眉^{まゆ}をひそめた。

「金谷先生は、あの店主が殺されると分つていたら、店の中へはいつて、しげしげと見てくるんだつたなどというもんだから、みんなで笑つていたところなんです」

「気味のわるいお話は、もう聞きたくありませんわ」

「金谷先生のいうことに、連れの立花先生がうしろにこわい顔をして立っているものだから、ついにはいるのをあきらめたといつてますよ」

「えッ」と立花先生はかたい顔になって金谷先生の方に向き直ったが、すぐ顔を和げ、
「金谷先生。よけいなおしやべりをなさるものじゃありませんわ。かかりあいがあると思
われて、警察へひっぱりだされるようなことがあつたら、つまらないじゃありませんの」
と、かるくたしなめた。

「まいった。これは一本まいりました。今までのおしやべりは取消しだ」

と、金谷先生はすっかり悄気しよげてしまった。それがまたおかしくてたまらないと、同僚た
ちは腹をかかえて笑った。

金谷先生は、てれくさくなつて、ひとりその座を立つて、運動場へでていった。運動場
では、早く登校した生徒たちが、元気にはねまわっていた。

「金谷先生」先生は、自分の名前をよばれて、はつとわれにかえり、その方を見た。

四人の少年が、そろつて、前へ近づいた。その中には春木少年の顔が交まじっていた。その
外に、小玉君こたま、横光君よこみつ、田畑君たはたの三少年がいた。

「どうしたの。いやに改まつているね」

と、金谷先生が受持の学童の顔を見まわした。

「先生。ぼくたち四人は、少年探偵団を結成しようと約束したんです。それで、先生に少

年探偵団の顧問こもんになっていただきたいのです」少年たちの話は意外な申入れだった。

「少年探偵団だって。それはいつたい、なんの目的で結成するのかね」

「まず第一の目的は、ぼくたちの級友である牛丸君を一日も早く救いだしたいことです」

「それは警察がやってくれる。君達が手をださないでもいい」

「でも、警察だけにまかせておけないと思うんです。なにしろ、今になっても、警察はすこしも活動をしてないようですからね」

「それは相手が手ごわいから、準備のためにそうとう日がかかるんだろう。君たちがかけていってもだめさ。相手が強すぎるからね。返り討かえちになるよ」

先生は、少年たちが、きつと落ちこむにちがいない悪い運命を思つて、その企くわだてに反対した。だが、少年たちは、そんなことでは尻しりごみしなかった。春木少年は、言葉をつづける。

「第二の目的は、世界にまれな宝さがしに成功することなんです」

「なんだつて。世界にまれな宝さがしとは……」

「先生。牛丸君がかどわかされたことも、実はこの宝さがしに関係があると思うんです。そしてほんとうは、ぼくが連れていかれるはずのところ、賊ぞくはまちがって牛丸君を連れていったんだと思うんです」

「君のいつていることは、さっぱりわけが分らない」

「それはこの事件のはじまりからお話しないと、お分りにならないのです。実はこの前、牛丸君とぼくと二人でカンヌキ山へのぼりましてねえ……」と、それから生駒の滝の前で戸倉老人にめぐりあい、黄金メダルの半かけと絹地きぬじにかいた説明書をもらったことから、メダルを失ったことまで、残りなくすべてのことを金谷先生にうちあげた。

先生はおどろいて、はじめは「ほう」とか「おもしろいね」といつていたのが、終りに腕をくみ、身体をかたくして、「ふん、それからどうした」とか、「それはたいへんだ。で、どうした」とか、さかんに力んでたずねた。

「これが焼け残った絹のハンカチの一部です」

と、春木少年が金谷先生の手になんかを渡したとき、先生の緊張は頂ちやうてん点てんに達した。

「なるほど。これはほんものだ。えらいことになったものだ」

先生はそこで頭をひねって、しばらく沈黙したが、やがてあたりへ気をくばり、低い声でいった。

「春木君。先生は昨日、君がとられたという黄金メダルの半ぺららしいものを、海岸通りの横丁の骨董店の飾窓の中に見かけたよ」

「ええッ。先生、それはほんとうですか」

「ほんとうかどうか、とにかく君が今話をした三日月形みかづきがたの黄金メダルというのによく似ていた。君の話では、お稲荷いなりさんのお堂に住んでいた男が、あの店へ売ったんじゃないかな」

「あッ、それにちがいありません。先生、その店はなんという店ですか。どこにありますか。教えて下さい。これからぼくはすぐいつて、取返してきます」

こんどは春木少年の方が、大昂奮してしまった。

「待ちたまえ、春木君。その店の老主人は昨日何者かのためにピストルで殺されてしまったんだよ。今朝の新聞を見なかつたかね」

「ああッ。そうか。すると今朝の新聞にでかど大きくでいたチャンファー号主人殺しというのはこの店ですね」

「そうなんだ。だからね、今はその筋で殺害犯人を見つけようと鵜うの目鷹たかの目でさがしているから、君なんかうつかりいくと、たちまち捕えられて、容疑者になってしまうよ。そしたら、いつ娑婆しやばへでてこられるか分りやしない」

先生がおそれるわけは、もつともであった。しかし春木少年は、警察にこの話をしてもいいと思った。そして店の飾窓にあったその黄金メダルを、自分にかえしてもらうには、

早く話をした方が有利だと考えた。

この考えを話すと、先生は困ってしまった。

（しまった、とうとうまたおしやべりをしすぎた。さつきあんなに立花先生からいましめられていたのに、それを忘れて又しやべった。下手をすると、自分は参考人か容疑者として警察へ引っぱられるかもしれん。これは困ったことになった）先生の悄気かたはひどかった。

きびしい尋問 じんもん

「頭目 かしら。いったいどこへ行ってたんです。この二日というものは、頭目を探すので、大骨を折りましたぜ。しかも連絡はつかないじまい。骨折り損のくたびれもうけです」

四馬剣尺 しほけんじやくが、どつかと腰をかけた頭目台 とうもくだいの前へ行って、この山寨 さんさいの番頭格の木戸が、うらみつらみをのべたてた。木戸は、よほど骨を折ったものと見える。

「ふふん」四馬は、かるく笑っただけであった。

「こんどからは、なんとかたしかな連絡の道を用意しておいていただかないと、万一のときには、この山塞を持ち切れませんよ」木戸は久しぶりに腹を立てているらしい。

「大丈夫だ。万一のときは、おれがとびこんでくるから、心配はいらねえ」

「こつちから知らせたいことがあつても、それができないとすれば、結局頭目の大損害じゃないですか」

「すると、なにかおれに知らせたいことがあつたんだな。それは何だい」

「わしではないんです。机ドクトルが、何か見つけてきたんです。それが三日前のことで、ドクトルは町へいったんです」

「ふーん。三日前のことか」

頭目は、ボールの中で、日を逆さかにかぞえているようであった。

「チャンフー殺しのあつた日のことだな」

「そうです。あの日の午後、ドクトルは息せき切つてここへ戻つてきましたな、『頭目はどこにいる』と食いつくようにいうんです。どうしたのかと訊くと、『一刻も争うことだ、頭目の耳に入りたいことがある』という。なんだと聞きかえすと、『黄金メダルの半ぺら

が、海岸通りのある店の飾窓に売りにでている』というんです。わしはおどろきましたね」
「それからどうした」頭目は気色ばんで、その先の話をさいそくした。冠かんむりの下のボールが
ゆらゆらと動く。

「それから頭目探しです。みんなをかりたてて、あらゆるところを探しまわりましたね。
ところがだめなんです。机ドクトルからは、『まだか、まだか』と、きついさいそく。困
りましたね。それで三日間、得うるところなしです」

「ばかだなあ。そんなものが見つかれば、なぜすぐに買いにいかないんだ」

「おっと。それはいわないことにしましょう。この山塞では、四馬剣尺頭目が命
令しないことは何一つ行えないきびしいおきてになっているんです。これは頭目、あなた
が作ったおきてですよ」

「よし、そんならよし。じゃあ、机博士をここへ呼んでくれ」

「はい」木戸がでていくと、やがて机博士がいかわって細長い身体をこの部屋にあらわ
した。彼は木戸とちがって落ちつきはらっていた。頭目の前までいって、卓たくをへだてて、
四角い椅子に腰を下ろした。

「ご用ですか」

「今、木戸から聞いたが、三日前に、海岸通りのある店で、黄金メダルの半ぺらを見つけたって」

「偶然に見つけましたよ。さつそく頭目に知らせようと骨を折ったんですが、残念にも、頭目に運がなかったな」

「本物かい」

「さあ、私は本物と鑑定しましたね。それも頭目がこの間まで持っていた半ぺらではなくて、その相手になる半ぺらでしたよ。三日月形をして、骸骨がいこつの顔が横を向いているようでした」

「お前は、それを手にとつてみたのか」

「手にとつてみましたとも。万一、にせ物では頭目に知らせてお叱りをこうむるばかりだから、掌てのひらにのせて比重をあたつてみました。たしかに純度の高い黄金でできていることにまちがいなし。そこで値段を聞いたら、三十万円というんです。その因業いんごうじい爺のチャンフーという主人がね」

「三十万？」頭目はちよつとことばをとめたあとで「三十万円にちがいないか」

「ちがいなし。しかしなぜ頭目は、そんなことを聞くんです」

「とほうもない高値だから」

「ふふん」と机博士は、けいべつをこめた笑い方をして、

「しかしこれが例の宝庫へ連れていってくれる案内者なんだから、三十万円はやすいと思うがなあ」

「あの店の商品としては高すぎるんだ、そして君はどうした」

「どうしたもあるもんですか。さつそく山寨へかけ戻って、頭目に知らせるよう大さわぎを始めたんです。いったい頭目は、どこへいったんです」それに答えなくて、頭目はぴしやりとことばを机博士に叩きつけた。

「お前は、チャンフーの店前で、なにか手品をやりやしなかったか」

「手品ですつて。とんでもない。私は、手術ならやりますが手品はやりませんよ」そういつて机博士はうそぶいた。

二人の間に、しばらく沈黙があつた。

と、とつぜん博士は口を開いた。

「チャンフーを殺したのは私じゃありませんよ。あんな老ぼれを殺す理由なんか、私にはありませんからね。……それより頭目。早くあの店へいって黄金メダルを持ってきたらど

うです。頭目が今まで持っていたのは猫ねこおんな女にに奪われちまったんだし、さびしいですからねえ。あれが一つ手にはいれば——」

「やめろ。あの店にはもう黄金メダルはないんだ。チャンを殺した犯人が持っていたのか、それとも……」

「それとも」

「まあ、それはいうまい」

「頭目。はつきりいつて下さい。私が盗んできたとてもいうのですかい」

「おれは知らない。今日までかかって、いろいろと調べたが、手がかりなしだ」

頭目は、いつになくがっかりした調子でいった。

監房生活
かんぼう

その後、牛丸平太郎少年は、監房の中におしこめられたままになっていた。あれ以来一度も頭目の前にもひきだされないうし、またその手下てしたのためいじめられもしなかった。むしろ牛丸少年は、山寨の人々から忘れられたようになっていた。

たいくつで、やり切れない牛丸少年であった。三度の食事が待ちどおしかつた。その食事は、口がきけず耳のきこえない男が、きちんきちんとはこんでくれた。「小竹^{こたけ}さん」と呼ばれることもあつた。

とにかく小竹さんが顔を見せてくれるのが、牛丸少年にとって、一日中の一番うれしいことだった。少年は小竹さんに対し、親しみの表情を示したが相手の小竹さんにはそれが感じられたことはない。いつも寝ぼけているような間ぬけ顔であつた。牛丸少年は、たいくつに閉^{へいこ}口しながら、一つの願いを持つようになった。それはいつか頭目の前へいっしよに呼びだされた戸倉老人と、話しあうようになりたいという望みであつた。

あの老人も、たしかにこの地下牢のどこかの一室におしこめられているはずだった。それはいつたいどこだろう。そしてどうしたらあの老人と連絡がとれるだろうか。牛丸少年はそれを宿題として考えはじめると、すこしもたいくつでなくなった。ただし、この宿題の答は、かんたんにはでてこなかつた。

「戸倉老人の監房は、もう一階下にあるんだな」やっとこの答が少年の頭の中に浮かんできた。それは小竹さんが食事をはこぶときの行動で、それと察したのである。

なぜかという、小竹さんが食事を持つてくるときは、それを手さげ式の金属製の岡^{おかも}

持ちに入れて持ってくる。そして牛丸少年の監房の前に止まって、食事をさし入れる。それから小竹さんは、ずんずん奥へ歩いていくが、小竹の足音と岡持のがちやがちや鳴る音が、やがて階段を下つていくのが分る。それから五分ほどすると、小竹さんは引返してきて、牛丸の監房の前を通りすぎる。これによって考えると、戸倉老人は、もう一階下の監房に入れられているらしい。

(一階下にあのおじさんが入れられているんだったら、ぼくと話をするのはちよつとむずかしいことになる)

少年は、ざんねんに思った。

しかしなにかうまい方法を考えつくかもしれないと、その後も頭をひねって、監房の前の交通に注意おこたを怠おこたらなかつた。

机博士が、朝早く一度、前を往復する。しかし牛丸少年のところへは寄らない。どうやら博士は、階下したの戸倉老人を診察にゆくように思われる。老人は、ずっと身体がよくないのであろう。ある日の夕方、食器を下げるために、小竹さんがまわってきた。いつものように頬ほおかぶりをし、その上にうす茶色の、かたのくずれた鳥打帽をのせていた。彼は、監房の鉄格子てつこうしをとんとんと叩いて、牛丸少年に早く食器をだせとさいそくした。

牛丸は、食器を両手に持って、入口までいった。そして鉄格子の向うに待っている人物と顔を見あわせて、おどろいた。

「しいッ」相手は、唇へ指を立てて、しずかにするようと注意した。頬かぶりに烏打帽の姿はいつも見なれた小竹さんの姿だったが、顔はちがっていた。ひげだるまのような戸倉老人であったではないか。

「あッ、あなたは、どうしてここへ……」

「しずかに、わしは君に聞きたいことがあつて、危険をおかしてここへやってきた」

と、老人はそれから岡持を床へおき、顔を鉄格子につけて早口で牛丸君に話しかけた。

そのときの話は、主に春木少年のことであつた。だが老人は、彼が春木に渡した黄金メダルのことについては一言もいわなかつた。老人の知りたいのは、春木君の安否あんびであつたようである。

だが老人は、牛丸少年の話から考えて、春木少年の身の上に危険があることを悟さとつた。

それで春木君に警告するために、なんとか方法を考えたいと、これは牛丸君にも話した。

「ぼくをここから逃がして下さい。そうすればきつと春木君に、あなたの言伝ことづてをつたえます」

牛丸はそうだった。老人は考えておくといい、その場を去った。彼は奥へ引返し、そして階段を下りていった様子である。

それからしばらくすると、彼はもう一度牛丸の監房の前へやってきた。だがそれは戸倉老人ではなく、本物の小竹さんであった。

牛丸は、おやおやと思った。そして疑問が一つ、ぴよんと湧いてでた。

（おかしいぞ。戸倉老人は、この口がきけず、耳のきこえない小竹さんに、どういう方法で話を通じて、小竹さんに変装へんそうすることを承知させたのだろうか）

全くふしぎなことだ。

ひよつとすると、小竹さんは、わざとよそおっているのではあるまいか。そう思った牛丸少年は、空からになった食器を渡しながら、小竹さんに話しかけた。すると小竹さんは、首を左右に振り、耳と口とを指さし「自分は口がきけず耳がきこえない」と身ぶりで語って、すぐ立ち去った。

「ふーン。やっぱり小竹さんは、ほんとに口と耳が不自由なのかしら」

牛丸少年は、ため息をついた。

その後も、牛丸はしんぼうづよく、毎回小竹さんに話しかけた。だが小竹さんの態度は

同じことであつた。

ところが、それから三日目に、思いがけないことが起つた。

それは夕食後、小竹さんが食器をあつめにきたときのことだつた。牛丸少年が、食べ終つたあとの皿二枚とスープのコップとを、小さい窓口から小竹さんに渡そうとしたとき、あつという間に皿は牛丸の手をすべつて——いや、牛丸少年は皿を小竹さんに渡し終つたつもりだつたから、手をすべらせたのは小竹さんの方であらう——皿は少年の監房の床に落ちて、小さな破片になつてとび散つた。牛丸は青くなつた。今にも小竹さんから、すごい形ぎようそう相そうでにらみつけられて怒られるだろうと思つた。

小竹さんは、そうしなかつた。彼はかぎをだして、監房の戸を開いた。そしてしずかに中へはいつて、破片をひろいだした。破片を罔持の中へ拾っているのだつた。牛丸はおだやかな小竹さんの態度にますます恐きよう縮しゆくして、彼もまた一生けんめいになつて破片を拾つた。

しばらくしてそれは終つた。小竹さんはそのまま立ち上り、外へでた。そして入口に錠をかけりて立ち去つた。その小竹さんのおだやかさに、牛丸は始めたいへんに叱られると思つていただけに非常に意外で、小さい窓口から小竹さんのうしろ姿を見送つていた。

そのときであった、彼はうしろから、かるく背中を叩かれた。

おどろいた、このときは！ この監房には自分の外に誰もいないのだ。だから少年はびつくりして、その場にとびあがったのだ。ふりかえった。

「あッ」

「しずかに！」白いきれを頭からすつぽりかぶり、すその方まで長くひいた怪物かいぶつが、子供の声をだした。その白いきれがとれ、中から少年の顔がでた。

「あッ、春木君！」

「牛丸君。よくぶじでいてくれたね」

「ぼくを助けにきてくれたんやな。こんなあぶないところへ、よくきてくれたなあ」二人は、ひしと抱きあい、頬と頬とおしつけて涙をとめどもなく流した。

どうして春木少年は、このおそろしい山塞にもぐりこんだのか。また、小竹さんが、なぜ春木少年を、そつとこの監房の中へすべりこませたのか。

そのような春木少年の冒険ものがたりは、その夜くわしく、牛丸君に語られた。

また、牛丸君の家がその後、どうなっているかということや学校の話、警察の話、チャン老人殺しの話など、春木君が牛丸君のために話してやることは多かった。

牛丸君の方でも、この山寨に連れてこられてからこつちのことについて語る事が少くなかった。

それらのことがらの中で、読者がまだ知らない話をここで述べたいのであるが、今はそれができない。というのは、今ちょうど、机博士の身の上におそろしい危難が迫っているからである。その方を先に記さなくてはならない。

罨くらべ

黄金おうごんの糸で四頭とうりゆうの竜のぬいとりをしたすばらしくぜいたくなカーテンが、頭目台とうもくだいのうしろに垂たれている。

台の上には、頭目用の椅子が一つおかれているだけで、人の姿はその上にない。いやこの部屋には今誰もいない。

垂れ幕の奥では、かすかな音が、ときどき聞える。

頭目よぶが、この夜更よふけに、なにか仕事をしているのであろうか。もう只今ただいまの時刻は、その山寨の人々ならどんな呑のんだくれの若者も寝床ねどこについて、高いびきを一時間もかいたは

ずであった。午前三時だ。ここ山塞も、丑満時を越えた真夜中である。では、誰であろうか。黄竜の奥の間で、ひっそりと物音をさせているのは？

それこそ机博士であった。

博士ただひとりだ。博士は、眉をつりあげ、額に青筋を立て、真剣になって、黄竜の間で家探しをしている。

机の引出もあけた。戸棚もみんなあけて調べた。秘密の大金庫も、壁からくりだして、すっかりあけて調べた。ありとあらゆる什器や家具を調べ、今は、壁をかるく叩いてまわっている。どこかに彼の知らない極秘の隠し場所があるかもしれないと思ったからだ。だがみんな失敗だった。

(無い。なんにも無い。黄金メダルに関するものは、こんなところへはおいておかないのかな)

博士は無念に思つて、唇をかんだ。

(たしか、この前、この部屋へ黄金メダルをしまうのを見たのだが……あれは、たとえ猫女こおんなに奪われたにしろ、あの頭のするどい頭目のことだから、メダルの写真とか、関係書類とかを、ちゃんと保存してあるにちがいないんだが、どうも見あたらないなあ)

机博士は、チャンフー号の店で、秘密に撮影した三日月形の方の黄金メダルの半ぺらの写真を持つている。もし頭目の部屋に、頭目が猫女にとられた、扇形おうぎがたの方の半ぺらの写真を持つているなら、それを手に入れたかと思つた。そして両方をつきあわせてみるなら、この黄金メダルの秘密も解けるにちがいないと考えたのだ。（なにも、生命をまともにして、本ものの黄金メダルを手にいれないで、写真さえあれば、たくさんなのだ。そこに彫りつけてある暗号を解きさえすれば、大宝庫だいほうこの場所が分るにちがいない。おれは頭目などより、一枚役者が上なんだ）と、博士は思つている。

だが、いよいよ探してみると、ここぞと思つた黄竜の間に、思う品物がないのである。博士はくやしくてならなかつた。腕組うでぐみをして考えこんだとき、

「手をあげろ。横着者おうちやくものめ」と、はげしい叱り声しかが、入口の方からひびいた。いつの間にか黄竜の幕をかきわけ、四馬頭目の巨体きよたいが、長袖ながそでから愛用の毒棒どくぼうをつきだしている。

「うッ！」博士は青くなつて、さつと両手をあげた。あの毒棒は、押釦ボタン一つおすと、一回に十本の錐きりが、さきにおそろしい毒をつけたまま、相手の身体にぐざりとつき刺すのであつた。その毒の調合をしたのは、机博士自身であつたから、その猛毒については誰よりも

博士が一番よく知っている。だから博士が青くなつて両手をあげたわけだ。

「この間から、どうもお前の様子がへんだと思つていたが、この部屋でいったい何をしようと思つていたので」

頭目は落ちつき払つた中に、憎しみのひびきのはつきり分る声で、博士をきめつけた。

博士は、口をかたくつぐんでいた。

「いうんだ。いわないと、こいつがとんでいく。お前がよく知っている恐ろしい毒矢どくやがくらいたいか、それともいつてしまうか」

「黄金メダルの半分の写真でもお持ちなら、ちよつと見せていただきたいと思つたのです。それだけです」

博士は、ついに返事をした。

「それだけだつて。ふふん」と頭目は皮肉ひにくに笑つて、

「しからば、お前はチャンフーのところから、三日月形の半ぺらを持ってきたんだな。いや、ちがうとはいわせない。そうでなければ、おれが持つていた半ぺらの方を見たいなどという気を起すはずがない」

そうではないと、博士は一生けんめいに弁明した。だが、博士の弁明が真剣になればな

るほど、頭目はそんなことが信じられるか、とはねつけた。そしてついに、

「そうだ。これからお前の部屋へいこう。この部屋でやったとおりのことを、おれはお前にやりかえしてやる。部屋のをみんなひつくりかえして、そうさが総探しをやってやる」

「あッ、それは……頭目。許して下さい」

博士の態度が一変して、気が変になったように見えた。が、すぐ博士は元にかえって、そのような乱暴は思い止とどまつてくれと哀願あいがんした。

「ならん。お前の部屋へゆくんだ。先へ歩け。命令をきかねば、毒矢をぶつ放すぞ」

もう仕方がなかった。机博士は、しおしおと歩きだした。その背中に、頭目が毒矢銃をびつたりとおしつけた。

「じゅうじしやく自業自得だ。頭目をだしぬこうなんて、反逆行為だ。反逆行為の刑罰はどんなものだから知っているだろう」

向うを向いて、重い足をひきずって進む机博士の顔には、ふしぎな笑えみが浮んでいた。

（今にめにもものを見せてくれる。その時になつて腰をぬかすまいぞ。へん、おれの作った罠の中にわざわざおはいり下さるのだ。四馬剣尺ばの化けの皮を、今にひんむいてくれる）

博士のひそかなる気味のわるい笑いは、もちろん頭目には見えるはずもなかった。その

頭目もまた、ひそかなる笑みを口のあたりに浮べていたのだ。

(見ろ。こんどというこんどは、陰謀屋いんぼうやの机博士に致命傷ちめいしょうをくらわせてやる。きさまは、自分のわる智恵の中に、自分でおぼれてしまうのだ。それにまだ気がつかないとは、きさまもあんがい頭がよくないて)

狐きつねと狼おかみの化かし合いだ。どっちが狐で、どっちが狼か。それはしばらく見ていなくては、きめかねる。

ついに机博士は、自分の部屋の扉を開いた。そのとき彼は、自分のうしろに異様な気配を感じたので、はっとしてふりかえろうとした。

「ふりかえるな。向うを向いている」頭目が大声で叱りつけた。博士はぎくりとして、首を正面へ向けかえた。……が、今ふりむいたときにちらりと見たことだが、頭目のそばにもう一人背の高い人物がいたように思った。

「早くはいれ」机博士は背中をつかれた。

そこで室内へ足をいれた。室内は、暗室あんしつになっていた。ただ桃色ももいろのネオン灯とうが数箇、室内の要所にとぼつていて、ほのかに室内の什器や機械のありかを知らせていた。

「部屋を明るくするんだ。これじゃ暗すぎて、なんにも見えない」頭目がそういった。

(待つていました！)

と、博士は、心の中でおどりがった。

「はい。今、明るくします。ちよつとお待ちなすつて」

「へんなまねをすると許さんぞ。おれはお前のそばをはなれないから、そう思え」

頭目が部屋の中へ足を踏み入れた。

「大丈夫です。へんなまねなんかしません。そこに油だらけの機械がありますから、けつまずかないようにして下さい。今すぐスイッチをひねりますから、ちよつと——」

博士はぐんぐん奥へはいつていった。そして壁ぎわに置いてある四角い機械のうしろへまわった。博士の顔には、またもや気味のわるい微笑が浮かんだ。

(今だ。化けの皮をはいでやる時がきたぞ。覚悟しろ)

博士はスイッチを入れた。それこそこの間中から博士が考案し、組立てていた大きなエックス線装置であった。これは広角度にエックス線を放射して、人間の身体全体を照らし、そして部屋のまん中にぶら下げてある、幅二メートル高さ三メートルの大きな螢光幕けいこうまくにその透視像とうしぞうをうつしだすようになっていた。これは、いつも覆面ふくめんをしている頭目を、エックス線で照らして、その正体を見てやろうという陰謀であった。そして思いがけなく、

早くその機会がきたのだ。頭目の方からこの部屋へ足をはこんで、はいつてきたのだ。こないないことはない。机博士は興奮をおさえきれない。

さつと、蛍光が、幕面を照らした。

実にたくみに、頭目の全身の透視像が幕面に写った。着衣や冠の輪廓りんかくがうすく見える中にありありと黒く、むざんな骸骨姿がいこつすがたがうつしだされた。これが頭目の骨格こつかくなのだ。「あッ」頭目は気がついた。

手にしていた毒矢のはいつた棒銃をふりあげた。その恰好かっこうが、そのまま幕にうつった。おそろしい骸骨が、生きてるように動き、いかりに燃えて棒をふりあげたのだ。そのすさまじい光景は、筆にも画にもせられないほどだった。

ガン。毒矢の棒は博士の方へとんできた。と、室内の電灯が全部消えた。完全な暗黒となった。そしてつづけさまに、いろいろな器物のこわれる音がした。

机博士の声はしなかった。また頭目の声もしなかった。

博士は、おそろしいものを見たのだ。

頭目の骸骨像によって、頭目の正体は、世にも奇怪なものであることが判明した。それはたしかに小さな男だった。その小さな男が、足に一メートル位もある高い棒をつけて立

つていなのだ。その上に裾すそを高くひいた中国服を着ている。こうしてエックス線で透視してみないかぎり、頭目の秘密が明かるみへだされることはなかったであろう。

四馬頭目の正体は、小さな男だったのか。

この部屋に、このおそるべき光景を見た者が外にもう二人いた。それはその前にこの部屋に忍びこんでいた春木少年と牛丸少年とであった。二人はおそろしさに、もう生きた心地もなかった。さて、まっくらがりになったこの部屋のおさまりは、いったいどうなるのであろうか。

秘密ひみつの抜け穴ぬあな

（われらの首領というのは、小男であったのか！）

机博士は、その意外に心をうたれ、危険の中に、しばらくぼんやりしていたほどだ。

彼は、首領がもつとほかの人物であると思っていたので、その予想は、エックス線を首領にあびせた結果、すっかり思いちがいであることが証明された。

（だが、どうもまだ、ふにおちないところがある。いつぞや、ひそかに懐中電灯かいちゆうでんとうを首

領の顔の下に近づけて、覆面ふくめんベールの中にある顔をちらつと見たことがあったが、あのときの首領の顔は、目鼻立のよくととのつたりつばな顔であった。女にも見まがうほど美しい顔であったが……)

と、机博士の頭の中には、答がわり切れないで、ぐるぐる渦うずをまいていた。さつき、エックス線で首領の顔をてらしつけ、首領があつとひるむところを、すばやく前へとびだしてあのベールをかかげて、首領がどんな素顔をしているか、それをたしかめればよかったのだ。だがそれをしなかった。不覚ふかくのいたりだ。もつとも、そんなことをすれば、首領は一撃のもとに自分を毒針どくばりでさし殺したかもしれない。これだけのことを考えるのに、永くかかったわけではなく、危険の下に首をちぢめている机博士の頭の中を、電光のように走った思いであった。

がらがらツと、またもや器物がなげつけられ、机博士の頭の上に降ってくる。そして首領のあららしい息づかいが、だんだん近くによつてくる。

(あぶない。このままでは殺される。どうかして逃げだしたい。穴倉あなぐらへつづくあの下り口まで、うまくたどりつけるだろうか。下り口の戸を開くまで、死なないでいるかしらん) 博士が思いだしたのは、この部屋の東よりの隅すみに、地下の穴倉へつづく下り口があるこ

とだった。これは博士が、他の者に見せたくない器械や材料などをかくしておくために作った秘密の物置であつて、この山寨では彼以外に知る者はなかった。その穴倉の中には、さらに、抜け道があつて、それをくぐつていくと、山寨の外へでられるのだ。もつともそこは、けわしい崖がけの上にあつて、そこから街道へ下りるには、特別の道具がないとだめであつた。そのかわりに、このけわしい崖の上に開いた抜け道は、他の者の目につくような心配は、まずないものと思われ、机博士は十分自信を持っていたのであつた。その抜け道のコースへ、とびこみたい。下り口のところまで、無事にゆきつくかどうか。

(やつつける)

もうこうなれば、運を天にまかせる外ないと、机博士は決心をかためた。二カ所や三カ所に傷をこしらえるのは覚悟の上で、博士はくらがりを手さぐりで、横にはつていった。

なんでも、やつてみることだ。荒れる首領の攻撃は、机博士の身体の移動のあとを追つかけてはこなかつた。やつぱり、元のところ博士がかくれていると思ひ、がらがらツドすんどすと、しきりに重いものがなげつけられていた。だから机博士は、反かえつて危険を抜けることができ、うれしさに胸をおどらせながら、下り口のところにはまっつてゐる揚あげ戸どをひきあけることができた。

すこしは音がした。しかし室内はどんがらどんがらやっている最中であつたから、すこしぐらいの音は相手に聞えそうもなかつた。博士は、してやったりと、揚げ戸の下へ身体をもぐらせた。足の先に、階段がさわつた。もう成功である。彼は、すっかり中へはいつた。そして、揚げ戸を静かに閉めた。誰も追いつてくる様子はなかつた。博士は、ほつと安心の一息をついた。

ここまでくれば、ぎやくざつしや 虐殺者の手をのがれたようなものだ、と机博士は思った。彼は手と足で階段をさぐりながら下りていった。階段を下り切つた。そこに厚いカーテンが二重に張つてあつた。その向こうが物置の相当広い部屋になつていたのである。博士はカーテンをおして中へはいつた。中は、まつくらだつた。

「おやツ。今日は電池灯でんちとうが消えている」

そこには、いつもは電池灯がついていて、室内を照らしていた。これは停電に関係なく、いつでもついている電灯であつた。それが今日は、運わるく消えている。どこか故障をおこしたのであろうか。そう思いながら、机博士は、鼻をつままれても分らない闇の中を、手さぐりで足をひきずりながら五六歩もすんだであらうか、そのとき大きなおどろきが、彼を待ちうけていた。とつぜん彼の両りょうの手首が、何者かによつて、ぐつとにぎられたので

あつた。

「ほほほ、待っていたよ、博士さん」

闇の中に、たしかに女にちがいない声であつた。何者？

おお、
猫ねこ女おんな

「誰だ、君は！」博士は度肝どぎもをぬかれて、かすれた声で、やっとこの短いことばを相手にぶつつけた。

「あたしかね。あたしは『猫女』さ。どうぞよろしく」

「えッ、猫女……」机博士のおどろきは、五倍になった。

「猫女が、なぜこんなところに——」

「大きな声をおだしでないよ。上では、あのとおり大ぜいさんが集っているんだよ」なるほど、上では大ぜいの足音がいりみだれている。きつと首領がみんなを呼び集め、姿を消した自分の行方を探しているのにちがいない。

「きゆうくつだろうが、手をうしろへまわしてもらいましょう」猫女はおそろしく力強か

った。机博士の手をかんとんにうしろへねじり、がちやりと手錠てじょうをはめてしまった。

「君は、私をどうしようというんだ」

猫女は、首領から黄金メダルの半ペラを奪ったことがある。すると、猫女は首領の敵だ。自分も今は首領の敵になっている。それならば、猫女は自分と手をにぎって、味方同志になってもいいのだと思う。「猫女よ、なぜ私をいじめるんだ」といいたい、机博士だった。「お前さんからもらいたいものがあるのさ。すなおに渡してくれないことは分っているから、こつちでお前さんの身体しんたいけんさ検査を行うわよ」

「なにッ。なにがほしいんだ」

机博士が不安なひびきのある声でたずねたのに対し、猫女はこたえなかった。そしてくらがりの中で、博士の身体をしらべていた。室内には、電灯でんとうはついていないし、猫女は懐中電灯かいちゆうでんとうさえ使わない。全くのくらがりの中で猫女は、どしどし自分の仕事をすすめていく。猫女は、猫のように、くらがりの中でも目がきくらしい。それに気がついて、机博士の不安はつのがつた。

「ああ、これなのね、お前さんが鬼の首をとったように思ってたのは……」

とうとう猫女は、目的物を探しあてたらしく、博士の下着のポケットから、小さいひと

まきのフィルムを取出した。

「それはちがう。それは何でもない」机博士は、最後の努力をした。だが、猫女はそのフィルムを返そうとはしなかった。そして尚なほもつづいて身体検査をやりとげたあとで、

「さつき見つけたフィルムは、こつちへもらったよ。お前さんは器用なことをやってのける人だよ。チャンフリーを殺したのも、お前さんじゃないのかい」と、博士をからかった。

「とんでもない。私がチャン老人を最後に見たときは、彼はこれから百年も長生きをするような顔をしていた。あの慾じじいばり爺じいを殺したのは、私ではない」

「ふん。なんとでもいうがいい。でも、あたしはチャンフリーの身内でもなんでもないから、お前さんに復讐ふくしゅうしようとは思わない。が、お前さんがやったかどうか、神さまが知っておいでだよ。だからさ、これから神さまのおさばきを受けるように用意をしてあげるよ」

猫女は、へんなことをいった。机博士が、その言葉の謎をとこうとしていると、いきなり目かくしをされてしまった。もちろん猫女の仕業しわざだった。ぎゅうぎゅうと二重に目の上をしばってしまった。机博士は恐怖におそわれ、それについて抗議をした。と、口の中へハンカチだか何だかを突っこまれた。あつとおどろいていると、口の上をぐるぐると布でまかれてしまった。もう声がだせない。猫女の手ぎわのよいことはおどろくばかりだった。

それから猫女は、机博士の身体に、ロープをぐるぐるまきつけた。それがすむと女は博士の腰のところを叩いて、

「さあ、お歩きな。お前さんのこしらえておいた抜け穴から外へでるのだよ」

なんでも知っている猫女だった。なんというすごい奴だろうと、ものがいえない机博士は、くやしさとおそろしさに、からだをふるわせるばかりであった。

歩いて、穴の外へでた。ひやりと涼しい風が首すじに吹きつけたので、それと察した。

いやまだある。眼かくしの布の下に、ほんのすこしばかりの隙すきがあつて、外の明るさが感

じられた。これはさつき目かくしをされるときに、机博士は、顔をうんとしかめたのだ。

その上に目かくしをされ、あとでしかめ面つらを元に直すと、すこし目かくしがゆるくなる。

これは前から博士が知っていた術である。今うつすらと、足許あしもとの方の明るさが見える。

明るさだけではなく、物の形が見えないものかと、博士は目かくしの下で、しきりに目をくしゃくしゃやつてみた。

しばらく彼のところを離れて、向こうでなにかやっていた猫女が、このとき博士のそばへもどってきた。

「さあ、こつちへおいで」博士は又歩かされた。ごつごつした岩の上を歩かされた。崖がけの

端^{はし}までいくらも距^{へだた}つていない。足を踏みはずしてはたいへんだ。

「そこでストップ。さて、これから二三秒の間、息をとめているがいいよ」

猫女が、妙なことをいった。机博士は聞きかえしたかったが、ものがいいえな。それで一生けんめいに目かくしの隙間^{すきま}から、何でもいいから見えるものを見たいと努力した。

岩かどが見えた。

(あッ、おれは今、崖の端に立っている！)

机博士は戦^{せんりつ}慄した。たいへんだ。足を踏みはずせば、崖下に落ちていって、骨をくだいて人生にさよならを告げなくてはならない。あぶない。「助けてくれ」と博士はさげんだが、もちろん声がでるはずもない。

「今になって、じたばたするんじゃないよ。早いところやってしまおうからね」

猫女が机博士の方へ近づいた。何をするのかしら。その時に彼は、目かくしの隙から、猫女の服の一部を見た。足も見た。スカートは、濃い緑色の服地でできていて、短いスカートだった。その下に長くのびた形のいい脚があった。二本とも揃^{そろ}っていた。うすい肌色の長靴下をはいている。そして靴は短靴^{たんぐつ}。スポーツ好みの皮とズックでできているあかぬけのした若い婦人向きの靴だった。それだけを一目で見た机博士は、猫女の腰から上が

見えないことを残念に思った。

しかし緑の服、長く逞しい二本の脚、肌色の長靴下に、若い婦人向きスポーツ好みの短靴——というところから想像されることもない猫女の人がらだった。彼女のことばつきよりも、ずつと上品な服装ではないか。一体何者であろうか。どんな顔つきの女であろう——と、そこまでを一瞬間に考えたとき、彼の身体はとつぜん「えいッ」と突きとばされた。(うッ)と、苦悶のさけびも声も口のうち。

彼の足は、すでに崖の端を離れた。宙にうかんだ彼の身体！

ああ、机博士の生命は風前の灯同様である。死ぬか、この変り者の悪党博士？ それとも悪運強く生の断崖にぶら下るか？

ごつたがえす山塞

二少年は、どうしたろうか。

机博士の暗室にもぐりこんでいた春木清と牛丸平太郎は、思いがけなくも博士対首領

のすさまじい争鬪そうとうを見た。机博士が首領にあげせかけたエックス線が、首領の正体をがいこつの小男として、緑色の蛍光幕へうつしだした。その怪奇も見た。そのあとで、はげしい器物の投げ合いで、室内はまっくらとなり、その部屋にとどまっていることは大危険となった。

「この部屋からでようよ」

「うん。今ならでられるやろ」

春木と牛丸とは、小犬のようになって、すばやく部屋からとびだした。

「あッ。ちよつと待った。しいッ」

牛丸は、春木よりも一足早く外へでたが、とたんにおどろいて、身を引いた。そしてうしろにつづく春木をおしもどした。彼は、廊下ろうかの向こうに人影を認めたからであった。

その人影は、牛丸がとびだすのと、ほとんど同時に、廊下の角かどを曲まがったので、牛丸はその人物のうしろ姿をほんの一瞬間見ただけであった。その人物は背が高く、長いオーバーを着ていたように思った。正確なことは分らない。はつきり見たのはその人物の片方の足だけだった。水色のズボンをはいた長い脛すねであった。そしてスポーツごのみの派手な短靴をはいていた。

スポーツごのみの短靴がはやると見える。そうではないであろうか。

(誰であろう、今向こうへいった人物は?)

と、牛丸は首をひねった。しかし彼は、その人物を追いかけていくつもりはなかった。

向こうへいつてくれて結構けっこうであると思った。このすきに、早いところ逃げてしまうのだ。

「さあ、走るんや。今のうちなら、地下牢ちかろうの方へ引きかえせる」牛丸は春木をうながして、

廊下を縫うようにして走った。彼は山塞の地理を研究して知っていた。運もよくて、彼は春木と共に、元の地下牢の方へ走りこむことができた。

そこには、戸倉老人が待っていた。

老人は、牢ろうばん番の小竹と身体をくっつけ合っていたが、少年たちがはいつてきたので、離れた。小竹さんは猿ぐつわをかまされ、手足はぐるぐるまきにされ、椅子にしばりつけられてあった。小竹さんの目だけは自由に動いていた。いつもの睡ねむそうなにぶい光の目はなく、いきいきとした目つきで、みんなの顔を見ていた。恨うらめしそうでもなく、いかりにもえている様子もなかった。

「それじゃ、わしたちはでかける。あとは頼みます。これから毎日、あんたの無事を祈る。短気たんきをおこさぬようにな」

と、戸倉老人は、小竹の肩をかるく叩いて、眼に涙をうかべた。すると小竹は、二三回あごをしゃくつてみせた。

「早くゆきなさい」と、いそがせているようだ。これでみると、戸倉老人と小竹との間にはひそかなる了解りようかいがあることが明らかだった。小竹がしばられたのも、二人合意ごういの上のことであるにちがいない。

そこで戸倉老人につれられ、春木と牛丸の二人は、山塞を逃げだした。どういくと抜けどにでられるか、そのことは戸倉老人がよく知っていた。要所要所の扉をあける鍵もちやんと持っていた。あける前に、警鈴けいれい用の電気装置をうまく処しよぶん分することも、やはり老人が知っていた。

それより牛丸少年がおどろいたのは、老人が元気いっぱいだったことである。牢の中でも、首領の前へ呼びだされたときでも、老人は一步も歩けない重病じゆうびょう人のように見えただ。それは、わざと重病人の風をよそおっていたのにちがいない。

しかし老人が、いくら巧たくみに抜け道から抜け道をたどって逃げたにしろ、わるがしこい四馬剣尺しほけんしゃくの張つてある網の目をすべてくぐりぬけることはできないはずだった。だがすばらしい幸運が、老人と二少年とを助け、一度もへまをやらないで山塞の脱出に成功した。

その幸運というのは、ちょうどこのとき山寨の中は、机博士事件でござったがえしていて、要所要所の見張りはおろそかになつていたので。

なにしろ、おそろしいでき事だつた。

町まで使いにいつて、ちょうど山寨の近くへもどつてきた一味いちみの一人が、ふと目をあげたとき、妙なものを見つけた。身体をぐるぐる巻きにされた一人の人間が、崖がけから横にでている電柱のような長い棒の先から吊り下げられ、ぶらんぶらんと揺ゆれているのであつた。

「うわツ、あぶねえ」

その使いの者は、仙場せんばの甲二こうじろう郎という男であつたが、彼はびっくりして胆きもをひやし、

その場へどすんと尻餅をついたくらいだ。見ていると、ますます人間は揺れ、今にもロープが棒の端からとけ、吊り下げられている奴は崖下へまっさかさまに落ちていきそうだ。

甲二郎は、気が落ちつくのを待つて立ち上ると、こんどは駆かけ足でもつて、山寨へとびこんだ。そしてこの変事へんじを知らせたのである。もちろん、棒の先に吊り下げられて、ぶらんぶらんしていた人間は、机博士にちがいがいなくつた。猫女の姿は、どこにも見えない。

甲二郎の知らせで、さつきから机博士の行方ゆくえを探していた団員たちは、それというので、山寨からとびだして、崖の上を見上げた。

「うわははは、たいへんだ。見ちやおれん」

「たしかに机博士だ。早く下へ綱を張れ」

「おい、首領に報告したか」

「知らせたとも。今ここへ、首領もでてくる、といってた」

こんなさわぎが起っていたから、二少年と戸倉老人の脱出は、あんがい楽に行われたのだ。そしてみんなが綱を張れたの、崖の上へいつてそつと綱をひいてみるだの、竹ばしごを組んで二人ばかり登って助けるだのとさわいでいる間に三人の脱走者は反対方向の山へまぎれこんでしまったのである。

生命いのちがけの脱出

二少年と戸倉老人とは、たがいに助けあつて、山また山をわけて逃げた。

ほんどう 本道へでると、ろくてんさんさい 六天山塞の悪者どもに見つかるおそれがあるので、道もないところを踏み分け、わざわざ遠まわりをして逃げた。山のごとは、さいわいにもこの土地生れの牛丸少年がたいへんくわしいので、方向をあやまるようなことがなかった。山塞を抜け

でたのが、朝の八時ごろであった。それから太陽が一番高くなる正午に近くまでの約四時
間を、三人は強行きょうこうして逃げた。

腹が減へつてならなかったが、戸倉老人はさすがに用意がよく、腰につけてきた包みの中
から、チョコレートとビスケットを出して、二少年に分けあたえた。おいしかった。谷間
の水にのどをうるおしながら、三人は、あらたな元気をふるい起し、それから又もや苦し
い行進をつづけた。

牛丸少年の考えでは、思い切つて西の方へ迂回うかいし、タヌキ山から山姫山やまひめやまの方へでて、
それを越えて千本松峠せんほんまつとうげへでるのがいいと思つた。しかしそこまでゆくには、今日いっ

ぱいではだめだ。どうしても明日までかかる。今夜は山姫山のどこかで野宿するほかない。

千本松峠へでれば、あと四時間ばかり下つて、芝原水源しばはらすいげんち地の一番奥の岸につく。そこ

へゆけば、水道局の小屋もあるし、うまくいくと巡回じゆんかいの人がきているかもしれない。

あとは心配ない。とにかく問題は、千本松峠へでるまでのところにある。方角はたぶんま
ちがえないですむと思うが一同の体力がつづくかどうか、きつとヘリコプターをとばして
追跡してくるであろう、四馬剣尺の一味の目を、うまくのがれることができるかどうか、
その二つにかかっているのだ。

牛丸少年は、今日のうちに山姫山までたどりつかねばならぬという計画を他の二人に話し、その日の午後は、とくに前後に気をくぼりながら、できるだけ強行進をつづけてもらった。午後二時ごろと思われるときに、果して空の一角にブーンと爆音が聞え、やがてヘリコプターが姿をあらわした。

「そらきたぞ。動いちやいかん。ぜったいに動くな」

戸倉老人が、叱りつけるようにいった。

このとき三人は、背の低い熊笹くまざさのおい茂った山の斜面しゃめんを下りているところだった。

いじわるく、身をかくすに足る大木もない。そこで熊笹の中にうつ伏したまま、岩のように動かないことにとめた。空から見下ろすと、背中がまる見えのはずであった。だから今にもだだブーンと、機関銃のはげしい掃射そうしやをくうことかと生きた心地もなかった。

いいあんばいに、ヘリコプターは、こつちへ飛んでくる途中で、とつぜん針路しんろを北へ曲げたので助かった。よもやこんな西の方まで逃げてきているとは思わなかったであろう。きわどいところであった。

ヘリコプターが追いかけてきたのは、その一回だけであった。タヌキ山を駆け下り、しばらく沢について歩き、それからいよいよ山姫山へのぼりだした。

こののぼりの二時間が、一番苦しかった。険しい斜面で、木の根につかまって、すこしずつのぼって行くのであった。枯れ葉に足をとられて、せつかくのぼった斜面を、ずるとすべり落ちて、大損することもある。またぐちやりと気味のわるい、山びるをつかんで青くなつたことはいくたびか分らない。腹は減り、のどはかわき、目は廻つた。もうこのへんでへたばつて声をあげようと思つたこともたびたびであつた。しかし自分が弱音をはいては、他の二人をがっかりさせると思い、齒をくいしばつてがんばつた。みんながそうしたものだから、山姫山の嶮もついに征服して、やがて地形は、わりあいゆるやかな斜面となつた。そして山姫山の頂上にある、測地用の三角点のやぐらが、夕陽を背負つて、によつきりと立つているのが見えてきた。三人は、疲れを忘れて足を早めた。山姫山の頂上に小屋があつた。三角点のすぐわきのところである。これは、陸地測量隊がかけていった小屋で、もちろん無人のときの方が多い。その空き小屋に三人ははいつて、その夜はここで一泊することにした。

夕食の時刻がきているが、その用意はなかつた。ただ戸倉老人は、チョコレートに残りと、それから三枚のするめを持つていた。それをかじつて、飢えをしのいだ。

日が暮れだした。もうでもよかろうと、三人は小屋の外にでて、下界をながめた。は

るかに芝原水源地が、ひょうたん形をして湖面がにぶく光っている。明日の行程でたどりつく目的地の湖尻の小屋が、豆つぶほどに見える。

(ここまでくれば、もう大丈夫だ)

と、三人が三人とも、そう思った。入日の残光が急にうすれて、夕闇が煙色のつばさをひろげて、あたりの山々を包んでいった。と、東の空に、まん丸い月が浮きあがった。満月だ。三人は危険の身の上をしばし忘れて、ほのぼのと明るい月に向きあっていた。

その夜、戸倉老人は、春木少年から黄金メダルに関するこれまでの話を聞き、少年が思いがけない苦勞をしたことに深い同情のことばをかけた。そのあとで老人は二少年から問われるままに、海賊王デルマがこしらえた黄金メダルの二片について、彼の知っているだけの秘話を月明の下で物語った。

「わしも、デルマの黄金メダルの秘密について、全部を知っているわけではない。もし全部を知っているものなら、こんなところにぐずぐずしていませんで、さつそく宝を掘りあてることに夢中になっているはずじゃ。正直なところ、わしはデルマの黄金メダルの秘密については、おぼろげながらその輪廓を多少聞きかじっているにすぎない。かんじんの秘

密は、どうしても例の黄金メダルの二片を集めた上でないと解くことができないのじゃ。だからわしの話も、あんがいつまらんことなのじゃ」

と、老人は二少年の熱心な顔を見くらべた。

「この前、春木君に渡した絹ハンカチは火に焼けて、三分の一しか残らなかつたそうじゃが、わしはその文句を宙でおぼえている。ちよつとこの紙に書いてみよう」

そういつて老人は、ポケットから、チョコレートを包んであつた紙をだし、そのしわをのばした。それから鉛筆の短いのを取り出し、その先をなめるようにして次のような文章を書いた。

かつこで囲んだところは、春木君の手にのこつた焼けのこりの部分に残つていた文字である。

——この黄金メダルは二つの破片

より成るものにして、スペインの海

賊王デルマが死の床において、彼の

部下のうち最も有力なるオクタンと

- (ヘザ) ールとに各々一片ずつを与え
- (たる) ものなりと伝う。この破片を
- (二つ合) わせたるときはデルマの秘
- (蔵する宝) 庫の位置およびその宝庫
- (の開き方を知) ることを得るよしな
- (り。オクタンとへ) ザールは仲悪かり
- (したため協力せず)、互いに相手の有
- (する黄金メダルの) 一片を奪わんも
- (のと暗殺者を送) りしたため、兩人共
- (斃^{たお}れ黄金メダルは暗) 殺者の手に移
- (り、それより行方不明) になりたり
- (ここに^{しよぞう}ある一片はオ) クタンの所蔵
- (せし一片にして余は地中) 海某^{ぼうとう}島に
- (おいてこれを手に入れたる) ものなり

「まあ、こういうことなのじゃ。実はもう一枚このあとに絹ハンカチがあるのじゃ。これはわしが春木に渡すひまがなかつたもので、六天山塞のきびしい取調べのとき、うまく見つけられないですんだものだ。それはわしの靴の中にしまつてある。これがそうだ」

そういつて戸倉老人は、右の靴をぬぎ、踵かかとのところをしきりにいじつていたが、そのうちに踵のところかかとに小さな四角い穴があいた。その中からひっぱりだしたのが、絹ハンカチのもう一枚だつた。それに次のような文句が書いてあつた。

——ちなみ因ちなみに海賊王デルマは、かつて日

本にも上陸したることありと伝う。

彼は大胆にして細さいしん心けいりん、経けいりん綸とに富むと

共に機械に興味を有し、よく六千人

の部下を統とうぎよ御ぎよせり。また彼の部下へ

ザールは、デルマが去りし後も一年

有半日本とどまに停とどまり、淡路島あわじしまとその対岸たいがん

地方ねじろを根城として住みしが、日本人

には害を及ぼすことなかりしたため彼
を恐ろしき海賊と知る者なかりし由よし

なり。彼は義ぎに固かたく慎しん重ちゆうにして最も

デルマに愛せられたり。オクタンは

剛ごう勇ゆうにして鬼神きしんもさけるほどの人物

なりき。

「どうだね。今読んだ文章の意味が分ったかね」

戸倉老人は、そういつて二人の少年の顔を見くらべた。

「分ったような、分らないような、どっちだか分らない」

と、春木がいった。すると牛丸が笑った。それにつられて老人も笑った。春木も、なんだかおかしくなつて、いっしよに笑った。

「それじゃ、もう一度話に直してしやべろう。結けつきよく局よくここに書いてあるとおりのことな

んだが……」

と、老人は、ことばに直して、同じことを復習して聞かせた。もちろん、ハンカチに書

いてあるよりはくわしかった。しかし要領ようりょうは同じことであつた。

「……あの黄金メダルの半ぺらを、わしが手に入れたときは、わしはある汽船せんいに船医せんいとして乗組んでいて、たまたま地中海を通つたのだ。そのときわしの乗つていた汽船が舵器だきに故障を起したので、その某島へ寄つて修理をやつた。そのために前後五日間そこに仮泊かほくしていた。その間に、わしははからずも黄金メダルを手に入れたのじゃ。……どうしてそれを手に入れたか。そのことは、宝探しには直接関係のないことじゃから、おしやべりしないでおくよ」

老人は、そういつてことばを結んだ。なにかいいにくいことがあるにちがいないと、春木はそう思つた。

とにかく、おどろくべきことだ。

今までは、一片いっぺんの屑金くずがねにすぎないではないかと軽く見ていたが、こうしていわれ困ん縁ねんを聞くと、海賊王デルマの死霊しれいが籠こもつていようように気味のわるい品物に思えた。

「惜しいことをしました。あれを盗まれてしまつて、まことに残念です」春木は、ほんつに残念でならなかつた。

「まあ、よいわい。わしが自由の身になつたからには、なんとかして取戻す方法がないで

もないのじゃ。うまくいったら、君たちにも知らせてあげる。しかしこのことは、他の人には絶対秘密にしておくがよいぞ」

「はい」

と春木はこたえた。しかし、彼はこのことを他の人々にもしやべってしまったことを思い出して、苦しかった。もつともしやべったのは、金谷先生かなやと四人の少年探偵の級友と、それからここにいる牛丸君だけにではあったが……。

「おじさんは、そのメダル探すあてがおまんのやな」

牛丸少年がたずねた。

「うむ。まあ、そういう見当じや」

「どこだんね。骨董店こつどうてんやおまへんか。海岸通りかいがんどおの方の骨董店とちがいますか」牛丸は

春木から聞いたチャンファー号の店の話を思い出して、あてずっぽうながら、いつてみた。

「ほう」と戸倉老人は目を丸くした。「そんならその店の名をいつてみなさい」

「万国骨董商ばんこくこつどうしょうのチャンファー号ですやろ」

すると戸倉老人は卒倒そつとうせんばかりにおどろいた。チャンファー号の事件については、春

木は牛丸には話したが、戸倉老人にはまだ話をしてなかったのだ。

「どうしてそれを知っているのか」

「あそこの店には、なんの品でもおますさかいにな。しかもうあそこは頼みになりません。主人が殺されましたさかい」

「なんという？」

「チャンフーという老主人が、この間ピストルで殺されてん。まだ犯人はつかまらんちゅう話だす。春木君から、ぼく聞いたんです」

「ばかばかしい。そんなことがあるものか。はははは」

と、とつぜん戸倉老人が笑いだした。

「なんで、おかしがってんだね」と牛丸が、げげんな顔で聞きかえすと、戸倉老人は、こういった。

「チャンフーが殺されるなんて、絶対にそんなことは有り得ないのじゃ。お前さんたちはだまされている」

どうしたのであろうか。春木少年は、びっくりして老人の顔をながめやった。戸倉老人は、へんなことをいいだしたものである。それとも、老人の笑うには、なにかしつかりした根拠こんきよがあるのであろうか。

戸倉老人が元気になって、事件はまたもやいつそう怪奇な方向へすべりだした。しかし中天には、明々皎皎めいめいこうこう々々たる大満月が隈なく光をなげていた。

燃えあがる山塞さんさい

戸倉老人は妙なことをいいだした。

「チャンフーが殺されるなんて絶対にそんなことはあり得ないのじゃ。お前さんたちはだまされているのだ」

戸倉老人はそういつて笑うのだ。

その笑いは、いかにも確信があるもののようなのであった。

しかし、戸倉老人はどうしてそのようなことがいえるのだろう。老人はいままで六ろく天てん山塞さんさいの地下の密室におしこめられていたのではないか。ちかごろ町に起ったでき事について意見をのべる資格はないはずだ。

それにもかかわらず、牛丸や春木の言葉をてんできこうともせず、あくまで、チャンフーの生きていることをいいはるには、何かたしかな根拠のあることなのだろうか。老人に

ありがちな、いったんこうと思えば絶対、ひとの言葉をきこうとしない、かたくなさからであろうか。

それはさておき、山姫山やまひめやまの頂上にある陸地測量隊りくちそくりようたいの山小屋に一夜をあかすことになった、戸倉老人と春木、牛丸の二少年は、それから間もなく背すりあわせて寝ることになった。

秋ももうだいぶ更ふけている。夜の山小屋は寒かった。毛布もなにもない山小屋で、三人は背すりあわせて、なかなかまぶた瞼があわなかった。山小屋のなかには、炬がきつてあり、たきものの用意もしてあったが、うつかりそんなものを燃もすことはできないのだ。

燃せば、火がでる。煙もたとう、ヘリコプターの眼がこわいのである。怪あやしいとみれば、あいてのみさかいてもなく、機関銃の雨をふらせる連中なのだ。

「仕方がない、このまま寝よう。なにすぐ夜があけるさ」

寒さも、飢うえも、疲労ひろうにはうちかてなかった。それから間もなく三人は、うとうとしはじめたかと思うと、やがて、前後もしらず、ぐっすりと眠りこんだ。

それから、どのくらいたったのか。

ふたつにわれた黄金メダルや、スペインの海賊王や、さてはまた、かくされただいほうもつ大宝物

について、ふしぎな夢をみていた春木少年は、ふいにはッと眼をさました。夢のなかでなにやら、異様な物音をきいたからである。

いや、それは夢ではなかったのだ。げんにその物音はまだつづいている。パチパチと何かはぜるような音——春木少年はギョツとして、上半身をおこしたが、そのとたん、ドカーンともものすごい音が、夜の空気をふるわしたかと思うと、山小屋がグラグラと大きくゆれた。

「なんだ、あれは……」

戸倉老人も、その物音に、ハツと床のうえに起きなおった。

いちばんノンキな牛丸平太郎までが眼をさまして、

「なんや、なんや、いまの音……」

寝呆けまなこをこすりながら、顔中を口にして、ううんと大欠伸をした拍子に、またもやドカーン。

「わーっ」牛丸少年はうしろへひっくりかえった。

「おじさん、六天山の方角ですよ」

「よし、外へでてみよう」

戸倉老人はさきに立つてでかけたが、何思ったのか、

「いや、ちよつと待て」

と、春木少年の肩をとつてひきもどした。

「おじさん、ど、どうしたんですか」

「あれ……あの音をお聞き」

戸倉老人の顔は、するどい刃物はもののようにひきしまっている。

その声に、春木と牛丸の二少年も、ギョツとして耳をすましましたが、と、どこからか聞えてくるのは、ブーというかすかな唸りうなごえ声。ヘリコプターなのだ。東のほうから、しだいにこちらへ近づいてくる。

牛丸平太郎はガタガタと胴はらぶるいをした。

「おじさん、まだ、ぼくらを探しているのでしょうか」

「さあ？」戸倉老人が、首をかしげたときである。またもや、ドカーンと物もの凄すごい音がして、山小屋がグラグラとゆれたかと思うと、東の窓がパツと明るくなった。

「あつ、わかった。山寨に何かあつたんだよ、それで、一味のものが、ヘリコプターで逃げだしているのだ」

パチパチと物のはぜるような音は、ますますはげしくなってくる。ドカーン、ドカーンと、爆発するような音が、ひっきりなしにつづいて、東の窓はいよいよ明るくなってきた。ブーン、ブーン——竹トンボをまわすような唸り^{うな}は、しだいにこちらへちかづいて、やがて、山小屋の上空までやってきた。と、思うと、

ダダダダダダ！ すさまじい音を立てて、機関銃がうなりだした。山小屋の周囲の岩石に、機関銃の弾丸^{たま}が、あられのように跳ね^はつかえる。

「あ、危い！」三人はパツと床に身をふせる。

「お、おじさん、見つかったのじゃようか」

春木少年の声もさすがにふるえていた。

しかし、あいては、たしかにここという確信があったわけでもないらしく、ひとしきり機関銃の雨をふらせると、そのままゆうゆうとして、西のほうへとび去った。

「ひどいやつだ。いきがけの駄賃^{だちん}とばかりに、機関銃をぶっぱなしていきおった」

「いくらか臭い^{くさい}とにらんだんですね」

「そやそや、ひよつとすると、このなかかも知れんと思うてうちよつたんや」

三人とも汗びっしりである。いまさらのように、兇悪^{きょうあくむざん}無残なやりかたに、腹の底

まで凍こおるような気持ちである。さいわい、三人とも怪我がなかったからよかつたようなものの、もうしばらく、機銃掃射をつづけられたら、どんなことになっていたのかわからないのだ。それを考えると、三人はゾツとして顔を見合みあわせた。さて、それから間もなく、ヘリコプターの爆音が、西の空に消え去るのを待つて、三人が山小屋から外へとびだしてみると、東のかた、六天山の上空には、炎えん々たる焰ほのおがもえあがっていた。

パチパチと木のもえさける音、ドカーン、ドカーンとひっきりなしに聞える炸裂さくれつ音、そのたびに、蒼白あおしろい閃光せんこうが、パツと焰と煙をつらぬいて、阿鼻あびき叫喚きょうわんの地獄じごく絵巻えまきとはままつたくこのことだつた。

戸倉老人と春木、牛丸の二少年は、呆然ぼうぜんとして顔を見合せたが、それにしても、どうしてこんなことになつたのであろうか。

それをお話するためには、話を少し、もとへ戻さねばならぬ。

首領かしらの両脚りょうあし

裏切者の机博士が、猫女ねこおんなのはる綱なにひっかかつて、あわれ断崖だんがいのうえから、いの

ちの宙吊りちゆうとうづをやらされたことは、諸君も知っていられるとおりである。

町へ使いにいった、仙場甲二郎せんばこうじろうという男が、この宙吊りを発見するのが、もう少し遅れたら、さすがの悪党博士もどうなっていたかわからない。おそらく、綱は棒からはなれて、博士はまっさかさまに谷底へついらくし、柘榴ざざくろのようにはじけていたかも知れないのだ。

しかし、さいわい、仙場甲二郎の注進ちゆうしんによつて、山寨さんさいのなかは大騒ぎになった。誰も博士が首領にたいして、あのような裏切行為をはたらいたことは知らないからよつてたかつて、やつと博士を、崖のうえへひっぱりあげた。

このときばかりはさすがの机博士も、よつほど肝きもをひやしたと見えて、青菜あおなに塩しおのようにげんなりしていたが、それでも、いうことだけはいい。

「いや、地獄の一丁目までいってきたよ。は、は、は、とんだお茶番ちやばんさ」

「先生、じよ、冗談じやありませんぜ。いつたい、誰があんなことをしたんです」

「猫女だよ」

「猫女あ……？」
波立二なみたつじがとんきような声をあげた。

「猫女といやあ、いつか首領の手から、黄金メダルの半ペラをうばっていった……」

「そうそう、あいつだ。あいつが暗闇のなかからとびだして、わしをあんな眼にあわせおつたのだ。あいつはほんとに闇のなかでも眼が見えるらしい」

さすがの荒くれ男も、気味悪そうに顔を見合せた。

「それじゃ、先生、あいつがまた、この山塞へしのびこんだというのですかい」

「そのとおり、あいつはまるで空気のように、どこからでもこの山塞へしのびこむのだ。ひよつとすると、まだそこらの闇にしのでいて、だしぬけにズドンと一発……」

「いやですぜ、先生、気味の悪い。いかにあいつがすばしっこいって、忍術使にんじゆつかいじやあるまいし……」

「いや、そうではない。あいつは暗闇のなかで、眼が見えるくらいだから、忍術も使うかも知れん。だって、考えてみる。いつかの晩だって、電気が消えたと思つたら、そのとたんあいつの声が四馬頭しばとうもく目のうしろで聞えたじゃないか。それまで皎々こうこうと電気がついていたらんだ。いったい、どこからいつの間かに首領かしらの椅子のうしろまで、忍びこんできたんだ。それ、即ち忍術をつかう証拠だ」

「いやですぜ、先生、変なことはいいつこなしに願いまししょう」

「いや、変なことではない。いずれにしてもあんな妙なやつが、ひよこひよこ出入りをす

るようじゃ、この六天山塞もさきが知れているな」

仔細らしく首をひねる机博士の顔色に、さすがの荒くれ男たちも顔見合せた。相手の性から声ばかり、姿も形もわからないとあつては、浮足立つのも無理ではなかった。

ひよつとするとそこらの闇にひそんでいて、猫のように眼をひからせているのではないかと思うと、襟元から、冷たい水をブツかけられるような気持ちだった。

口では元気なことをいつてるものの、さすがに、あのような、いのちの宙吊りをやらされた机博士、その日は一日ゲツソリ参つて、自分の部屋で休んでいたが、さて、その晩のことである。仙場や波立二たちと話をしていると、そこへ木戸という男がいそぎ足でとびだしてきた。

「おい、おまえたちは何をぐずぐずしているのだ。首領がお待ちかねだ。早く机博士を連れてこんか」

木戸は一同を叱りつけておいて、机博士にちかづいた。

「先生、あんた首領になにをしたんです。首領はカンカンにおこつてますぜ」

首領——と、きくと、机博士の顔色はさつと鉛色なまりいろになった。

「いやあ……別に……ちよ、ちよつと悪戯いたずらをしてみただけさ」

「なんだか知りませんが、首領をおこらせることが、どんなことだか、おまえさんもよく御存じのはずだ。いずれ、ただではすみませぬ。さあ、おいでなさい。おい、みんな、机博士をにがすな」木戸の言葉に一同は、バラバラと机博士をとりかこんだ。こうなつたら、袋のなかの鼠ねずみも同然、机博士は急にガタガタふるえだした。首領のおそろしきは、知りすぎるほど知っている机博士なのだ。

「さあ、先生、それじやお気の毒でも、いつしよにきてもらいましようか」屠所とじよにひかれる羊ひつじとは、このときの机博士のようなのをいうのであろう。よろよると、足下あしもともさだまらぬ机博士を、荒くれ男が左右から、ひつたてるようにして、やってきたのは首領かしらの待っている特別室。

首領の四馬劍尺しばけんじやくは、あいかわらず竜りゆうの彫物ほりもののある、大きな椅子に坐っていた。身のたけ六尺にちかく、ビール樽だるのように肥ふとったからだは横綱よこづなもはだしで逃げだしそうな体格だ。顔は例によつて、三重のヴェールによつてつまれているが、そのヴェールがブルブルとふるえているところを見ても、いかに首領がおこっているかわかるだろう。

土色になつて、コンニャクのようにブルブルふるえている机博士は、首領のまえの椅子

にひきすえられた。

「机博士」首領四馬剣尺の声は、つめたく、落着きはらっていた。これは首領のいかりが、いかに大きいかという証拠なのだ。四馬剣尺はいかりが大きければ大きいほど、つめたく落着きはらうのである。

「おまえは昨夜、このわたしにどのような無礼をはたらいたか、よくおぼえていような」
「首領、お許しを……」

「黙れ！」

首領は大喝した。からだがいかりでブルブルふるえた。

「獅子身中の虫とは、机博士、おまえのことだ、おまえは盗人のようにわたしの部屋へしのびこんだ。しかし、それは許してやろう。いかにおまえがゴソゴソと、机や戸棚をひっかきまわしたところで、秘密をうばわれるようなわしではない。だが……」

と、首領はギリギリと歯ぎしりをして、

「どうしても、許しがたいのは、それからあとのお前の所業だ。おまえはエックス線で、わたしの正体を知らうとした。この神聖なわたしの正体を！」

首領はわれがねのような声を張りあげて、両手をふりあげ長い袖のなかで、拳をブルブ

ルふるわせた。土色になった机博士の顔には、ビツシヨリと汗がうかんでいる。

「さあ、いえ、おまえは何を見たのだ。エックス線で透視して、おまえはいつたい、どのようなものを見たのだ」

「首領、ごめんを……そればかりはごめんください」

「ならぬ、いえ！ みんなのまえでいつてみる。おれの正体がどのようなものであったかいつてみる！」

首領の声が、広い部屋にとどろきわたって、山彦やまびこのように反響した。

「首領かしら……それでは、いつてもかまいませんか、みんなのまえで……」

机博士の瞳に、チラと、狐のように狡猾こうかつなあざ笑いがうかんだ。

「構わぬ。いえといえは、早くいえ！」

「それじやいまいましよう。首領、あなたは小男なのだ。あなたの、その大きなダブダブの中国服は、その小男をゴマ化かするための煙幕えんまくなのだ。あなたは足に、一メートル位の棒をつけて、大男に見せかけているが、じつさいは、小男なのだ！」

一瞬いつしゆん、部屋のなかは、シーンとしずまりかえった。あまり意外な机博士の言葉に、

木戸も、波立二も、仙場の甲二郎も、呆気あっけにとられてポカンとしていた。

（この、横綱のような大男の首領が小男……？）机博士は気が変になつたのではなからうか。突然、爆発するような笑い声がおこつた。首領の四馬剣尺だ。首領は腹をゆすつて笑つた。笑つて、笑つて、笑いこぼれた。

「机博士、それがおまえが見たところか。このおれが小男……？　おい、机博士、おまえの眼はたしかか、いやさ、おまえのエックス線に狂いはないのか」

「断じてわたしは見たのだ。わたしのエックス線には狂いはないのだ。おまえは、棒でつぎ足した……」

そのとたん、四馬剣尺は脚をあげて、いやというほど、博士の向う脛すねを蹴りあげた。机博士はあまりの痛さに、あつと叫んでとびあがつたが、すぐに、木戸と波立二におさえつけられた。

「机博士、この脚が棒だというのか。わたしの脚が棒だというのか。さわってみろ。たつた一度だけ許してやる。さわってみろ！」机博士は首領のまえにひざまずいて、おそるおそる、首領の両脚にさわってみた。そのとたん、つめたい汗が、つるりと博士の額からすべり落ちた。

ああ、これはなんとしたことだ。首領の両脚は、たしかに温い血のかよつた、人間の脚

にちがいがなかった。

人間金庫

机博士はゲツソリとやつれた顔で、椅子のなかにうまつている。いっぺんに十も二十も年をとったように見える。

ああ、わからない。昨夜エックス線で見たときには、たしかに首領^{かしら}は、長い棒のつぎ脚をした、小男だった。しかるに、いま、中国服のうえからさぐった首領の両脚は、まぎれもなく、血と肉からできたたくましい人間の両脚だった。これはいつたいたいなんとしたことだろう。おれは気が変になっているのではなからうか。

「そうだ、おまえは気が変になっているのだ」机博士の考えを見抜いたように、首領^{かしら}がズバリといいあてた。

「おれを、この四馬剣尺を裏切ろうなどという考えが起ることからして、おまえはもう気が変になっているのだ。だが、まあいい。これで、おまえのバカげた疑いは晴れたであろう。それでこれからおれの用事だ。おい机博士、だせ！」

首領の声が、かみなり雷のようにとどろいた。気落ちしたように、ボンヤリしていた机博士は、その声に、ビリビリと体をふるわせた。

「な、な、なんですか。なにをだせというんですか」

「白ぼくれるな。おまえはチャンフーの店で、黄金メダルの半ペラを、手にとって調べてみたといったな。おまえのような狡猾こうかつな男が、金がないからといって、そのまま、かえると思われるか。おまえはきつと、小型カメラで、メダルの両面を撮影してきたにちがいない。そのフィルムをここへだせ」

机博士の顔に、そのときまた、チラと狡猾なあざわらいの影がうかんだ。

「なるほど。さすがは首領だよ。えらい眼力がんりきだよ。感服かんぷくしたよ。たしかにわたしはメダルの両面を撮影してきたよ」

「よし、よくいった。それじゃ、それをここへだしてもらおう」

「ない、とられた」

「とられた？ 誰に？」

「猫女ねおんなに……首領、おまえさんは利口りこうだよ。眼はしが利きくよ。しかし、猫女はおまえさんより一枚上手だ。さつき、抜穴ぬけあなのなかで、まんまと、猫女にまきあげられたよ。あ

つはつは、猫女はいつか、おまえさんからメダルの半分をまきあげたね。そして、こんどは他の半分の両面を、撮影したフィルムも手に入れたのだ。大宝物だいほうもつは猫女のものだよ。あつはつはつは」

首領はギリギリ歯ぎしりした。いかりで肩がブルブルふるえた。

「木戸、波立二、そいつの身体検査をしてみろ！」

言下げんかに木戸と波立二が、机博士の身体検査をしたが、むろん、フィルムはでてこなかった。

「首領、なにもありません」

「足らん」首領は地団駄じだんだをふみながら、雷のような声でどなった。

「身体検査のしかたが足らん、そいつを素っ裸にして調べてみるんだ」

「素っ裸に……?」

どういうわけか、素っ裸にしるときくと、机博士の顔色がにわかにかわった。

「じよ、じよ、冗談でしょう。首領かしら、服のうえからおさえても、フィルムを持っているかないかくらい、誰にでもわかります。なにも裸にしなくたって……」

狼狽ろうばいして、しどろもどろになる机博士を、四馬剣尺は三重のヴェールのしたから、ひ

ややかにながめていたが、やがて、せせら笑うようにいった。

「机博士、面白い話をきかせてやろうか」

「面白い話……？」

「そうだ。とても面白い話だ。おまえが聞くと、喜ぶと思うんだ。ほら、骨董商こつとうしょうのチャンフーが殺された日のことよ。おまえが黄金メダルの半分を見つけて、まんまと両面の撮影に成功して、ひきあげてからのことだ。間もなく顔に、恐ろしい刀かたなきず傷のある、スペイン人か日本人かわからぬような、外国の船員服をきた男が、骨董店へやってきたのだ。そして、そいつがいくらで買ったのかしらんが、黄金メダルの半分を買ってでていったんだ。ところが、すぐそのあとへまた、あのメダルを買いにきたものがあつたんだ。かりにこの人物をXとしておこう。Xは骨董商のチャンフーからいままでいった、船員風の男が、ひとあしがいで、黄金メダルを買っていったということを聞くと、急いで、そのあとをつけていったんだ。どうだ、机博士、面白い話じゃないか」

机博士はおびえたように眼をみはって、きつと首領の三重ヴェールを見つめている。額にはビツシヨリと汗。

「ところが、スペイン人か日本人かわからぬような、顔に大きな傷のあるその男は、間も

なく、海岸^{かいがん}通りのホテルへ入っていった。Xもすぐそのあとからつけて入った。船員風の男は二階の隅^{すみ}のとある一室へ入っていった。Xは廊下のすみから、その部屋を見張っていたが、すると、ものの十五分もたたぬうちに、その部屋からでてきた男がある。おい、机博士、それが誰だったか知っているか」

机博士は、椅子の両腕を、くだけるばかりに握りしめている。からだガクガクふるえて、眼玉がいまにもとびだしそうさ。首領はヴェールの奥でせせらわらって、

「あつはつは、その顔色じや知っていると見えるな。そうさ、その男というのは机博士、おまえだったのだ。しかも、おまえがでていったあとで、Xが部屋をのぞいてみると、そこには誰もいなかった。つまり、顔に大きな刀傷のある男とは、机博士、おまえだ、おまえだったのだ。おまえは黄金メダルの半ペラを見つけた。しかし、おまえのその姿で買いとれば、いずれ、チャンフーの口からそれがわかるにちがいない。そう考えたおまえは、外国の船員に変装して、黄金メダルを買ったのだ。顔の大きな刀傷は、できるだけ、素顔^{すがお}をかえるために、絵具^{えのぐ}でかいた贗物^{にせもの}だったんだ。どうだ机博士、面白い話じやないか」

首領^{かしら}四馬剣尺は、大きな腹をゆすつてわらった。机博士は、まるでおいつめられた野^{やしめ}獣^うのような顔をして、三重ヴェールを見つめていたがやがてキーキー声をふりしぼって

叫んだ。

「わかった、わかった、わかったぞ」

細い指を、首領の鼻さきにつきつけると、

「問うに落ちず、語るに落ちるとはこのことだ。チャンフーを殺したのはXだ。そして、Xとは首領、おまえのことなのだ」首領はしかし、せせらわらって、

「バカをいえ。おれがこの大きな図体で、町を歩いていたらどんなに人眼をひくことか：聞いてみる、チャンフーの店は、野中のなかの一軒家じやあるまいし、隣もあれば、近所の眼もある。横綱よこづなのような大男が、あの日、チャンフーの店の近所をあるいていたかどうか、誰にでもきいてみる」

自信にみちた首領のことに、机博士はいっぺんにペシヤンコになった。

「それ、木戸、波立二、なにをぐずぐずしている。そいつを早く、裸にしないか」

言下げんかに、木戸と波立二が、机博士をとりおさえた。そして水ガモのように細いからだで、キーキー声をあげて抵抗する机博士を、またたくうちに素っ裸にした。

博士は猿股さるまたひとつになつて、コンニャクのようにブルブルふるえている。そのからだを、三重ヴェールのおくから、きつと見つめていた四馬剣尺は、ふいに、椅子の腕をたた

いてわらった。

「あつはつは、さすがは机博士だ。人間金庫とは考えたな。おい、左の肩にあるその傷口はどうしたのだ」

机博士はあつと叫んで左の肩をおさえた。しかし、それはおそかった。左の肩に、少し盛りあがった傷口は、まだ新しくて、生々しかった。

四馬剣尺はギリリと、青竜刀せいりゆうとうをぬき放つと、

「机博士、おまえはわざと左の肩に傷をつけ、そのなかに黄金メダルの半ペラをおしこみ、そのうえを縫ぬい合あわしたのだろう。いま、おれが、その金庫をひらいてやろう」

四馬剣尺は、青竜刀をひっさげて、ゆらりと椅子から乗出したが、そのときだった。あわただしい足音がちかづいてきたかと思うと、

「首領、たいへんです。たいへんです。警官がおおぜい押し寄せてきました。誰か内通ないつうしたやつがあるんです。抜け道という抜け道は、全部包囲ほういされておりますぞ」

悲痛な声だった。

首領かしらはそれをきくと、思わず青竜刀をポロリと落した。

チャンフーの双生児ふたご

ろくてんさんさい おおとりもの
六天山塞の大捕物は、たちまち港町の大評判になった。

何しろ、六天山からカンヌキ山へかけて、三日三晩、焼けつづけたのだから、附近の騒ぎはたいへんだった。

「なんですか。このあいだの晩の、あのものすごい物音は……?」

「あああれですか。あれはねえ、なんでも六天山のなかに山賊さんぞくが住んでいたんだそうですよ。それが警官に包囲されたので、山塞にしかけてあつた爆弾に火を放ったんだっていいますよ」

「へへえ、山賊がねえ。そして、その山賊はとつかまつたんですか」

「ところが、泰山たいざん鳴動めいどうして鼠ねずみ一匹いっぴきでね。つかまつたのは雑魚ざごばかり。大物はみんな逃げてしまったということですよ」

「それは残念なことをしましたね。しかし、警察も、あれだけの騒ぎをやりながら、どうしてそんなヘマをしたんでしょう」

「それや、仕方ありませんよ。向うはヘリコプターとかなんとかいう、竹トンボの親方

みたいな、飛行機をもっているんだからかかいません」

「なるほど、それで高跳びたかとをしたというわけですか」

「おや、しやれをいっちゃいけません」

などと、町の噂うわさはたいへんだったが、いかにもこの噂のとおり、四馬剣尺の一味のもので、主だった連中はほとんど逃げた。

木戸と波立二、それから仙場甲二郎の三人は首領の命令で、机博士をしばらくあげ、それをヘリコプターにつんで逃げた。

そのあとで、首領の四馬剣尺は、かねて仕掛けてあつた爆弾に火をはなち、いずくともなく姿を消した。だから、警察が大騒ぎしてとらえたのは、あの小竹さんはじめ、数名の下っぱばかりであつた。

それにしても四馬剣尺はどこへ逃げたか？

根城ねしろとしていた六天山塞を焼きはらつて、かれらは解散したのであろうか。いやいや、そうは思われぬ。あの執念しゅうねんぶかい四馬剣尺のことだ。いつかはまた、きつとあの偉大いだいな体に乗出して、何事かをやらかさずにはおくまいが、ここではしばらくおあずかりしておいて、春木、牛丸の二少年のほうから話をすすめていこう。

あやう
危く四馬劍尺の魔手ましゆからのがれた、春木、牛丸の二少年は、つぎの日、山をくだると、
そこで後日ごじつを約して戸倉老人とわかれた。

そして無事にわが家へかえりついたが、そのとき、牛丸平太郎のお父さんやお母さんが、
どのように喜んだか、春木少年に対して、どのように感謝したか、それらのことはあまり
くだくだしくなるから、ここでは書かないでおくこととする。

さて、それから当分、二人の身のうえに、別に変ったこともなく、毎日、楽しく学校へ
通っていた。学校では、二人はすっかり英雄にまつりあげられ、みんなからさかんに話を
せがまれた。ことに少年探偵を結成しようとしていた、小玉君こだまや横光君よこみつ、それに田畑君たばた
などは、春木少年ひとりにだしぬかれたことをくやしがつて、こんど何かあつたら、きつ
と自分たちも、仲間に入れてくれとせがんだ。春木、牛丸の二少年はむろんそれを承しょうだ
諾くした。

こうして幾日か過ぎた。春木、牛丸の二少年の身しんべん辺には、依然として平穩へいおんな日がつ
づいた。いずれ落着いたら、便りをよこすといっていた戸倉老人からもどうしたものか音お
沙汰とさたがなかった。

ところがある日、春木少年が学校へいくと、牛丸平太郎がまじめくさった顔をしてそば

へ寄つてきた。

「春木君、ちよつと。……」

「牛丸君、なあに」

「妙なことがあるんや。ほら、あの万国骨董商ばんこくこつとうしやうな」

「うんうん、チャンフーの店か」

「そやそや、あの店がまた、ちかごろひらいたんやぜ。ぼく昨日、海岸通りへ使いにいったついでに、あの店をのぞいたところ、表がひらいていて、ちやんとそこに、チャンフーが坐っているやないか。ぼく、びっくりして、胆きもつ玉たまがひっくりかえった」

「馬鹿なことをいつちやいけな。チャンフーはピストルで撃たれて、死んだはずじゃないか」

「そやそや、それやのに、そこにちやんと、チャンフーがいるんや。どう見てもチャンフーにちがいないのや。ぼく、てつきり幽霊かと、おつかなびつくりで近所のひとにきいてみたんやが、なんと、店にすわっているのは、チャンフーやのうて、チャンフーの双生児ふたごの兄弟で、チャンウーちゆうのやそうな」

「へへえ、チャンフーには双生児の兄弟があつたの」

春木少年は眼をまるくした。

「そやねんて。いままで、横浜にいたんやそうやが、兄弟のチャンフーが殺されて、あとをつぐもんがないさかい、わざわざ横浜からやってきて、店を相続したんやそうな。双生児とはいえ、それよう似とる。近所でも、まるでチャンフーさんが、生きてかえったようやというてるぜ」

春木少年は、しばらく、だまつて考えていたが、やがて考えぶかい調子で、

「ねえ、牛丸君」と、声をかけた。

「なあに、春木君」

「いつか戸倉老人はへんなことをいったねえ。チャンフーが死ぬなんて、そんなことはありえないことじやと……」

「そうそう、いうた、いうた。あら、どういうわけやろ」

「さあ、ぼくにもそここのところがよくわからないんだが、ひよつとすると、あの言葉と、チャンフーの双生児、チャンウーとなにか関係があるのじやないかしら」

「うん、うん、なるほど」

牛丸平太郎は牡牛おうちのような鈍どんじゆう重な表情でうなずいた。

「それで、どうだろう。チャンウーというのを、ぼくらの手でさぐってみたら。……戸倉老人は、なにか変ったことがあったら、なんらかの方法で通信するといっていたが、いまだに、何もいってこない。それでぼく、このあいだから、腕がムズムズして仕方がないんだ。だって、このままじゃ、蛇の生殺へび なまころしてみたいで、気が落着かないじゃないか」

「そら、ぼくかて同じことや」

「そうだろう。だから、今度はこつちから積極的にでてみようと思うんだ。といつて、さしあたり、どこから手をつけてよいかわからないから、まず、チャンウーの店からさぐってみたらと思うんだが、どんなもんだろ」

「うん、そいつは面白い。それにきめたッ」

牛丸平太郎が、躍おどりあがってよろこんでいる姿を見つけて少年探偵団の、小玉、横光、田畑の三君が、何事なにごとならんとかけつけてきた。そこで、春木、牛丸の二少年が、いまの話語ってきかせると、三人とも有頂天になつてよろこんだ。

「よし、それじゃ、今日、学校がひけたら、みんなで、海岸通りへいってみようじゃないか」

と、相談一決したが、この少年たちがチャンウーの店を偵察して、いったいどのような

ことを発見するだろうか。

大花瓶
だいかびん

さて、こちらは少年たちの話題にのぼった、海岸通りの万国骨董堂ばんこくこつどうどうである。

今日も今日とて、チャンウーが、店さききに坐つて、スツパスツパと水煙管みずぎせるを吸つていた。なるほど、孔子さまのように長いあごひげを生やして、トマトのように血色のよい顔をしたチャンウーは、殺されたチャンフーにそっくりだった。ただ、ちがっているのは、チャンフーは眼鏡をかけていなかったが、双生児のチャンウーは、黒い大きな眼鏡をかけている。あんまり似ているといわれるので、あるいは区別をつけるために、わざとそんな眼鏡をかけているのかも知れない。

チャンウーは眠そうな眼をして、さつきからぼんやり店に坐っていたが、どうやら客もないらしいと考えたのか、ノロノロ立つて、おくの間へ入っていった。そして、なかからピンとドアに鍵をかけると、これはいったいどうしたことか、いままで眠そうな眼をしていたチャンウーの顔色が、急にいきいきしてきた。眼鏡のおくでふたつの瞳が、にわか

にキラキラかがやいた。

チャンウーは、油断なくあたりを見廻すと、壁にかかったスペインの帆船はんせんをかけた、油絵の額がくをはずした。それから、壁のどこかを押すと、そこにパツクリ小さい孔あながあいた。金庫なのだ。かくし金庫なのだ。

チャンウーはもういちど、鋭い眼であたりを見廻すと、やがて金庫をさぐって、なかから小さいビロードぼりの箱を取りだした。そして、金庫をとじ、額をもとどおりにかけておわると、大事そうにビロードの箱を持って、机のまえまでやってきて腰をおろした。

それから、眼鏡をかけなおし、ビロードの小箱のバネを押すと、ピンと蓋ふたがひらいて、なかから現れたのは、おお、なんと、黄金おうごんメダルの半ペラではないか。

チャンウーは、もういちど素速すばやい視線をあたりに投げると、ううんと深いいきを吸い、それからくいいるように、その半ペラに見入っていた。それはたしかに、海賊デルマののこした黄金メダルのうち半月形はんげつけいの部分である。

しかし、これはいつたい、どうしたというのだろう。半月形のその半ペラは、戸倉老人から春木少年の手にうつり、のちにひげづら男の姉川五郎に掘り出されて、骨董商チャンフーに売られ、さらにそれを、机博士が買いつつて自分の肩の肉のなかに、かくしておい

たはずではないか。

そうすると黄金メダルというのは二つあるのだろうか。

それはさておき、チャンウーは鉛筆片手に、字引きと首つびきで、黄金メダルの裏面りめんにかいてある、スペイン文字の翻訳ほんやくをはじめた。だいぶまえからやっていると見えて、はじめのほうは、スラスラいく。それはだいたいつぎのとおりであった。

わが秘密を

とする者はいさ

人して仲よく

り聖骨を守る

のあとに現われ

メダル右破片

何しろ、メダルが半分しかないから、ここまで翻訳してみても、さっぱり意味がわからない。これからしても、どうしてもメダルの他の半分、扇おうぎがた型の半ペラがなければならぬわけである。

チャンウーは残念そうに、黄金メダルの半ペラを見つめていたが、また思いなおしたよ

うに、鉛筆をとりなおして、翻訳をつづけていったが、そのとき、店のほうで人の足音がした。

チャンウーはそれをきくと、あわててメダルをビロードの箱に入れ、壁のかくし金庫におさめると、翻訳しかけていた紙を、クチャクチャにかみくだいて、それから何食わぬ顔をして、店のほうへでていった。

店へきた客は、立花カツミ先生であった。

立花先生はチャンウーの顔をみると、ギョツとしたように眼をみはったが、すぐ気がついてにっこり笑って、

「ああ、びつくりした、あなたがあまり亡くなったチャンフーさんに似ているので、あたし幽霊かと思いましたわ。そうそう、あなたとチャンフーさんは双生児ですってね」

「そう、わたしとチャンフー、双生児の兄弟、あなた、チャンフー、知っていますか」

「ええ、以前いちど、この店へきたことがありますので、……チャンフーさん、お気の毒なことをしましたわね」

「そう、弟、可哀そう、なんとかして私、犯人さがしたい」

「いまにきつとわかりますわ。警察でもほっておきはしませんもの。あたしだって、いち

どお眼にかかった御縁ごえんがありますから、心当りがあつたらお知らせします」

「ありがとうございます。ときに、今日は何か御入用ですか」

「いえ、実は、今日は買物にきたんじゃないのです。反対にこの店で買っていたきたいものがございました……」

「はあ、結構です。品と値段によつては、なんでもいただきます」

「そう、じゃ、ちよつと待つて……」立花先生はいったん店をでていったが、すぐ、ひきかえしてきたところを見ると、二人の男をつれており、その男たちは高さ四尺、直径一尺五寸もあるような、大花瓶をかかえていた。

男たちがその大花瓶を、店のほどよいところへおろしてでていくと、立花先生はチャンウーのほうをふりかえり、

「買っていたきたいというのは、これですの。これは父があなたのお国を旅行した際、北京ペキンで買ってきたもので、あたしとしては手離しにくいものですが、急に金のいることができましたので……」立花先生は、さすがに恥しそうに顔をあからめ、もじもじしていた。

「なるほど、これは立派な花瓶、値段によつては買いましよう」

チャンウーは花瓶のおもてを、なでたり、さすったりしていたが、ふと、なかをのぞい

てみて、妙な顔をして眉まゆをしかめた。

「おや、この花瓶、なかがつまっていますね」

「そうなのです。父が買ってきたときからそうなっているんです。だから父はこの花瓶のことを、開あかずの花瓶などと笑ってました。が、……きつと、なにかわけがあつて、花瓶をつめてしまったのでしょうかね」

チャンウーが不思議に思ったのも無理ではない。その花瓶は首のところまでセメントがつめてあつて、叩くとコツコツかたい音がした。チャンウーは、しばらく考えていたが、「いや、これは珍しい花瓶です。しかし、これくらい大きな花瓶になると、花を飾るよりも、花瓶自身が飾りものです。で、いくら御入用ですか」

「まあ、それじゃ買ってくださいますの。実は、……」

と立花先生が金額をきりだすと、チャンウーは笑つて、

「それは高い。なかのつまつた花瓶なんて、やつぱり疵きず物も同様ですから、その半分ぐらいでなくちゃ……」

「あら、半分はひどいですわ。もう少しフンパツしてくださいな」と、しばらく押問答おしもんどうをしていたが、いったい、どれくらいで折れあつたのか、それから間もなく骨董商の店を

でていく立花先生の顔色をみると、いかにも嬉しそうな微笑がうかんでいた。

チャンウーはそのうしろ姿を見送って、それから、不思議そうに首をかしげ、しばらく見事な大花瓶を、なでたりさすったりしていたが、やがて表のドアをしめると、奥のひと間へひっこんだ。

もう日が暮れているのである。

怪人現れる

チャンウーの店の隣は、四階建のビルディングになっていて、一階は貿易促進展覧会の会場になっているが、二階からうへは貸事務所になっている。

ところが、都合のいいことには、その三階に、少年探偵団のひとり、小玉君のお父さんの事務所があった。

少年探偵団の一行五名は、学校がひけると、海岸通りへ出向いて行って、なにくわぬ顔で、チャンウーの店のまえを通ったが、

「なんだ、ここなら、お父さんの事務所のとなりじゃないか」

と、小玉君がささやいたので、それじゃお父さんをお願いして、しばらくその事務所の片隅かたすみをかりようということになった。

そこで五人の少年は、三階にある小玉商事会社の応接室へあがっていったが、ますます都合のよいことには、その応接室はチャンウーの店のがわにあり、窓からのぞくと万国骨董商が眼の下に見えた。

「ああ、こいつは都合がいいや。小玉君、なんとかしてお父さんに、しばらくこの部屋をかして下さるようお願いしてくれたまえ」

「いいとも。ぼくのお父さんは、たいへん物もの分わかりのいいひとだから、きつと承知してくださるよ」

やがて、応接室へでてきた小玉氏というひとは、いかにも物分りのよきそうな紳士であった。小玉氏は息子の小玉少年から話をきくと、はじめは眼をまるくして驚いていたが、一同がかわるがわる熱心にお願いとすると、

「なるほど、それじゃいつか牛丸君を誘ゆう拐かいした、六ろくてん天さん山さい塞さいの山賊のゆくえをさぐるために、チャンウーの店を監視かんしするとうんだね」

「そうです。そうです。ぼくらは警察に協力して、一日も早くあの山賊をとらえたいので

す」

春木少年が、熱心にお願ひすると、小玉氏はにこにこ笑つて、

「よしよし、いや、いまだきの少年、すべからくそれくらいの勇氣がなければならぬ。いとも、君たちの頼みをきいてあげよう。しかし、ここに条件がある」

と、いつて、小玉氏はつぎのような条件をだした。

まず、第一に、自分たちがまだ子供であるということをよく心得^{こころえ}て、決して危^{あやう}きにかよらぬこと。第二に、何か変つたことを発見したら、すぐに警察へ報告し、みずからは手だしをしないこと。第三に、夜九時までみんな揃つて帰宅すること。

「わかりました。お父さん。ぼくたちは決して、お父さんに御心配をかけるようなことはしません」

春木少年が一同を代表して断^{だんげん}言^{げん}すると、小玉氏はにこにこ笑つて、

「よしよし。それじゃ、今夜から監視をはじめのだろうが、君たち、飯はまだだろ。それじゃ、前^{まえ}祝^{いわ}いに夕飯を御馳走しよう」

と、親切な小玉氏は、五少年をひきつれて、近所の中華料理店へいつて夕飯をふるまつた。

「それじゃ、君たちの成功をいのるよ。しかし、くれぐれもいつとくが、自分たちがまだ子供であることを忘れちやいかんよ」小玉氏からげきれい激励とちゆうこく忠告をうけて、中華料理店のまえでわかれた五少年が、すでに日の暮れた路をみち、ビルディングのほうへかえつてくると、そのとき、万国骨董商のなかからとびだしてきた婦人があった。

「あつ、あれは立花先生じゃないか」春木少年がいちはやく、先生のすがたを見附けて注意すると、

「そうだ、そうだ。立花先生だ。先生は、なんの用があつて、こんなところへきたんやろ」牛丸平太郎も不思議そうな顔をしている。小玉、横光、田畑の三少年もギツクリとしたような顔を見合せた。しかし、幸い立花先生は気がつかなくなかつたらしく、男のような足どりで、スタツスタツと黄昏たそがれの闇のなかに姿を消した。

「どうも変だね。ぼくはまえから、立花先生を変だと思つていたんだよ」

春木少年はあるきながら、考えぶかそうにつぶや呟いた。

「変て、どういうふうに？」小玉少年がききかえた。

「だつてね、このまえ、チャンフーが殺された日にも、立花先生は万国堂のまえを通りかかつて、飾窓をのぞいたというんだろ。そして、そのとき、飾窓のなかには、黄金メダル

の半ペラが飾ってあったんだ。しかもそのつぎの日、金谷先生がそのことをしゃべると、立花先生、とてもいやな顔をしたという話だよ」

「うん、そういえば、立花先生はよく学校を休むね。それにどこへいくのか、ときどき寄き宿舎しゆくしゃからいなくなることがあるという話だよ」田畑少年がいった。

「よし、それじゃ、明日から手分けして、誰かが立花先生を監視することにしようじゃないか。監視なら、子供にだってできるもの」横光少年の言葉だった。

「うん、それがいい。いずれ、明日になったら、誰が立花先生の監視にあたるかきめよう」こうして、また、新しい探偵の方針がたつたので、一同は、満足して、三階の応接室へかえってきた。窓から見ると、チャンウーの店から、ほの暗い光がもれている。

「あ、見給え。チャンウーの店には天窓てんまどがあるよ。あそこから覗のぞけば、店の様子がよく見えるにちがいないよ」

「そうや、そうや。ぼく、ひとつあの屋根へおりてみようか」

牛丸平太郎が、ハリキって、窓からからだを乗りだすのを、春木少年はおしとどめ、「いや、ちよつと待ちたまえ。もう、しばらく、あたりが暗くなるまで待とう」

それから一時間ほど待つと、あたりはすっかり暗くなった。チャンウーの店の天窓から

は、あいかわらず、ほのぐらい光がもれている。

「春木君、もう、そろそろ、ええやないか」牛丸平太郎は、さつきから、腕がムズムズしているのである。

「そう。もうそろそろいい時刻だね。ところで、誰が偵察にいくか、これは公平を期きしてくじ引きということにしよう。ひとりじゃ心細いから二人一組となつていくことにしようじゃないか」

春木少年のこさえた、五本のこよりを引いた結果、牛丸少年と春木君がいくことになつた。ほかの少年たちは失望したが、これまた、あとでどんな役があるかも知れないからと慰めて、いよいよ、春木、牛丸の二少年が、偵察にいくことになつた。

ちようどいいあんばいに、このビルディングの側そくめん面には、火事などの場合にそなえて、非常梯子ひじょうはしこがついている。その非常梯子は、チャンウーの店のすぐそばをとっており、その間、半間はんげんとはなれていない。春木、牛丸の二少年は人眼をさけるために、窓から外へでて、軒蛇腹のきじやばらをつたつて非常梯子にとびうつた。それはかなり冒険だつたけれど、身の軽い二少年には、大してむずかしい仕事でもなかつた。

非常梯子をつたつて一階おりと、すぐ眼の下にチャンウーの店の屋根がある。二少年

は猿のように身軽にその屋根にとびうつた。屋根はかなりの傾斜だが、身のかるい少年には、天窓のところまで這つていくのは、大してむずかしい仕事でもなかった。天窓には厚い針金入りガラスがはまっている。それは昼間、採光をよくして、陳列品をひき立たせるためである。

ふたりが天窓まで這つていつてなかを覗くと、ほの暗い電灯のなかに、珍奇な仏像や、奇怪な大時計や、古めかしい鎧など、さまざまな骨董品が、ところせまきまでにならんでいた。そして、店の一隅ひとすみに、さつき立花先生がもちこんだ、あの大花瓶だいかびんもおいてあった。

春木、牛丸の二少年は、息をころして、このあやしくも、風変りな店のなかを覗いていたが、ふいに春木少年がギュツと力強く、牛丸少年の腕をにぎった。

「ど、どうしたの」

「しっ、静かに！ あの花瓶をごらん」

押しころしたような春木少年のささやきに、牛丸平太郎もなにげなく、花瓶のほうへ眼をやったが、そのとたん、ゾツとするような恐ろしさが背筋をながれた。

ああ、見よ！ 大花瓶につめてあつたセメントが、ポツカリ中から押しつけられると、

その下から、ニユーツと一本の腕がでたではないか。

「あっ！」牛丸平太郎は危く叫び立てるところを、急いで口に蓋をした。

大花瓶のなかに誰かいるのだ。そしてそいつがいま、花瓶のなかからでてこようとしているのだ。

二少年の胸はドキドキ躍った。額からビツシヨリと汗が流れた。二人は夢中になって、天窓のわくにしがみつき、眼を皿のようにしてチャンウーの店をのぞいている。

大花瓶のなかからは、また一本の腕がでた。そして、二本の腕は、しばらく花瓶のふちを握ってモガモガしていたが、やがて、軽業師のように、ヒョイと花瓶のふちへ這いのぼったのは、ああ、なんとということだ！

それは世にも不思議な小男ではないか。

小男は全身に、縫いぐるみみたいな黒い服をびったりつけていた。そして、頭には服にぬいつけた三角型のトンガリ頭巾をスツポリかぶり、顔には大きな仮面をつけていた。だから、顔はサツパリ見えなかつたが、その気味悪さといったら、筆にも言葉にもつくせないほどだった。

小男は猿のように花瓶のふちにしゃがんだまま、しばらくあたりをうかがっていたが、

やがて、ひらりと音もなく床ゆかのうえにとびおりた。

春木、牛丸の二少年は天窓のうえから、手に汗握って、この様子を見つめているのである。

奇怪な男と猫ねこ女おんな

ああ、奇怪なる男、猿のような男――

いつか机博士が、六天ろくてん山塞さんさいの頭目とうもく、四馬劍尺しばけんじやくの姿を、レントゲンで透視とうししたことがあったが、それは脚にながい竹馬をゆわえつけた小男であった。ところがそのち机博士が、頭目の脚にさわってみたところ、それは竹馬などではなくて、まぎれもなく人間の脚であった。

机博士は、矛盾むじゆんするふたつの発見にびっくりしたが、今宵こよいチャンウーの店にしのびこんだのは、まぎれもなく、小男。してみれば、机博士のレントゲンに狂いはなく、四馬劍尺の正体は、やはり脚に竹馬をゆわいつけた小男であろうか。しかし、そうだとすると机博士がさわってみた四馬劍尺の脚は、なんと説明すべきだろうか。

それはさておき、床へおりた小男は、しばらくじつとあたりの様子をうかがっていたが、やがて壁のそばへ這いよると、ポケットから取出したのは三十センチくらいの棒である。それはちようど、管絃楽団の指揮者が使う指揮棒のようなものだった。

おやおや、あんなものを何にするのだろうか。と、春木、牛丸の二少年が、屋根のうえから固唾をのんで見ているとは、もとより知らぬ小男、しばらくその棒をひねくりまわしていたが、するとみるみる棒はのびて、三メートルほどの長さになった。

わかった、わかった、その棒は、伸縮自在の魔法棒なのだ。それにしても、そんな棒を何に使うのかと見ていると、小男はその先端に鉤のようなものをとりつけた。

おやおや、変なことをするわいと、なおも二人が一生懸命、天窓にしがみついてみると、小男はその鉤棒で高いところにあるメイン・スイッチをひっかけて切ってしまう。とたんに、家中の電気という電気が消えてあたりはまっくら。

春木、牛丸の二少年は、思わず顔を見合せた。

すると、そのとき闇のなかから、店をつつきっていく足音がきこえたかと思うと、ガチャリと鍵をひらく音。やがて、ドアが薄目にひらいて、誰やら店のなかへしのびこんだが、すぐドアがしまったので、その姿はよく見えなかった。

「男がドアをひらいて、誰かを呼びこんだんやな」

「そうだ。男は仲間をしのびこませるために、大花瓶のなかに、いままでかくれていたんだよ。それにしても、忍びこんだのはどういうやつだろう」

二人がこんな囁きをかわしているとき、したでもチャンウーが、なんとなく怪しい気配に気づいたのか、懐中電気を片手に持って、奥のドアから現れた。

「誰かいるのか」とたんに轟然とピストルが鳴ってチャンウーの手から懐中電気が、木葉微塵とくだけて散った。

「あ、だ、だ、誰だ！」

「猫女よ」

「な、な、なに、猫女……」

と、闇のなかでチャンウーの声が大きくあえいだ。

「ええ、そう、暗闇のなかで、ちゃんと眼の見える猫女よ。逃げても駄目。ちよつと相談があつてやつてきたんだから、おとなしくして頂戴。バカ！ 何をする！」

「またもや、ズドンとピストルの音。あつという悲鳴とともに、何やらゴトリと床に落ちる音がした。」

「ほ、ほ、ほ、だからいわないことじゃない。闇の中でも眼の見える、猫女だといってられないの。ポケットからピストルをだそうとしたって、ちゃんと見えているんだから」

春木、牛丸の二少年は、顔見合せて驚いた。それじゃ猫女という女、ほんとに闇の中でも眼が見えるのか。

「さあ、これであたしのいうことが、嘘うそじゃないってわかったでしょう、わかったらおとなしくしておいで。待つてあげるから、早く右手に繃ほうたい帯たいをしておしまい。ほらほら、そんなに血が流れているじゃないの。ああ、やっと繃帯ほうたいができたわね。それじゃ、奥の部屋へいきましよう。ここじゃ話もできないから」

「いったい、話つて、何んのことだ」

「黄金おうごんメダルのことよ」

「黄金メダル？ お、黄金メダルってなんのことだ」

「ほ、ほ、ほ。白ぼくれたつて駄目。こつちは何度もいうように、闇のなかでも眼の見える猫女よ。おまえがいまどんな顔をしたか、ちゃんと知ってるよ。これ、よくお聞き。おまえの双生児ふたごのチャンフーは、いつか姉川あねがわごろう五郎という男から、黄金メダルの半ペラを買いつた。そして、それから間もなく、顔に大きな傷のある、スペイン人みたいな男に、

黄金メダルの半ペラを売りつけたが、そのメダルは贗物にせものだったんだよ。だから、この店にはまだ、本物のメダルがあるはずなんだ。それをここへだしておくれ」

「しかし、それやア、チャンフーの買ったのが、贗物だったんじゃないのか」

「お黙り！」猫女は鋭い声で、

「こつちはちゃんと調べがいきとどいているのよ。姉川五郎という男にも当ってみて、それがどこで黄金メダルを手に入れたか、わかっているんだ。それはたしかに贗物じゃなかったのよ。チャンフーは本物をどこかへしまいこんで、贗物を飾窓に飾っておいたんだ。さあ、ここでは話ができない。奥へ行ってゆっくり話をつけようじゃないの」

それからしばらく、チャンウーと猫女の押問答おしもんどうをする声がつづいていたが、やがて、猫女のピストルに脅きょうはく迫せされて、チャンウーは奥の一間へ入っていった。それにつづいて猫女が入っていくと、ボタンとドアのしまる音。話声はそれきり聞えなくなつて、チャンウーの店は墓場のような暗さ、静けさ。

春木、牛丸の二少年は、ほおつと顔を見合せた。

「春木君、猫女で、すごいやつやな」春木少年はそれに答えず、しばらくは何か考えていたが、やがて低い声で、

「ねえ、牛丸君、いまの猫女の声ね、君、あれに聞きおぼえがあるような気がしなかった？」

「えつ、さあ、ぼくは気がつかなんだが、誰の声に似ていたんやね」

「いや、君が気がつかなかったとすれば、ぼくの思いちがいだろう。だけど牛丸君、さっきの小男はどうしたんだろうねえ」

「さあ。あいつも奥へ入っていったんやないやろか」

二人がそんなことを囁ささやいているとき、奥の部屋から苦しそうなうめき声^{ささや}がもれてきた。チャンウーの声なのだ。しかも、世にも苦しそうなうめき声……。

春木、牛丸の二少年は、ぎよつとしたような顔を見合せた。

「春木君、大変や、チャンウーが拷問されてるんやないやろか」

「そうだ、そうだ、牛丸君、さっきの部屋へかえろう」

「さっきの部屋へかえつてどうするんや」

「警察へ電話をかけて、お巡まわりさんにきてもらうんだ。さっき小玉君のお父さんにいわれたろう。自分が子供であることを忘れちゃいけないって。だからお巡りさんに電話をかけて猫女と小男をつかまえてもらうんだ」

二人は、そつと、チャンウーの店の屋根からすべりおりると、ビルディングの非常梯子を、脱兎だつとのごとくかけのぼっていった。

空かける悪魔あくま

春木、牛丸君たちの、少年探偵団が電話をかけたとき、ちようどさいわい、警察にいわせたのは秋吉警部あきよしけいぶ。

秋吉警部を諸君もおぼえていられるだろう。チャンフー事件の担当者だが、その事件が進展せず、どうやら迷宮入りめいきゆういりをしそうな模様ようように、業を煮にやしていたおりからだけに、少年探偵団からの電話をきくと、こおどりせんばかりによるこんだ。

「よし、それじゃこれからすぐいく。ときに君たちは何人いるんだ」

「はい、少年探偵団は同志五人どうしであります」

「それじゃね、みんなで手分けして、万国堂ばんこくどうの周囲を見張っていてくれ。しかし、くれぐれもいつておくが、よけいなことに手をだすな。われわれがいくまで待っているんだぞ」

「承知しょうちしました。できるだけ早くきてください」

電話をきつて春木少年、警部の言葉を一同につたえていたが、何思ったのか、急にはつと顔色をかえた。

「どうしたの、春木君、何かあったの？」

横光君が不思議そうに訊ねるのを、しつとおさえた春木少年。

「牛丸君、あれ……あの物音……？」

「なんや、あの物音……」

牛丸平太郎もギョツとして、春木君といつしよに耳をすませたが、にわかにながたがたふるえだした。

ああ、聞える、聞える、ブーンブーンと竹トンボを廻すような音。たしかにヘリコプターの爆音ばくおんなのだ。しかも、しだいにこちらへちかづいてくる。

「田畑君、電気を消してくれたまえ」田畑君が電気を消すと、応接室のなかはまっくらになつた。

「春木君、どうしたの。あの物音はなんなの？」

暗闇のなかで小玉君が、不安そうに訊ねた。

「ヘリコプターだよ。ほら、いつか牛丸君を誘拐ゆうかいしていった。……」

「ああ、六天山塞の頭とうもく目が持つているという……?」

少年たちはギョツとしたように、暗闇のなかで顔見合せたが、
「それにしても、いまごろどこへいくつもりだろう」

と、田畑君が訊ねた。

「ひよつとすると、万国堂めざしてやってくるかも知れないよ。牛丸君。横光君」

「春木君、なんや」

「君たち二人は万国堂の表のほうを見張ってくれたまえ。それから、小玉君と田畑君は、万国堂の裏口の見張りをしてくれたまえ」

「よっしゃ。わかった。しかし、春木君。君はどうするんや」

「ぼくはここにのこつて、この窓から万国堂を見張っている。もうそろそろ、警部さんがくる時分だから、みんな早くいってくれたまえ」

「よっしゃ、春木君、気をつけたまえよ」

「大丈夫だいじょうぶ、君たちこそ気をつけたまえ。警部さんがくるまで、むやみに手だしをするんじゃないよ」

「わかった。わかった。さあ、みんないこう」

牛丸平太郎を先頭に立てて、四人の少年がバラバラとビルディングからとびだしていったあとには、春木少年がただひとり、暗い応接室にとりのこされた。窓のそばによってみると、ブーンブーンというヘリコプターの爆音は、いよいよこちらへちかづいてくる。下をみると、万国堂はあいかわらずまっくらだ。ああ、いま、万国堂の奥では、どのようなことが行われているのであろうか。

春木少年は爆音のちかづく空のかなたと、万国堂のくらいてんまど天窓とを、手に汗にぎって見くらべていたが、ちょうどそのとき、警部の一行が到着したらしい。

万国堂の表と裏から、けたたましくドアを叩く音とともに、

「開ける、開ける、ここを開けんか」

と、怒号どごうする声がかこえた。

「ああ、有難い、警部さんがやつてきた……」春木少年はにわかに気のゆるむのおぼえたが、そのとき空のかなたから忽然こっぜんとして現われたのは、見覚えみおぼのあるヘリコプター、しかも進路は万国堂の方向である。折からの半はんげつ月を翼つばさにうけて、ゆうゆうとしてこちらへちかづいてくる。

下では警部の一行が、万国堂の表と裏からしきりにドアを叩いていたが、なかから返事

がないとみるや、もうこれまでと、ドアをぶっこわしにかかった。しめた！ もうこうなれば袋の中の鼠ねずみも同然、あの奇怪な小男も猫女も、逃出すみちはどこにもないのだ。

春木少年はほつと胸を撫なでおろしかけたが、いやいや、安心するのはまだ早いと気がついた。気になるのはあのヘリコプターだ。ひよつとするとあのヘリコプターは、小男や猫女を、救いだしにきたのではあるまいか。

そうなのだ。やつぱりそうだったのだ。ヘリコプターはチャンウーの店のうえまでくると、ピタリと虚空こくうに停止して、しきりに地上を偵察している。

と、そのとき、万国堂のドアが破れた。バラバラと表と裏から、警部の一行が乱らん入にゅうする。おそらく少年探偵団の同志たちも、いっしょになってとびこんだことだろう。

だが、警部たちがとびこんだのとほとんど同時に、万国堂の天窓がガチャンとこわれた。そして、そこからモゾモゾ屋根へはいあがってきた人物をみたとき、春木少年は胆きもつ玉たまがでんぐりかえるほど驚いたのである。

ああ、なんとということだ。天窓の下から這はいだしてきたのは、横綱のような大男ではないか。裾すそのひきずるような中国服を着て、頭には花笠はながさのような冠かんむりをかぶっている。その冠のふちには、三重のヴェールが垂たれていた。

「あつ、四馬劍尺しばけんじやく！」春木少年は、心の中で思わずさけぶと、くらい窓のすみでふるえあがった。

春木少年はいままで一度も、四馬頭目にあつたことはない。しかし、異様いようなその風態ふうたいは、牛丸平太郎からなんども聞かされていた。鬼にもひとしい四馬頭目の残ざん忍にんぶりは、戸倉老人や牛丸平太郎から、耳にたこができるほど聞いていた。

その四馬頭目が、警官たちに包囲された、万国堂の天窓から、忽然として現れたのだ。春木少年はびつくりすると同時にあつけにとられた。四馬劍尺はいままでどこにかくれていたのだろう。いやいや、それにもまして不思議なのは、猫女や小男はどうしたのだろう。

……

春木少年が茫ぼう然ぜんとして、窓のなかに立ちすくんでいるとき、万国堂の屋根に立った四馬劍尺、かくし持った懐中電気をうえに向けると、虚空に三度輪をえがいた。と、同時に、ヘリコプターからバラリとおりてきたのは一条の縄梯子なわばしご。四馬劍尺はヨタヨタとその縄梯子に手をかけた。

ああ、このまま捨てておけば、四馬劍尺は逃げてしまう。……
春木少年はたまらなくなつて、窓から乗りだして大声で叫んだ。

「ああ、警部さん、こつちです、こつちです。悪^{わる}者^{もの}は屋根のうえから逃げていきます」
ちようどそのとき四馬剣尺は、屋根をはなれて、春木少年の鼻のさきまできていたが、その声をきくとズドンと一発！ 春木少年はあつと叫んで床のうえに身を伏せた。

しかし、春木少年の叫ぶまでもなく、警部の一行もヘリコプターの爆音に気がついていった。それ、屋^{おく}上^{じょう}が怪しいというのでバラバラと屋根のうえへあがってきたが、無念！
ひとあしちがいで四馬剣尺は、縄梯子にブラ下ったまま、ゆうゆうとして虚空を逃げていく。

ズドン、ズドン！ 警官たちの手から、いつせいにピストルが火をふいたが、もうこうなれば後^{あと}の祭^{まつり}だ。四馬剣尺のブラ下ったヘリコプターは、折からの半月の空を、しだいに遠く、小さく、すがたを消した。

ヘリコプターの爆音が、遠ざかるのを待って、床から這いあがった春木少年、非常^{ひじょう}梯^{ばし}子^ごづたいに万国堂の屋根へおりていくと、

「ああ、君か、さつき電話をかけてきたのは……せつかく注意してもらいながら、残念にも悪者はとりにがしたよ」

と、秋吉警部が歯ぎしりしながらくやしがっている。

「えっ、それじゃ、小男や猫女もにがしたのですか」

「小男や猫女……そんな、みょう妙なやつはどこにもいないぜ」

「そんなはずはありません。天窓から逃げだしたのは、横綱のような大男です。小男や猫女は、たしかにまだ万国堂のなかにいるはずですよ」

春木少年の言葉に、警官たちや少年探偵団の同志が手分して、万国堂の隅から隅までさがしてみたが、小男も猫女も、どこにもすがたが見られなかった。

ああ、いるべきはずの小男や猫女がすがたを消して、いるはずのない四馬剣尺が、忽然として万国堂の天窓から現われたというのは、いったい、どういうわけであろうか。……

春木少年はそのことについて、深くかんがえこんでいたが、やがて思いだしたように、「それはそうと、この家の主人、チャンウーさんはどうしたのですか」と、警部にたずねた。

「ああ、チャンウーか。あの男は可哀かわいそうに、ひどい目にあわされているよ。まあ、こつちへきてみたまえ」

警部に案内されて、奥のひと間へ入ったとたん、春木少年は思わずあつと、ハンカチで顔をおさえた。部屋のなかの大火鉢おおひばちには、炭火すみびがかつかつとおこっていて、あたりいち

めん、肉のこげるような匂においが充じゅう満まんしているのだ。

「見たまえ。チャンウーの足を……あの足を炭火のうえにのせ、拷ごうもん問もんしていたんだ。ひどいことをするやつもあればあるもんじやないか。まったく鬼だよ、悪魔だよ」

見れば椅子にしばりあげられたチャンウーの足は、いたいたしく火ぶくれがして血がにじんでいる。チャンウーはこの拷問にたえかねて、ぐったりと気をうしなっているのだが、ひと眼、その顔をみたたん、春木少年は思わずあつと床からとびあがった。

「あつ、こ、こ、これは戸倉老人！」

ああ、チャンウーとは戸倉老人の変へん装そうだったのである。

怪かい船せん 黒こく竜りゅう丸まる

話變まつて、こちらは四馬頭目を救い出したヘリコプターである。

海岸通りの万国堂のうえをはなれると、進路をしないで西にとり、須磨すまから明石あかしのほうへやってきたが、そこで急に進路をかえると、南方の海上へでていった。そして、淡路あわじ路じの東海岸まぞいに、大阪湾の出口のほうへでていったが、やがて淡路の島影から、意味

ありげに明滅する灯火をみると、しだいにその上空へすすんでいった。

ヘリコプターに向つて、発火信号をしていのは淡路の島かげに停泊した、三百ト
ンくらいの小汽船、その名を黒竜丸という。

ヘリコプターは黒竜丸のうえまでくると、ピタリと進行をとめ、しだいに下降してくる。
やがて繩梯子のさきが甲板にふれると、四馬剣尺はよたよたと、繩梯子から甲板におり
立つた。それを見て、バラバラとそばへ寄つてきたのは木戸と仙場甲二郎。波立二はヘリ
コプターの操縦をしているのである。

四馬剣尺は甲板に仁王立ちになり、

「おまえたちは向うへいけ。それから五分たつたら、机博士をおれの部屋へつれてこい。

よいか、わかつたか。わかつたら早くいけ」

「しかし、首領、首尾はどうだつたのです。本物の黄金メダルの半ペラは、手に入ったの
ですか」

「そんなことはどうでもいい。早くいけといえばいかんか」

首領はわれがねのような声で怒号した。これは四馬剣尺の不機嫌なときの特徴である。
そんなときにうっかりさからうと、毒棒の見舞いをうけるおそれがある。さわらぬ神に

崇りなしとばかりに、木戸と仙場甲二郎は、こそこそと甲板から下へおりていったが、そのすがたが見えなくなつてから、四馬剣尺はまたよたと歩きだした。

不思議なことに、四馬剣尺、いついかなる場合でも、自分の歩くところを乾分こぶんのものに見られるのを、ひどく嫌うくせがあつた。唯一ただ度、机博士にレントゲンにかけられたとき、いっしょに博士の部屋までいったが、そのときとても毒棒で、机博士を脅おどかして、決してうしろを向かせなかつた。そして、部下にあうときは、いつもあの竜の彫物ほりもののある大きな椅子によつてゐるのだ。

それはさておき、五分たつて木戸と波立二が、机博士をひつたてて頭目の部屋へ入つていくと、四馬剣尺はいつものように、大きな椅子にふんぞりかえつていた。

「どうだ、机博士」四馬剣尺はわれがねのような声で、

「肩の傷はなおつたか。貴様があんなところへメダルをかくしておくものだから、つい荒あ療治らりようじもせにやならん。しかも貴様があんなに苦勞して、手に入れたり、かくしたりしていた黄金メダルの半ペラが、贋物にせものだったというのだから、こんないい面つらの皮かわはない。は、は、人を呪のろわば穴二つとはこのことだな」

「ちがう、ちがう、そんなはずはない」

木戸と波立二に、左右から手をとられた机博士は、金切声かなぎりごえをふりしぼった。

「あれが贖物だなんて、そんな、そんな……あれは時代のついた古代金貨こだいきんかだ」

「そうよ、時代のついた古代金貨だ。しかし、やっぱ贖物なんだ。まあ聞け、机博士、そのわけをいま話してやろう」

四馬剣尺はゆらりと椅子から乗りだすと、

「貴様も知つてのとおり、あのメダルは、海賊王デルマが、埋めた財宝うずのありかをしるして二つにわり、ひとつをオクタン、ひとつをヘザールというふたりの部下ゆずに譲つたのだ。

このヘザールの子孫しそんというのがこのおれ、即ち四馬剣尺様だ。それからオクタンの子孫と
 いうのが、あの戸倉とぐらやそまる八十丸じや。ヘザールの子孫もオクタンの子孫も、宝をさがして東洋
 の国々を遍歴へんれきしているうちに、代々東洋人と結婚したから、しだいに東洋人の血こが濃く
 なっていったのじや。ところで、海賊王デルマにはもう一人、ツクーワという部下がおつ
 たが、こいつは肚黒はらぐろいやつで、デルマを裏切つたことがあるので、放逐ほうちくされて宝のわ
 けまえにあずからなかった。それを怨うらんでツクーワは、ヘザールとオクタンの持つている
 半ペラを、しつこく狙つていたが、ただ一度だけ、オクタンの半ペラを手に入れたことが
 ある。そのときツクーワはその半ペラの贖物をこさえておいたのだが、その後間もなく、

オクタンにつかまり、殺されて、半ペラは本物も贋物も、ふたつともオクタンの手に入ったのじゃ。貴様が手に入れて、虎の子のように後生大事ごしょうだいじにしていたのは、即ち、その昔ツクーワのつくった贋物で、しかも、ツクーワとは誰であろう、机博士、貴様の先祖だぞ。どうだ、これでわかつたろう。先祖がつくった贋物に、子孫のものが欺あざむかれる。世の中にこれほど滑稽こっけいなことがあるか。わっはっはっ！」

われ鐘のような声で笑いとばされ、机博士はいっぺんにペシヤンコになった。四馬剣尺はしばらく、腹をかかえてわらっていたが、やがてやつと笑いやめると、

「いや、しかし、机博士、おれはやつぱり貴様に礼をいわねばならぬわい。おれは今夜、戸倉のやつがチャンウーという中国人に化けていることを知って、忍びこんで、本物を吐きださせようと拷問ごうもんしたが、強情ごうじやうなやつでとうとう吐きださなかった。それで、ものはためしに贋物で間にあわそうと思っっているのだ。これがヘザールからつたわった扇おうぎ型の半ペラ、これは本物だ。それからこつちが、机博士の肩の肉からでてきた、三日月型の半ペラ、こいつはいまいうとおりの贋物だ」

と、四馬剣尺がデスクのうえにならべてみせた。二つの黄金メダルの半ペラをみて、木戸と波立二が思わずあつと顔見合せた。

「頭目、そ、その扇型のやつはどうしたのです。それはいつか、猫女めに横奪りよこどされたはずじゃありませんか」

木戸の言葉に、四馬剣尺ははっとした様子だったが、すぐさりげなくせせら笑って、「なに、猫女から取りもどしたのよ。たかが知れた猫女、取り戻すのに雑作ぞうさくはないわい。さて、この半ペラをふたつあわすと、われ目も文句もびったりあう、だから、ここに彫つてあるこの文句は、贋物とはいえ、本物どおりに彫つたにちがいないと思うんだ。みる、これが苦心くしんの末すえ、おれが翻訳した文章なのだ」

四馬剣尺が、ふところより取りだした紙かみきれ片をみて、机博士は禿鷹はげたかのようにどんらんな眼を光らせた。

そこには、こんなことが書いてある。

三日月型の分

わが秘密を

とする者はいさ

人して仲よく

り聖骨を守る

のあとに現われ

メダル右破片

左の穴に同時

ただちに

強く押すべし

正しく従うなら

らの前に開かれん

扇型の分

うけつがん

かいをやめ両

ヘクザ館の塔にのぼ

二匹の鱧がくぎよ魚を取除きそ

たるそれぞれの穴に金

を右の穴に左破片を

に押入れ、それより

ふたつのメダルを

なんじ
汝らわが命令に

ば金庫は自ら汝

戦闘準備

残酷な悪魔の頭目、四馬剣尺のために、両脚に大火傷をした戸倉八十丸老人は、あれからすぐに、病院へかつきこまれたが、さいわい、その後、経過は良好で、一週間もすると、ステッキ片手に、病院の庭を、散歩できるようになった。

その戸倉老人を、毎日のように見舞いにくるのは、少年探偵団の同志五人。探偵長株の春木少年をはじめとして、牛丸平太郎に田畑、横光、小玉の三少年である。

戸倉老人というひとは、海賊の宝を追うて生涯をばげしい冒険にささげてきただけに、いまだ家庭のあたたかみというものを知らず、ましてや、子供の可愛さなど、いままで一度も考えたことのないひとだが、今度、こうして思わぬ負傷をし、病院で退屈をもてあ

ましている折柄おりかた、毎日のように少年たちの見舞いをうけると、いまさら子供の可愛さ、無邪気さむじやきというものをひしひしと感じ、平和な生活へのあこがれを、日一日と強くするのであった。

「ああ、おれももう年だ。一日も早く危険な冒険の世界から足をあらって、毎日こうして、子供たちと楽しく暮らしていきたいものだ」

戸倉老人の心には、そういう考えがしだいに深くなっていくのだが、少年たちはそれと反対に、戸倉老人の口から過ぎこしかたの冒険談をきくことを、このうえもなくよろこんだ。

アフリカの猛獣狩りもうじゆうが、熱帯での鰐退治わにたいじ、サワラ砂漠の砂嵐すなあらし、さてはまた、嵐に遭遇して、無人島へ吹きよせられた難破船なんぼせんの話など、戸倉老人の口から綿々として語りつがれるとき、少年たちはどんなに血を湧かせわ、肉を躍おどらせたことだろう。少年たちは、いつの日にか、自分たちも、そういう冒険談の主人公になってみたいと夢想するのだった。

ああ、戸倉老人が平和を愛し、少年たちが、冒険に憧れるあこが、そこにこそ、人生の本当のすがたがあり、世界の進歩も、それなくしては得られないのだ。

それはさておき、今日も今日とて、見舞いにきてくれた五少年をあつめて、戸倉老人が

楽しそうに昔の思い出を語っているところへ、やってきたのが秋吉警部。

「やあ、相変らず、みんなきてるな」

「ああ、警部さん、今日は」

「警部さん、今日は」

少年探偵団の同志五人が、帽子をとって、警部ににこにこ挨拶あいさつをするのを、戸倉老人は眼を細めて眺めながら、

「警部さん、聞いて下さい。この子たちが毎日きてくれるので、わしはどんなに楽しみだか知れません。ちかごろではもう、すっかり子供にかえった気持ちで、いつまでも、こうして、平和に暮したいと思うくらいです」

「ははははは、あなたも変りましたな。しかし戸倉さん、あなたが、そういうふうには平和を愛されるようになったのは結構だが、そのまえに、ぜひとも解決しておかねばならぬ問題がありますよ」

「むろんです。あの四馬剣尺のことでしょう。わしはもちろん、最後まであいつと闘う決心じゃが、警部さん、その後、あいつらの動勢どうせいについて、何か情報が入りましたか」

「はあ、若干の情報は入っています。しかし、戸倉さん、それよりまえにお聞きしたいの

だが、あなたと四馬剣尺とは、いったい、どういう関係なのですか」

それをきくと戸倉老人は、しばらく眼をつむつて考えていたが、やがてかっつとそれを開くと、

「いや、お話ししましょう。もう、こうなつては、何もかも洗いざらい打明けて、あなたがたの御援助をこうよりほかにみちはない。まあ、聞いて下さい。こういうわけです」

と、そこで戸倉老人が打明けたのは、いつか山姫山の山小屋で、春木、牛丸の二少年に語つてきかせた話だが、戸倉老人はさらに言葉をついで、

「つまり、海賊王デルマから、黄金メダルの半ペラを譲られた、オクタン、ヘザールの二人の子孫というのが、この戸倉と、四馬剣尺のふたりだが、この四馬剣尺というのは、まことに疑問の人物で、わしの聞いているところでは、ヘザールの子孫というのは、幼いときに病気にかかつて、それきり身体が発育せず、いままでは小男になっているということ、を耳にした。それでも、年頃になると結婚して、娘がひとりできたということだが、まさか、その娘が、あの横綱のような大女であるはずがない。だから、わしにはどうも、あの四馬剣尺という覆面の頭目が何者だか、さっぱり見当がつかんのじゃ」

戸倉老人の話をきいて、春木少年はキラリと眼をひからせたが、かれが口をひらくまえ

に、秋吉警部がからだを乗りだして、

「なるほど、なるほど、それでだいたい事情はわかりましたが、いつか殺されたチャンフーというのは……」

「ああ、あれですか」老人はちよつと暗い顔をして、

「あれは、まったく可哀そうなことをしました。なにあれば、わしの双生児ふたごでもなんでもなく。海外を放浪ほうろううちゆう中、わしに生きうつしなところから、何かの役に立つだろうと思つて、ひろつてきた男じや。四馬剣尺の眼をくらすために、わしはチャンフーと名乗つて、あの万国骨董堂をひらいたが、わしはしじゆう、出歩かねばならぬからだじや。そこで、近所のものに怪しまれてはならぬと思つて、わしの留守中は、いつもあの男に影武者かげむしやをつとめさせていたのじや。それがあのようなことになつて……」

戸倉老人は眼をしばたいたが、なるほど、これで、はじめてわかった。いつか山姫山の山小屋で、戸倉老人が断乎だんことして、チャンフーが殺されたなんて、そんなことはありえないのじや、といふ放つた言葉の意味が、これではじめて、納得できるのである。

まことのチャンフーとは、戸倉老人自身であつたのだ。

「なるほど、それでだいたいの事情はわかりました。それでは、私のほうに入った情報を

お話しましょう」

秋吉警部は手帳をひらいて、

「御老人からいつか、淡路島あわじしま 一帯を捜索そうさくしてみたくれというお話があったので、あちらの警察とも連絡をとって、虱しらみつぶしに島内から、その沿岸えんがんをしらべたのですが、すると果然かぜん、耳よりな情報が入ったのです。まず、そのひとつは、淡路島の周しゅう囲ういを、おりおり、怪しげな汽船が周遊しゅうゆうしているということ、それについて、ときどき、深夜しんや淡路島の上空に、竹トンボのような音がきこえるということ、更に、その竹トンボの音が常に旋回する中心をさぐってみると、そこはヘクザ館かんという、古い西洋建築があることがわかったのです」

「それだ！」突然、戸倉老人が手を叩いて叫んだ。

「それです、それです、警部さん、問題はそのヘクザ館にあるにちがいありません。海賊王デルマが、淡路島に根拠地こんこちをおいていたということは、古い文献ぶんけんにも残っています。その当時、デルマは善良ぜんりょう 良りょうな宣教師せんきょうしをよそおい、島の中央に、カトリックの教会を建てたといわれています。ヘクザ館というのが、きつと、それにちがいありません。そこに、海賊王デルマの宝がかくされているのです」

戸倉老人の声は、しだいに昂奮こうふんにうわずつてくる。その昂奮が伝染したのか、少年探偵団の同志たちも手に汗握あせぎつて、戸倉老人と秋吉警部の顔を見くらべている。

秋吉警部もにつこり笑つて、

「そうです。われわれもだいたい、そういう見込で、ヘクザ館には厳重げんじゆうな監視かんしをおいています。ところで戸倉さん、あなたの戦闘準備はどうですか。脚のぐあいがよかったら、いつしよにでかけたら、どうかと思うのですがね」

「むろん、いきます。なに、これしきの火傷ぐらい」

「警部さん！」そのとき、横から緊張した声をかけたのは、少年探偵団の探偵長、春木少年だった。

「ぼくたちもつれていって下さい。ぼくたちも四馬剣尺の正体を知りたいのです」

それを聞くと秋吉警部も微笑びしょうして、

「むろんつれていくとも、君たちこそは今度の事件でも、最大の功労者なんだからね」

ああ、こうして、戦闘準備はなつた。兇悪きようあく四馬剣尺を向うにまわして、少年探偵団の働きやいかに。淡路島の上空に、いまや、ただならぬ風雲がまきおこされようとしている。

ヘクザ館かん

淡路島あわじしまの中央部、人里ひとざとはなれた山岳地帯のおくに、ヘクザ館という建物がある。

その昔、国内麻の葉のごとく乱れた戦国の世に、スペインよりわたってきた、一宣教師によつて建てられたという伝説以外、誰もこの、ヘクザ館の由来ゆらいを知っているものはない。爾来じらい、幾星霜いくせいそう、風雨ふううにうたれたヘクザ館は、古色蒼然こしよくそうぜんとして、荒れ果ててはいるが、幸いにして火にも焼かれず、水にもおかさねず、いまもつて淡路島の中央山岳地帯に、屹然きつぜんとしてそびえている。

いつのころか、ここはカトリックの修道院しゅうどういんになつて、道德堅固けんこな外国の僧侶そうりよたちが、女人禁制きんせいの、清い、きびしい生活を送り、朝夕、聖母せいぼマリヤに対する礼拝らいはいを怠らない。

それは秋もようやくたけた十一月のおわりのこと、二人の教師に引率いんそつされた中学生五名が、このヘクザ館を見学にきた。

教師のうちの年老いたほうが、院長に面会して、館内を参観させてもらえないかと申込

むと、スペイン人系の老院長はすぐ快く承諾して、若い修道僧を呼んでくれた。

「ロザリオ、このひとたちが、ヘクザ館の内部を参観したいとおっしゃる。おまえ御苦労でも、案内してあげなさい」

「は、承知しました」

長年日本に住みなれているだけあって、ヘクザ館に住む僧侶たちは、みんな日本語が上手であった。

「では、皆さん、私についておいで下さい」

「いや、どうも有難うございます」

むろん、この中学生の一行というのは、戸倉老人に秋吉警部、それから少年探偵団の同志五人である。みんなてんでに、スケッチブックやカメラなどをたずさえているが、かれらの真の目的が、写生や撮影にあるのではなく、館内の様子偵察にあることはいうまでもない。

古びて、ぼろぼろに朽ち果てた館内をひととおり見終ると、やがて若い僧侶ロザリオは、一行をヘクザの塔に案内した。この塔こそはヘクザ館の名物で、山岳地帯にそびえる古塔は、森林のなかに屹立して、十里四方から望見されるといふ。

「おお、なるほど、これはよい見晴しですな」

塔のてっぺんにのぼったとき、老教授に扮した戸倉老人は、眼下を見下ろし、思わず感嘆の呟きをもらした。

いかにもそれは、世にも見事な眺めであった。東を見れば、大阪湾をへだてて紀伊半島が、西を見れば海峽をへだてて四国の山々、更に瀬戸内海にうかぶ島々が、手にとるように見渡せるのである。

「はい、ここはヘクザ館の内部でも、一番聖なる場所としてあります。されば、初代院長様の聖骨も、この塔のなかにおさめてあるのでございます。あれ、ごらんないませ。あの壇のうえにおさめてあるのが、その聖骨の壺でございます」

と、見れば円型をなした室内の正面には、大きな十字架をかけた翁があり、その翁のまえには、聖壇がつくつてあり、その聖壇のうえに黄金の壺がおいてある。そして、その黄金の壺の左右には、これまた黄金でつくった二匹の鰐魚が、あたかも聖骨を守るのごとく、うづくまつているのである。

戸倉老人はそれを見ると、ふと、黄金メダルの半ペラに書かれた文字を思いだした。わが秘密を……とする者はいさ……人して仲よく……り聖骨を守る……のあとに現われ

……（以下略）

もう一方の半ペラがないから、完全な意味はわからないが、聖骨を守る……という言葉があるからには、黄金メダルに書かれた文句は、この塔内の、この一室を指しているのではあるまいか。

そうなのだ！

それにちがいないのだ。しかし、そうはわかっても、黄金メダルの他の半ペラのない悲しさは、それ以上の謎は解きようもない。それはさておき、館内の見物に手間どっているうちに、すっかり日が暮れて、雨さえポツポツ降ってきた。まえにもいったとおり、ヘクザ館は人里離れた山岳地帯にあるのだから、こうなつては、辞去することもできないのである。一行は途方にくれた面持ちをしていると、親切な老院長が、一晩泊つておいでなさいとすすめてくれた。そして、粗末ながらも、夜食をふるまってくれたのである。

実をいうと、これこそ、一行の思う壺であつた。わざと参観に手間どつたのも、ここで一夜を明したいばかりであつた。

さて、一行七人、館内の二階にある、ひろい寝室へ案内されると、すぐに額をあつめて協議をはじめた。

「問題はあの塔にあると思うのじゃがな。みんなも見たろうが、初代院長の聖骨をおさめ
てある壇、あの周囲がくさいと思うがどうじゃ」

「小父おじさん、そうすると、四馬剣尺もあの塔を狙っているというのですか」

「ふむ、たしかにそうだと思う。それでどうじやろう。今夜四馬剣尺がやってくるかどうかは疑問だが、ひとつ、あの塔を、われわれの手で調べてみようじやないか」

それに対して、誰も反対をとねえるものはなかった。

そこで修道僧たちが寝しずまるのを待って、一行七人、こっそり寢室を抜けだすと、やってきたのは古塔の一室。

時刻はすでに十二時を過ぎて、宵よいから降り出した雨は、ようやく本降りとなり、昼間はあれほど眺望ちようぼうの美を誇ほこった塔のてっぺんも、いまや黒暗こくあん々たる闇やみにつつまれている。一行はその闇のなかを、懐中電氣の光をたよりに、あの聖壇のまえまできたが、そのときである。少年探偵団のひとりの横光君があつと小さい叫びをあげた。

「ど、どうしたの、横光君……」

「あの音……ほら、ブーンブーンという竹トンボのような音……」

それを聞くと一同は、ギョツとしたように闇のなかで息をのんだが、ああ、なるほど、

聞える、聞える、降りしきる雨の音にまじって、ブーンブーンとヘリコプターの唸り声。しかも、その音が、またたくまにヘクザ館の上空へちかづいてきたかと思うと、やがて、さつと上から探照灯の光が降ってきた。

「あつ、しまった。ヘクザ館のありかを探しているのだ」

戸倉老人が叫んだとき、ダダダダダと物凄^{ものすご}い音を立てて、機関銃がうなりだした。ヘリコプターのうえからヘクザ館の周囲にむかって、機関銃の雨を降らせているのである。

「危い。みんな、物陰^{ものかげ}にかくれろ」

一行七人、蜘蛛^{くも}の巣^すを散らすごとく、四方の壁にちると、カーテンのうしろに身をかくした。

ダダダダダダダダダダ！

機関銃のうなりはひとしきりつづいて、ヘクザ館の周囲の森に、弾丸が雨霰^{あめあられ}と降ってくる。

だいだんえん
大団円

やがて、機銃のうなりがピツタリやむと、ヘリコプターはヘクザ館の上空に停止したらしく、ブーンブーンといううなり声が、同じ方向から落ちてくる。

ああ、わかった。わかった、四馬剣尺しばけんじやくは今夜、空からヘクザ館を襲撃しようとするのだ。そして、そのために、誰もヘクザ館の塔へ近寄せぬよう、空から威嚇射撃いかくしゃげきをやつたのだ。修道僧たちは、おそらく、蒼あおくなつて、自分の部屋でちぢこまっていることだろう。ああ、なんとという、傍若無人ぼうじやくぶじんの悪虐振り！

少年探偵団の同志五人、それに戸倉老人と秋吉警部が、いきをこらしてカーテンのかけにかくれていると、知るや知らずや、やがて忽然こつぜんとして、塔のなかへ入ってきたのは、木戸に仙場甲二郎それにつづいて机博士、最後が覆面の四馬剣尺。ヘリコプターが照らす探照灯たんしょうとうの光のために塔のなかは、昼よりもまだ明るいのである。一同はいま、ヘリコプターから繩梯子なわはしごづたいにおりてきたのであろう。脚が少しフラついていた。

「やい、机博士」四馬剣尺はヨチヨチとした足どりで、聖壇のまえまで近寄ると、われがねのような声で怒鳴どなった。

「さあ、いよいよ宝の山へやってきたぞ。いまわしが手を下せば、宝はたちどころにわしの手に入るのだ。どうだ。うらやましいか。貴様もおとなしくしていれば、少しはわけま

えにあずかれるのに、わしを裏切ったばかりに、宝の山へ入っても、手を空しゆうしてかえるよりほかはないのじゃ。わっはっは、わっはっは、わっはっは！」

四馬剣尺が腹をかかえて笑っているとき、ギリギリと奥歯をかみ鳴らした机博士、物ものす凄ごい形ぎようそ相そうをしたかと思うと、いきなり四馬剣尺の体を背後はいごからつきとばした。

と、これはどうだ。

あのいわおのような体をした覆ふくめん面の頭目の体がふがいなくもフラフラよろめいたかと思うと、やがて、腰のへんからふたつに折れて、ドシンと床にひっくりかえった。

「おのれ！」四馬剣尺は覆面のなかで叫んだが、どういうものか、モガモガ床で、もがくばかりで、なかなか起きあがることができなのだ。木戸と仙場甲二郎が呆あっけ気にとられてみていると、やがて、四馬剣尺のダブダブの服のなかから、ピヨコンととびだしてきたものは、ああなんと、小男と立花カツミ先生ではないか。

カーテンの陰にかくれていた七人も驚おどろいたが、それにも増してびっくりしたのは木戸と仙場甲二郎。まるで蛙かえるでも踏んづけたように、ギャツと叫んでとびあがった。

このなかにあつて、唯ひとり、腹をかかえて笑いころげているのは、悪魔あくまのような机博士だ。

「わっはっは、わっはっは、東西東西、覆面の頭目、四馬剣尺の正体とは、男のような女に肩車かたぐるましてもらった小男とござあい。わっはっ、わはっはっは！ やい、その女、貴様は小男の娘だろう。そして、猫女とは貴様のことだな。貴様は親爺おやじと同じ服のなかに入って、われわれをさんざんおもちゃにしやがった。やい、木戸、仙場甲二郎、相手はこんな小男と、たかが女とわかっちゃ何も恐れることはないんだ。こんなやつのこと聞くより、この机先生の乾分こぶんになれ。そいつらふたりをやっつけてしまえ」

だが、このとき、机博士は、四馬剣尺の恐ろしい武器のことを忘れていたのだ。

机博士は、最後の言葉もおわらぬうちに、

「あっちちちち」と、叫んで右の眼をおさえた。見ると、太い針がぐさりと右の眼につきささっている。

「あっちちちち」

机博士はふたたび叫んで、今度は左の眼をおさえた。同じような太い銀の針が左の眼にもつつ立っている。

「あっちちちち、あっちちちち、わっ、た、助けて……」

小男のかまえた毒棒どくぼうからは、まるで一本の糸のようにつきからつきへと毒針どくばりがとび

だしてくる。机博士はみるみるうちに、全身ぜんしん針鼠はりねずみのようになって、床のうえに倒れ、しばらく七転八倒しちてんぱつとうしていたが、やがて、ピッタリ動かなくなった。

これが悪魔のような机博士の最期さいぎだったのだ。

小男はヒヒヒヒと咽喉のどの奥でわらうと、

「どうだ、木戸、仙場甲二郎、おれの腕前はわかったか。おれを裏切ろうとするものはすべてこのとおりだ。どうだわかったか」

「シュ、シュ、首領……」

木戸と仙場甲二郎は、あまりの恐ろしさにガタガタふるえながら、

「あつしは何も首領を裏切ろうなどと……」

「そうか、おれが小男とわかってもか。ふふふ、なるほど、おれは小男だが、ここにいる娘は恐ろしいやつよ。こいつはな、暗闇くらやみでも眼が見えるのだ、そして、男より力が強く、人を殺すことなど、屁へとも思っていないのだ」

「お父さん、何をぐずぐずいつてるのよ。それより早く、鰐魚がくぎよをのけて、二つの穴に黄金メダルを入れなさいよ」

ああ、恐るべき立花カツミ。彼女は机博士が針鼠のようになって死ぬのを見ても、平然

として眉まゆひとつ動かさなかったのだ。

「よし、よし、おい、木戸、仙場甲二郎、その壇だんのうえにある鰐魚を二つともかけてみる。ああ、のけたか、のけたらそこに、穴が二つあるはずだが、どうだ」

「はい、首領かしら、ございます、ございます」

「ふむ、あるか、それではな、このメダルをひとつずつ入れてみる。右の穴には右の半ペラ、左の穴には左の半ペラ……入れたか、よし、それじゃアな。おれが号令ごうれいをかけるから、それといっしょにぐつと押ししてみるんだぞ、一イ……二イ……三！」

そのとたん、轟然ごうぜんたる音響おんきょうが、ヘクザ館の塔をつらぬいて、暗い夜空につつ走った。カーテンのかげにかくれていた一行七人は、一瞬いつしゆん、足下が水にうかぶ木の葉のようにゆれるのをかんじたが、つぎの瞬間、こわごわカーテンのかげから顔をだしてみると、こはそもいかに、木戸も仙場甲二郎も、小男も猫女も立花カツミ先生も、さてまた、針鼠のようになつて死んだ机博士も、みんなみんな影も形もなくなっているではないか。春木少年はちよつとの間ま、狐きつねにつままれたような顔をしていたが、やがてこわごわカーテンから外へでると、

「ああ、みんなきて下さい。あれあれ、あんなところに……」

その声に、一同がバラバラとカーテンの影からとびだしてみると、聖壇せいだんのまえ方六メートルばかり、ぽっかりと床に大きな穴があいていて、そのなかを覗のぞいてみると、数十メートルのはるか下に、黒ずんだ水がはげしく渦うずをまいていた。そして、その渦にまきこまれ、小男も、立花カツミ先生も、机博士も、木戸、仙場甲二郎も、みるみるうちに水底ふかく沈んでいったのである。

「おとし穴ですね」

「ふむ、おとし穴だ」秋吉警部は顔の汗をぬぐいながら、

「しかし、どうしてあんなことになったのでしょうか。黄金メダルに書いてあることは、それでは、ひとをおとし入れるための、嘘うそだったのでしょうか」

戸倉老人はそれには答えず、聖壇の左の穴にはめこまれた黄金メダルの半ペラを取りだして、裏面りめんに彫ほられた文字を読んでいたが、やがてにつこり笑うと、

「わかりました、かれらはこの贗物にせものの半ペラにかかれた文句にだまされたのです。わしの持っている本物にはね、二つの半ペラを穴のなかに入れると、それより（壁際かべがわに身を避け）ふたつのメダルを、（長き竿さおにて押すべし）と、なっているのです。ところがこの贗物では、それよりただちにふたつのメダルを（強く押すべし）となっています。そのた

めに、海賊王^{かいぞくおう}デルマが万一の場合の用意につくっておいた、罾^{わな}のなかにおちたのです」

ああ、それというのも自業自得^{じごうじとく}だったろう。

それはさておき、一同がおとし穴に氣をとられているとき、キョロキョロとあたりを見廻^{まわ}していた牛丸平太郎が、突然^{とつぜん}、

「あつ」と、素つ頓^{とんきよう}狂^{きやう}な声をあげた。

「あれを見い、みんな、あれを見い、えらい宝や、宝の山が吹きこぼれてるがな」

その声に、弾^{はじ}かれたようにふりかえった一同の眼にうつったのは、十字架のかかった翁^{きゆうう}が真二つにわれて、そこからザクザクと聖壇のうえに吹きこぼれてくる、古代金貨に宝^{ほうぎ}

玉^{よく}の類……ヘクザ館の塔なる聖壇のうえには、みるみるうちに七色の宝の山がきずかれていったのである。……

四馬剣尺を頭目とする、悪人一味はすべて滅んだ。唯一人、ヘリコプターに乗った波立二のみは、その後、杳^{よう}として消息がわからなかつたが、首領を失ったかれに何ができよう。その後、紀伊半島の沖合^{おきあい}に、ヘリコプターの破片らしいものがうかんでいるのを見たものがあるというが、あるいはそれが、波立二の最後を物語っているのではあるまいか。

ヘクザ館から発見された宝石や古代金貨の噂は、たちまち全世界に喧伝された。それはいまの金に換算すると、零という字を、いくつつけてよいかわからぬほど、莫大なものになろうという。

それらの財宝は、すべて、日本の教育復興のために使用されることになり、戸倉老人や少年探偵団、さてはまた、秋吉警部たちは、それから一銭の利益も得ることはなかった。

それにもかかわらず、いや、それだからこそ、戸倉老人も、少年探偵団の同志たちも幸福だった。

戸倉老人はその後、海岸通りの店を売りはらって、思いでの淡路島を眼のまえに見る、明石の丘に一軒の家を建てた。そして、いまでは草花を作りながら、静かに余生を送っている。その戸倉老人の何よりの楽しみは、土曜から日曜にかけて、泊りがけで遊びにくる、少年探偵団の同志たちに、御馳走をすることであるという。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第13巻 少年探偵長」三一書房

1992（平成4）年2月29日第1版第1刷発行

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2002年1月12日公開

2006年7月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

少年探偵長

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>